

史跡旧二条離宮（二条城）

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告

二〇〇九―一五

史跡旧二条離宮（二条城）

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、防災・防犯整備工事に伴う史跡旧二条離宮（二条城）の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 22 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡旧二条離宮（二条城）・平安京跡
- 2 調査所在地 京都市中京区二条通堀川西入二条城町 541 番地 二条城
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2009 年 11 月 4 日～ 2010 年 1 月 27 日
- 5 調査面積 749 m²
- 6 調査担当者 大立目一・柏田有香・丸川義広・南出俊彦・山本雅和
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「聚楽廻」・「壬生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 調査区名 A区～W区までの調査区名を付した。ただし、J区・L区は欠番である。
- 12 遺構番号 緑の園・二の丸・本丸の各区域で通し番号を付し、調査区名・遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 本書作成 山本雅和
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

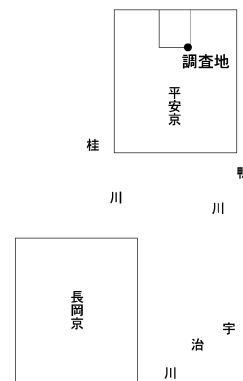
- 16 調査・遺物整理にあたっては、元離宮二条城の防災設備工事に係る協議会委員の尼崎博正、上原真人、武田恒夫、西 和夫、橋本初子（敬称略

50 音順）の皆さまに御指導いただいた。



また、下記の方々からもご教示をいただいた。

高 正 龍、鈴木久男、松尾信裕、森岡秀人、森島康雄（敬称略 50 音順）



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査の経過	1
2. 遺 跡	5
(1) 遺跡の位置と環境	5
(2) 周辺の調査	7
3. 遺 構	9
(1) 遺構の概要	9
(2) A区の調査	10
(3) B区の調査	12
(4) C区の調査	17
(5) D区の調査	19
(6) E区の調査	26
(7) F区の調査	28
(8) G区の調査	30
(9) H区の調査	33
(10) I区の調査	35
(11) K区の調査	39
(12) M区の調査	40
(13) N区の調査	43
(14) O区の調査	44
(15) P区の調査	48
(16) Q区の調査	54
(17) R区の調査	57
(18) S区の調査	60
(19) T区の調査	61
(20) U区の調査	63
(21) V区の調査	65
(22) W区の調査	67
4. 遺 物	68
(1) 遺物の概要	68
(2) 土器類	68
(3) 瓦類	72
(4) 土製品	87

(5) 石製品	87
(6) 金属製品	89
(7) 木製品	91
(8) その他の出土遺物	91
5. ま と め	91
(1) 二条城造営前の遺構と遺物	91
(2) 二条城の遺構の変遷	92
(3) 瓦の種類と用途	95

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	A区第1面（南から）
		2	A区第2面（北から）
		3	A区第3面（北から）
		4	A区第3面路面細部（上から）
		5	A区西壁（南東から）
図版 2	遺構	1	B区第1面（東北東から）
		2	B区北西側拡張部第1面（北東から）
		3	B区北西側拡張部第2面（西北西から）
		4	B区西端断割（北から）
図版 3	遺構	1	B区南西側拡張部第1面（北から）
		2	B区南西側拡張部第2-1面（北から）
		3	B区南西側拡張部第2-2面（東から）
		4	B区南西側拡張部第3面（東から）
図版 4	遺構	1	B区南西側拡張部第4面（東から）
		2	B区南西側拡張部第3面路面細部（上から）
		3	B区南西側拡張部第4面路面細部（上から）
		4	B区南西側拡張部南壁（北東から）
図版 5	遺構	1	C区第1面（南から）
		2	C区第2-1面（南から）
		3	C区第2-2面（南から）
		4	C区西壁（南東から）

- 5 E区第1-1面（東から）
- 6 E区第1-2面（南から）
- 7 E区第2面（南から）
- 8 E区西壁（南東から）
- 図版6 遺構 1 D区北部第1面（東北東から）
- 2 D区北部第2面（東北東から）
- 図版7 遺構 1 D区北部木樋88（南東から）
- 2 D区北部木樋88細部（南東から）
- 3 D区北部木樋88西壁断面（東から）
- 4 D区北部第3面（東から）
- 図版8 遺構 1 D区南部第1面（南から）
- 2 D区南部北半第1面（南東から）
- 図版9 遺構 1 D区南部南半第2面（北から）
- 2 D区南部石列92（東から）
- 図版10 遺構 1 F区第1面（東から）
- 2 F区第2面（東から）
- 3 F区放水銃部分第3面（南から）
- 4 F区南壁（北から）
- 図版11 遺構 1 G区第2面（東から）
- 2 G区第1面（東から）
- 3 G区西側放水銃部分第3面（南から）
- 4 G区北壁（南から）
- 図版12 遺構 1 H区第1面（西南西から）
- 2 H区第2面（西南西から）
- 3 H区第3面（西から）
- 4 H区東半第1面（北東から）
- 5 H区東半北壁（西南西から）
- 図版13 遺構 1 I区第1面（北から）
- 2 I区石42（南西から）
- 3 I区北側拡張部第1面（西から）
- 4 I区第2面（北から）
- 5 I区第3面（北から）
- 図版14 遺構 1 I区第4面（北から）
- 2 I区第4面焼土層（東から）
- 3 I区南側放水銃部分第4面（西から）

- 4 I区東壁（北西から）
- 図版 15 遺構 1 K区遠景（南東から）
2 K区第1面（東から）
3 K区第2面（東から）
4 K区第2面石敷細部（南から）
5 K区北壁（南東から）
- 図版 16 遺構 1 M区第1面（南から）
2 M区第1面柱穴列（北から）
3 M区第2面（南から）
4 M区放水銃部分第3面（南から）
5 M区東壁（南南西から）
- 図版 17 遺構 1 N区遠景（北西から）
2 N区第1-2面（西南西から）
- 図版 18 遺構 O区第1面（北から）
- 図版 19 遺構 1 O区石 75（西から）
2 O区石 79（北から）
3 O区放水銃部分第1面（西から）
4 O区溝 21（北から）
5 O区放水銃部分第2面（西から）
6 O区南端部北壁（南から）
- 図版 20 遺構 1 P区第1面（東北東から）
2 P区溝 20（南から）
3 P区溝 24（北から）
- 図版 21 遺構 1 P区東部第2面（北東から）
2 P区東部第3面（南西から）
- 図版 22 遺構 1 P区西部第1面（東から）
2 P区石 84（南から）
3 P区石 84（東から）
4 P区西部第2面（東から）
5 P区西部放水銃部分第3面（西から）
6 P区西部南壁（東北東から）
- 図版 23 遺構 1 Q区第1面（北から）
2 Q区放水銃部分第1面（東から）
3 Q区溝 107（東から）
4 Q区第2面（北から）

- 5 Q区放水銃部分第3面（南東から）
6 Q区東壁（北西から）
- 図版 24 遺構 1 R区北部北半第1面（北から）
2 R区北部南半第1面（北から）
3 R区南部第1面（北西から）
- 図版 25 遺構 1 R区南部石 99（西から）
2 R区南部石 103（北東から）
3 R区南部放水銃部分第2面（西から）
4 R区南部南壁（北から）
5 S区第1面（南から）
6 S区第2面（南東から）
7 S区北壁（南から）
- 図版 26 遺構 1 T区第1面（西北西から）
2 T区第2面（西北西から）
3 T区放水銃部分第2面（北から）
4 T区北壁（南東から）
- 図版 27 遺構 1 U区第1面（西から）
2 U区第2面（東から）
3 U区第3面（東から）
4 U区北壁（西南西から）
- 図版 28 遺構 1 V区第1-1面（北西から）
2 V区第1-2面（北から）
3 V区第2面（西から）
- 図版 29 遺構 1 V区第3面（南から）
2 V区放水銃部分第3面（南から）
3 V区北壁（南から）
4 W区第1面（西から）
- 図版 30 遺物 菊丸瓦
- 図版 31 遺物 1 熨斗瓦
2 輪違瓦
- 図版 32 遺物 金属製品

挿 図 目 次

図 1	調査区位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査区配置図 1 (緑の園 1 : 1,000)	2
図 3	調査区配置図 2 (本丸 1 : 1,000)	2
図 4	調査区配置図 3 (二の丸 1 : 1,000)	3
図 5	調査前状況	4
図 6	作業状況	4
図 7	周辺調査位置図 (1 : 2,500)	5
図 8	A区断面図 (1 : 50)	10
図 9	A区平面図 (1 : 100)	11
図 10	B区断面図 1 (1 : 50)	13
図 11	B区断面図 2 (1 : 50)	14
図 12	B区断面図 3 (1 : 50)	15
図 13	B区平面図 (1 : 200)	16
図 14	C区断面図 (1 : 50)	18
図 15	C区平面図 (1 : 100)	18
図 16	D区北部断面図 (1 : 50)	20
図 17	D区北部平面図 (1 : 100)	21
図 18	D区木樋 88 実測図 (1 : 40)	22
図 19	D区南部断面図 (1 : 50)	24
図 20	D区南部平面図 (1 : 100)	25
図 21	D区石列 92 実測図 (1 : 40)	26
図 22	E区断面図 (1 : 50)	27
図 23	E区平面図 (1 : 100)	27
図 24	F区断面図 (1 : 50)	28
図 25	F区平面図 (1 : 100)	29
図 26	G区断面図 (1 : 50)	31
図 27	G区平面図 (1 : 100)	32
図 28	H区断面図 (1 : 50)	34
図 29	H区平面図 (1 : 100)	36
図 30	I区断面図 (1 : 50)	37
図 31	I区平面図 (1 : 100)	38

図 32	K区断面図 (1 : 50)	40
図 33	K区平面図 (1 : 100)	40
図 34	M区断面図 (1 : 50)	41
図 35	M区平面図 (1 : 100)、溝 205 断面図 (1 : 50)	42
図 36	N区断面図 (1 : 50)	43
図 37	N区平面図 (1 : 50)	43
図 38	O区断面図 (1 : 50)	44
図 39	O区平面図 (1 : 100)	46
図 40	O区礎石列実測図 (1 : 40)	47
図 41	P区東部断面図 (1 : 50)	49
図 42	P区西部断面図 (1 : 50)	50
図 43	P区東部平面図 (1 : 100)	51
図 44	P区西部平面図 (1 : 100)	52
図 45	P区溝 20 実測図 (1 : 40)	53
図 46	P区溝 24 実測図 (1 : 40)	53
図 47	P区西部礎石列実測図 (1 : 40)	53
図 48	Q区断面図 (1 : 50)	54
図 49	Q区平面図 (1 : 100)	55
図 50	Q区礎石列・溝 107 実測図 (1 : 40)	56
図 51	R区北部断面図 (1 : 50)	57
図 52	R区南部断面図 (1 : 50)	58
図 53	R区平面図 (1 : 100)	59
図 54	S区断面図 (1 : 50)	60
図 55	S区平面図 (1 : 100)	61
図 56	S区溝 27 実測図 (1 : 40)	61
図 57	T区断面図 (1 : 50)	62
図 58	T区平面図 (1 : 100)	63
図 59	U区断面図 (1 : 50)	64
図 60	U区平面図 (1 : 100)	64
図 61	V区断面図 (1 : 50)	65
図 62	V区平面図 (1 : 100)	66
図 63	W区断面図 (1 : 50)	67
図 64	W区平面図 (1 : 100)	67
図 65	土器類実測図 (1 : 4)	69
図 66	軒平瓦・軒丸瓦拓影・実測図 1 (1 : 4)	73

図 67	軒丸瓦拓影・実測図 2 (1 : 4)	75
図 68	平瓦実測図 1 (1 : 4)	77
図 69	平瓦実測図 2 (1 : 4)	78
図 70	丸瓦実測図 1 (1 : 4)	79
図 71	丸瓦実測図 2 (1 : 4)	80
図 72	菊丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)	82
図 73	熨斗瓦・輪違瓦拓影・実測図 (1 : 4)	84
図 74	道具瓦・塼実測図 (1 : 4)	86
図 75	瓦刻印拓影 (1 : 2)	87
図 76	礎石矢穴痕拓影・実測図 (実測図 1 : 20 拓影 1 : 10)	88
図 77	金属製品実測図 (1 : 2)	90
図 78	寛永期本丸御殿絵図と調査位置	94

表 目 次

表 1	遺構概要表	9
表 2	遺物概要表	68

史跡旧二条離宮（二条城）

1. 調査の経過

今回の調査は、京都市中京区二条通堀川西入二条城町に所在する史跡旧二条離宮（以下「二条城」という）における、防災・防犯設備工事に先立つ埋蔵文化財確認調査である（図1）。二条城は城内全域が史跡に指定されており、また、北西部は平安宮、北東部は冷然院などの遺跡が重複している。これまでに城内で実施した遺跡調査では、弥生時代から江戸時代に至る遺構を検出し、縄文時代から江戸時代の遺物が出土していることから、今回も各時代の遺構を検出するとともに、遺物が出土することが予測された。

このため、文化庁・京都府・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）と元離宮二条城事務所（以下「二条城事務所」という）が協議を行い、元離宮二条城の防災設備工事に係る協議会の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、埋蔵文化財確認調査を実施した。

調査では防災・防犯設備設計画に基づき、二条城城内を北東部の緑の園、二の丸、本丸の3つの区域に分け、緑の園2箇所（A区・B区）、二の丸9箇所（C区～I区・K区・M区）、本丸10箇所（N区～W区）の合計21箇所調査区を設定した（図2～図5）。最終的な調査面積は全

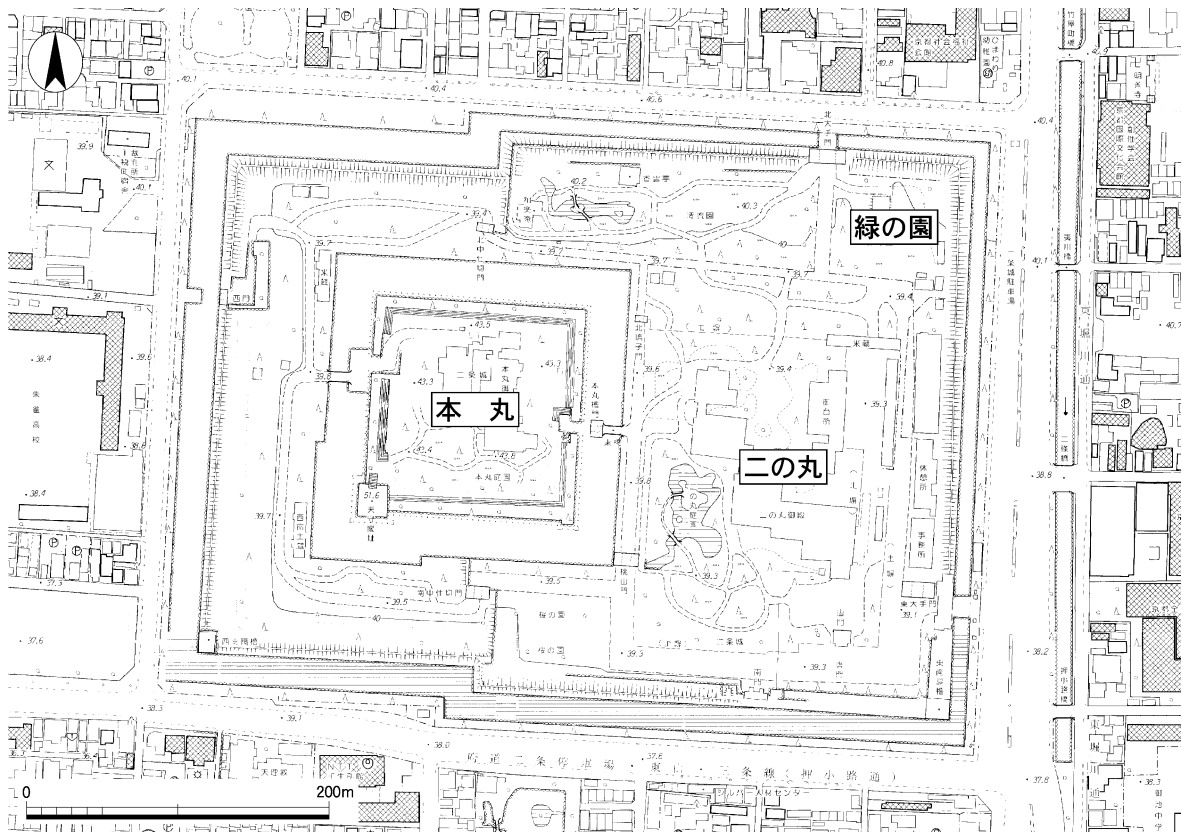


図1 調査区位置図（1：5,000）

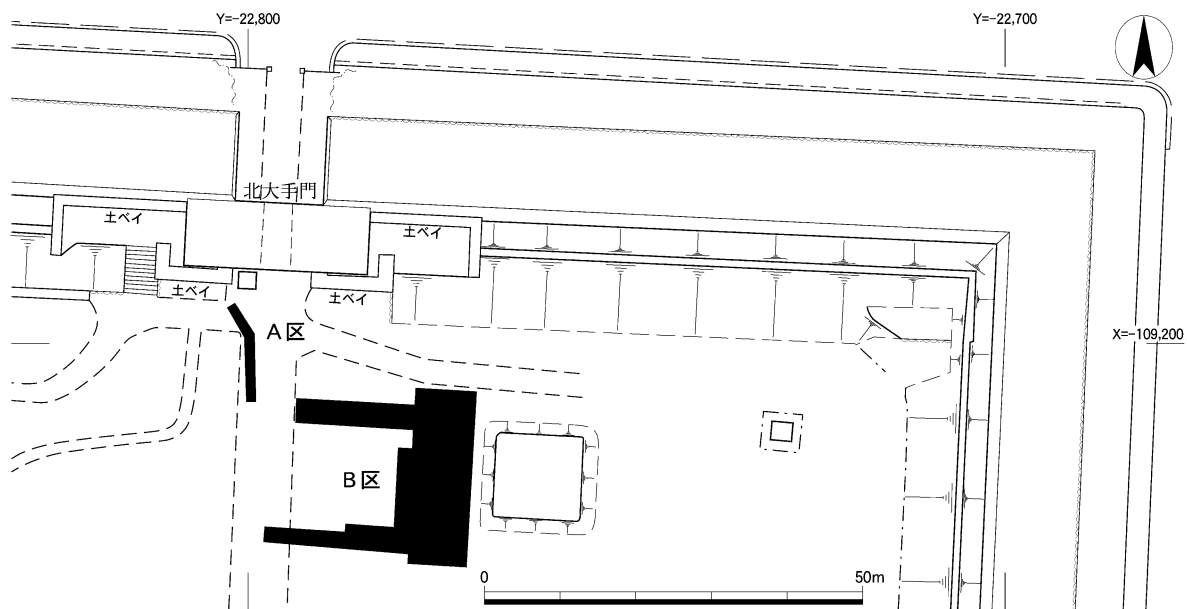


図2 調査区配置図1 (緑の園 1 : 1,000)

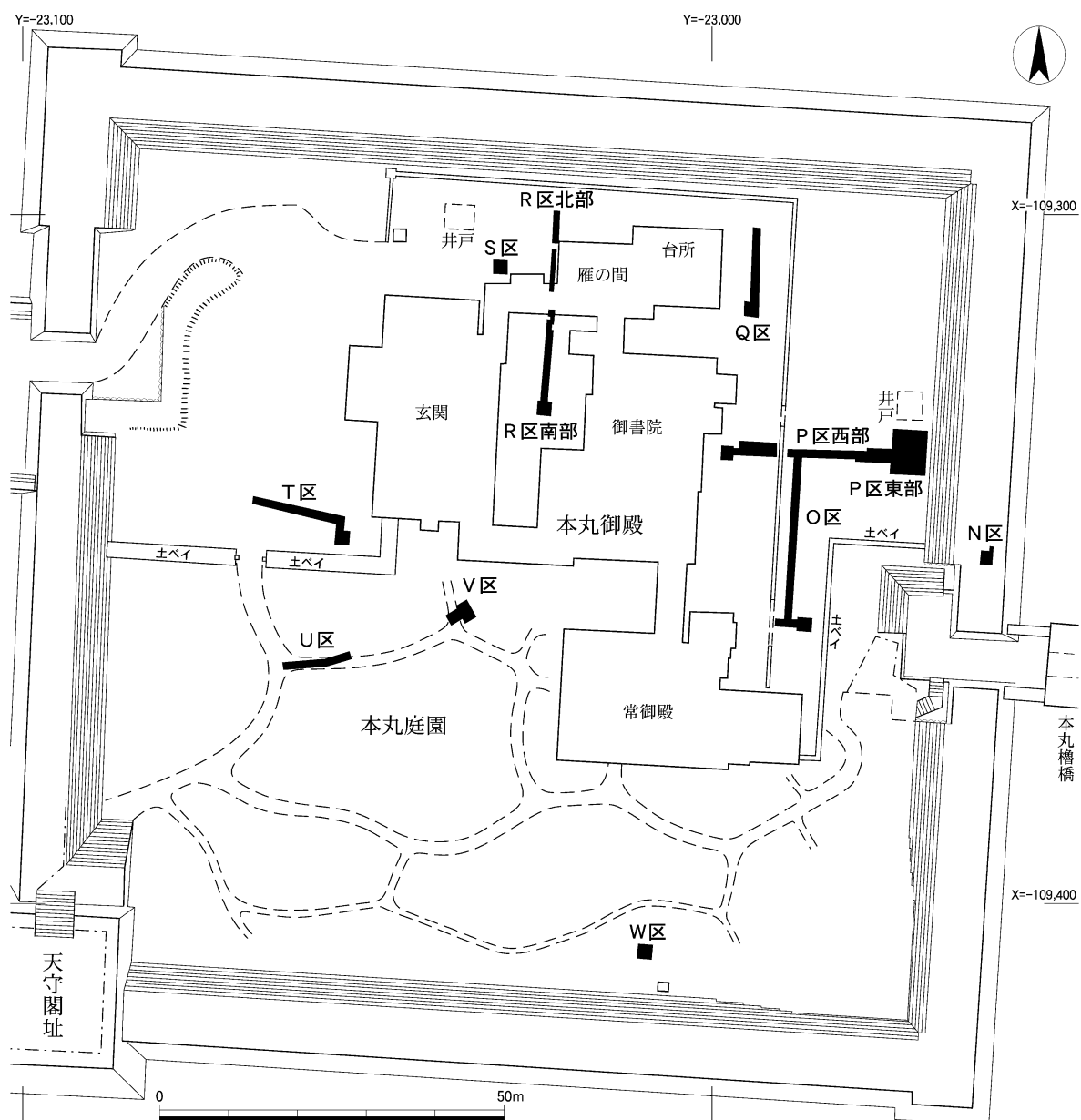


図3 調査区配置図2 (本丸 1 : 1,000)

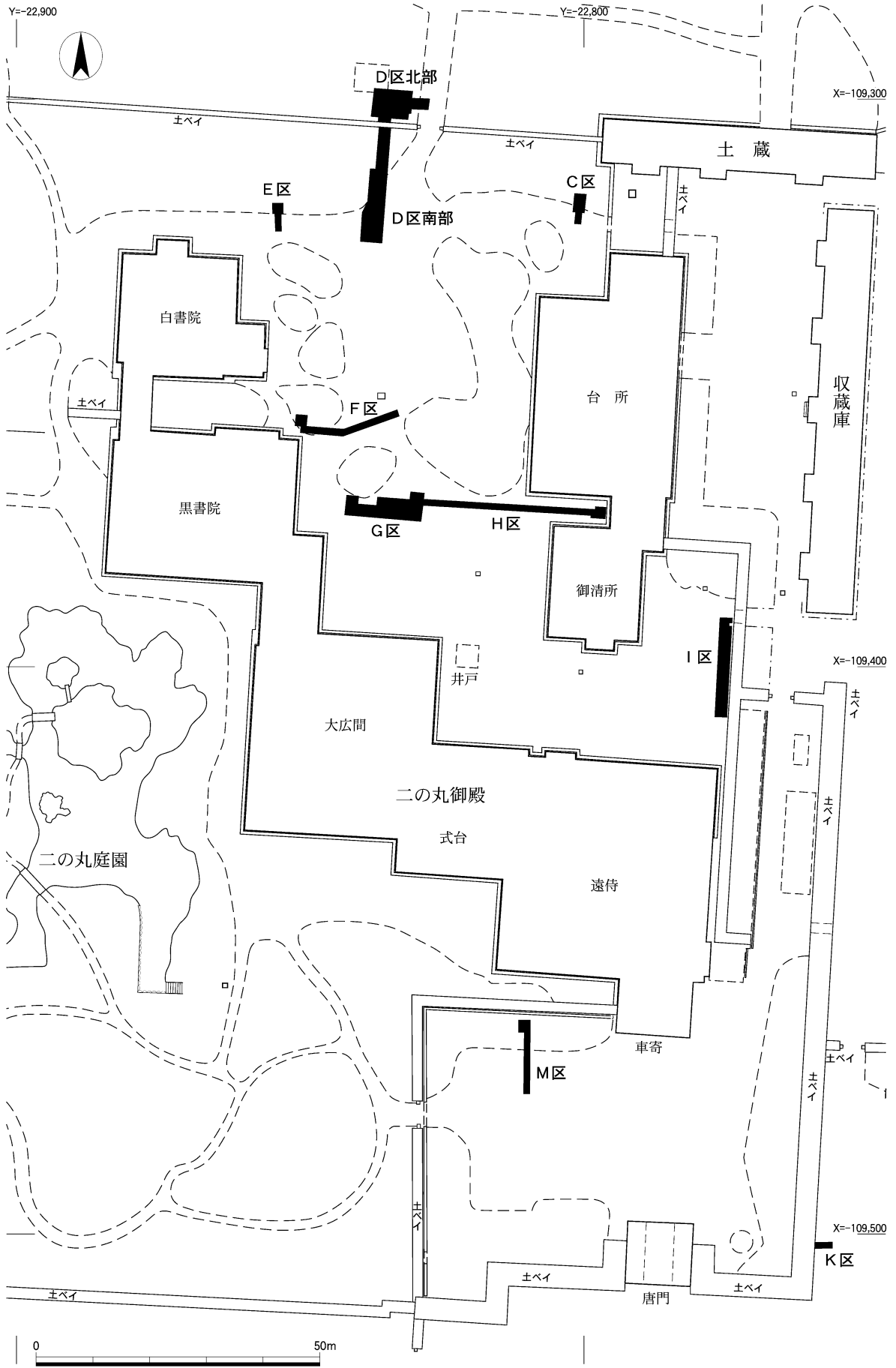


図4 調査区配置図3 (二の丸 1:1,000)



B区調査前（北東から）



H区調査前（西から）



M区調査前（南から）



T区調査前（北東から）

図5 調査前状況



G区機械掘削（南西から）



F区遺構検出（東から）



A区遺構掘削（南東から）



V区遺構実測（南西から）

図6 作業状況

体で約 749 m²である。なお、J 区・L 区は欠番である。

調査は二の丸より開始した。各調査区では表土・近現代の盛土を重機または人力で掘削したのち、基本的に江戸時代の遺構面から調査を開始し、逐次、文化財保護課の指導を受けながら必要に応じて調査区の拡張、下層への掘り下げを行った。各遺構面では写真・図面の記録を取り、遺物を採集した(図6)。調査終了後は、二条城事務所より通路確保などの要請を受けた部分について埋戻しを行い、2010年1月27日にすべての作業を終了した。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は二条城城内に位置し、平安遷都以前の二条城北遺跡・堀川御池遺跡および平安京跡にあたる¹⁾。

二条城北遺跡は丸太町通に沿って東は西洞院通、西は智恵光院通付近に広がる集落跡で、弥生時代の柱穴・炉・溝などが見つかっている。二条城では北大手門・緑の園付近がこの遺跡の南端に含まれている。堀川御池遺跡は北は二条通、東は油小路通、南は姉小路通、西は大宮通付近に

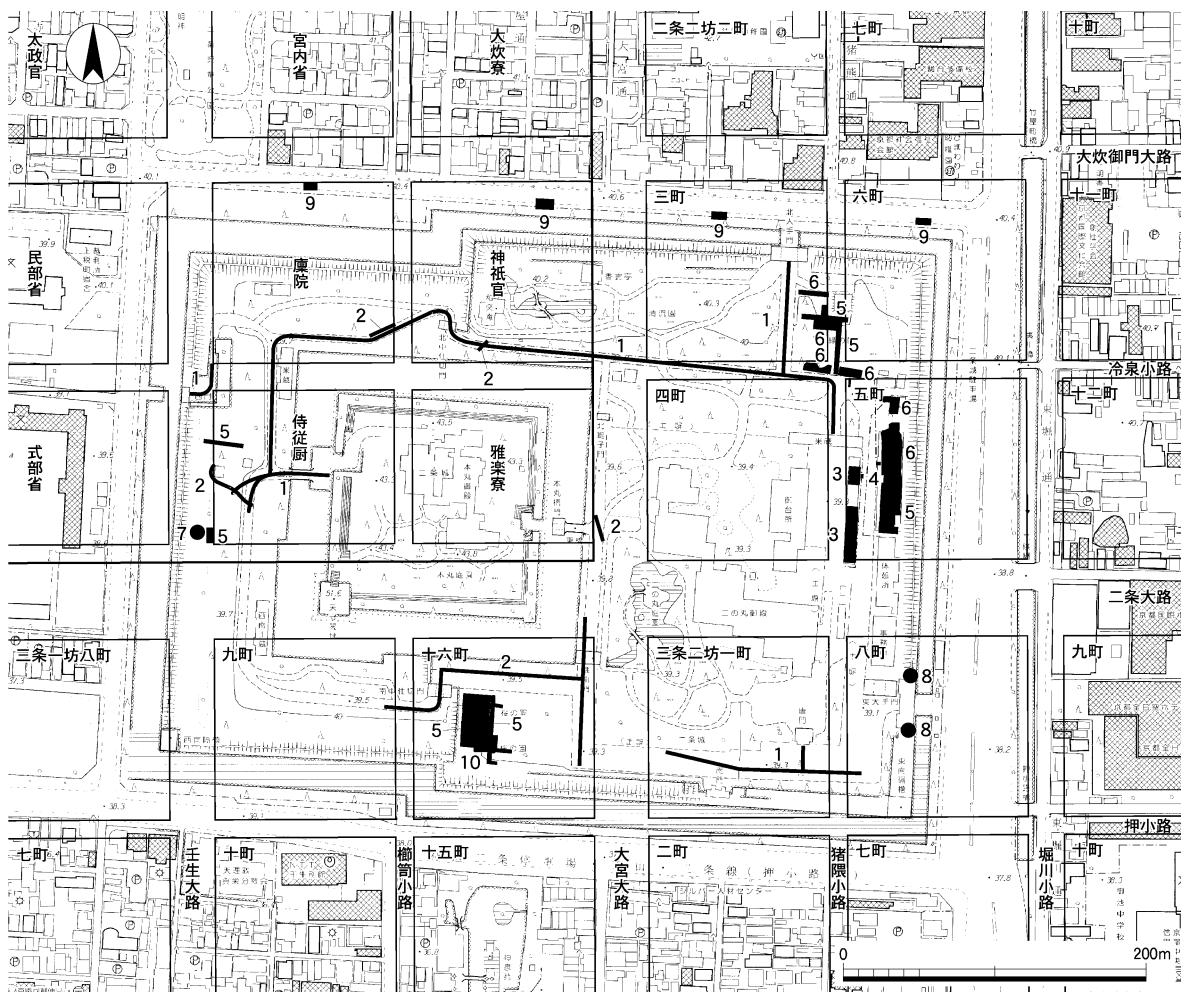


図7 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

拡がる集落跡と考えられている遺跡で、縄文時代から古墳時代の流路・溝などがみつまっている。二条城では二の丸御殿より南東側がこの遺跡に含まれている。

また、二条城は平安京では平安宮南東部および左京二条二坊・三条一坊・三条二坊と重複しており、今回の調査で設定した調査区は、平安宮侍従所・雅楽寮、左京二条二坊三町・四町（冷然院）、左京三条二坊一町・八町および二条大路に位置している。

侍従所は天皇に近侍して身の世話をする侍従の詰所で、9世紀中頃からは公卿の学習や宴席の場としても使用された。雅楽寮は宮廷の楽舞を教習し、朝廷の儀式などで演奏するための役所であったが、10世紀頃には次第に規模が縮小されたようである。

冷然院は平安京を代表する後院の一つで、北は大炊御門大路、東は堀川小路、南は二条大路、西は大宮大路に囲まれた左京二条二坊三町から六町の2町四方を占めていた。その西半部が二条城の北東部にあたる。嵯峨天皇にはじまり、仁明天皇・文徳天皇・村上天皇らが里内裏・院御所として居住しており、『文華秀麗集』の詩文には庭園の優れた景観が詠じられている。貞観17年(875)の火災以降、焼亡と再建を繰り返したが、遅くとも13世紀には衰微していたと推定されている。

左京三条二坊八町は木工寮、一町は木工寮の厨町である木工町にあたる。木工寮は平安宮・平安京の修造を担当した役所で、木工寮には役人の詰所などの施設、木工町には木工・瓦工・鍛冶工などの工人の宿舎、作業場などがあつた。

鎌倉時代後半以降の調査地周辺に関わる記録はあまり残されていないが、桃山時代には豊臣秀吉による聚楽第造営に伴い、一定の整備が行われたと考えられている。

二条城は徳川家康により慶長7年(1602)から造営が開始され、翌年に完成した。慶長期の二条城は、富山勝興寺蔵の『洛中洛外図屏風』などに描かれた様子から、現在の二の丸御殿の位置を中心としており、堀は一重の方形で、堀川通に大手門を開き、城内北西部に天守が聳えていたことがわかる。

その後、二条城は後水尾天皇の行幸に備えて、徳川秀忠・家光により寛永元年(1624)から増改築が行われた。これは非常に大規模なもので、城域を西側へ約1.5倍に拡張し、新たに本丸の堀と石垣を構築した。また、本丸天守台に伏見城天守を移設、二の丸御殿・庭園を改修し、天皇たちが滞在する行幸御殿・秀忠の宿所となる本丸御殿を新造した。同時に慶長期の天守を淀城へ移築するなど、城内の施設にも改造を加えている。寛永3年(1626)に行われた後水尾天皇の二条城行幸は、徳川秀忠の娘・和子の入内の後、天皇家と徳川家が円満な関係にあること、いわゆる公武融和を広く喧伝することを目的としたものである。寛永期の増改築により、二重の堀と石垣に囲まれた現在の二条城の姿が出来上がった。

寛永11年(1634)の徳川家光の入洛以降、二条城は徳川政権の京都支配の象徴として修造が続けられたが、寛延3年(1750)には落雷で天守が焼失、天明8年(1788)に起こった天明の大火では本丸御殿などの城内の建物の多くが類焼し、徐々に衰微していったようである。しかし、幕末には再び政治の舞台となり、文久3年(1863)の徳川家茂の入城から、慶応3年(1867)の徳川慶喜による大政奉還の表明までの期間には再整備が行われた。本丸には仮御殿が建設され、

城内各所には軒を接するように警備の武士たちの番衆小屋が建ち並んだ。

さらに、明治維新後は太政官代・京都府庁として使用され、明治17年(1884)には宮内省所管の二条離宮となり、大正4年(1915)の大正天皇即位の大典に伴う整備が行われた。その間、明治26年(1893)には、京都御苑から桂宮邸を本丸に移築している。昭和14年(1939)には、宮内省より京都市へ下賜され「元離宮二条城」と呼称、平成6年(1994)には世界文化遺産に登録され、京都を代表する観光地として、連日、大勢の観光客でにぎわっている。

(2) 周辺の調査

調査地周辺では、これまでも多数の遺跡調査が行われているが、ここでは二条城城内を中心に主要な調査の概要を記す(図7)。

城内北部から西部および南部の照明灯設置工事に伴う立会調査(図7-1)では、平安時代後期・江戸時代の遺物包含層を検出し、平安時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦が出土した²⁾。

城内中央部から南部および西部の保安灯設置工事に伴う立会調査(図7-2)では、平安時代後期・室町時代・江戸時代の遺物包含層を検出し、平安時代後期の土器類・瓦、室町時代の土器類、江戸時代の陶磁器類・瓦が出土した³⁾。

城内東部の収蔵庫建設工事に伴う発掘調査(図7-3)では、縄文時代の流路、平安時代前期の猪隈小路東側溝・土坑、平安時代後期から室町時代の二条大路北側溝・区画溝・井戸・土坑・柱穴、江戸時代の道路敷・建物などを検出した。江戸時代の道路敷は南北方向に延び、側溝・柵を備えており、江戸時代初期(慶長期)に属すると考えられる。建物は礎石据付穴が東西・南北方向に並んでおり、寛永3年(1626)の城内を描いた絵図にある2番蔵から6番蔵に相当する。出土遺物には縄文土器、平安時代から室町時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦などがあり、江戸時代の遺物が多くを占める⁴⁾。

城内東部の防火水槽設置に伴う発掘調査(図7-4)では、平安時代の池状の落ち込み、鎌倉時代から室町時代の溝・柱穴、桃山時代から江戸時代の瓦組暗渠・井戸・土坑・柱穴などを検出し、縄文土器、平安時代の土器類、江戸時代の陶磁器類・瓦などが出土した⁵⁾。

二条城築城400年記念事業収蔵施設建設に伴う試掘確認調査(図7-5)は、城内東部1箇所・北東部2箇所・西部2箇所・南部2箇所の調査区で実施した。東部の調査では平安時代の池・溝・井戸、室町時代後期の井戸・土坑・柱穴、江戸時代前期から中期の整地層・土坑・柱穴を検出した。北東部の調査では弥生時代中期の竪穴住居と考えられる遺構、平安時代の庭園、江戸時代前期(寛永期)の礎石据付穴・雨落溝、江戸時代中期から後期の土坑・柱穴などを検出した。平安時代の庭園は冷然院の一画にあたっており、遣水・景石・瓦敷・玉石敷などの意匠に富んだものである。また、江戸時代前期の遺構は二条城行幸にあたって整備された蔵跡、中期から後期の遺構は二条城番頭屋敷・番衆小屋に関連するものと推定できる。西部の調査では平安時代の溝、室町時代後期の溝・土坑・柱穴、江戸時代前期(寛永期)の整地層などを検出した。南部の調査では江戸時代初期(慶長期)の石垣、江戸時代前期(寛永期)の整地層、江戸時代中期から後期の土坑・柱

穴などを検出した。出土遺物には弥生時代の土器・土製品、平安時代の土器類・瓦・金属製品、室町時代の土器類・木製品、桃山時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦・土製品・石製品・金属製品などがある⁶⁾。

二条城築城400年記念事業収蔵施設建設に伴う発掘調査および試掘確認調査(図7-6)は、城内東部の収蔵庫建設選定地に1箇所、東部から北東部の整備予定地に6箇所の調査区で実施した。東部の発掘調査では縄文時代前期の遺物包含層、平安時代の庭園・溝・井戸、室町時代後期の整地層・井戸・柱穴、桃山時代の溝、江戸時代前期(寛永期)の整地層・土坑・柱穴、江戸時代中期から後期の井戸・土坑・柱穴・鑄造遺構などを検出した。平安時代の庭園は冷然院の一部で、前期から後期まで維持されており、多数の景石や洲浜などを備えた複雑な構成となっている。江戸時代の鑄造遺構は中央に鋳滓と焼土層が堆積し、側面の壁は焼け歪む。北東部の確認調査では平安時代の庭園、室町時代後期の土坑・柱穴、江戸時代前期の整地層、江戸時代中期から後期の溝・井戸・石組遺構・瓦敷の土間・土坑・柱穴などを検出した。前年の試掘確認調査と合わせた一連の調査により、冷然院の北部から南東部に拡がる庭園の状況が明らかにできたことは大きな成果である。出土遺物には縄文時代の土器・土製品・石器、平安時代の土器類・瓦・石製品、鎌倉時代の土器類・瓦・石製品、室町時代の土器類・瓦・石製品・金属製品、桃山時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦・金属製品などがある⁷⁾。

城内西部の防火水槽設置工事に伴う発掘調査(図7-7)では、平安時代後期の柱穴、室町時代後期の落ち込み、桃山時代の溝、江戸時代の土坑などを検出し、平安時代の土器類・瓦、室町時代の土器類・瓦・石製品・金属製品、江戸時代の陶磁器類・瓦などが出土した⁸⁾。

城内東部の東大手門築地塀の確認調査(図7-8)では、築地塀を固定する石柱の基礎の状況を確認し、石垣裏込めを検出した。出土遺物は平安時代中期の軒平瓦1点のほかは、大半が江戸時代以降のものである⁹⁾。

二条城北側の竹屋町通路面での公共下水道埋設工事に伴う発掘調査(図7-9)では、平安時代の整地層・溝・土坑・柱穴、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝・土坑・柱穴、桃山時代の堀状遺構・溝・土坑、江戸時代初期の建物・溝・柱穴、江戸時代前期から近代の路面・側溝・柵・石列・土坑などを検出した。江戸時代の路面は二条城行幸にあたって整備され、大正年間まで嵩上げ・修造を繰り返しながら維持されていた。出土遺物には平安時代の土器類・瓦、鎌倉時代の土器類、室町時代の土器類・瓦、桃山時代の土器類・瓦、江戸時代の陶磁器類・瓦・金属製品などがある¹⁰⁾。

また、城内南部の確認調査(図7-10)では、江戸時代前期(寛永期)の整地層・建物礎石列・柱穴・溝・石列、江戸時代中期の石鳥居・石組・礎石・溝・土坑・柱穴、江戸時代後期の土坑などを検出した。江戸時代前期(寛永期)の遺構は二条城行幸で天皇たちが滞在した行幸御殿の絵図と合致するところが多く、御殿西側の台所に付属する建物および関連施設に相当する。出土遺物には奈良時代の瓦、平安時代の土器類・瓦、鎌倉時代から桃山時代の土器類、江戸時代初期から前期の陶磁器類・瓦・金属製品、江戸時代中期から後期の土器類・瓦・土製品・石製品・金属製品などがある¹¹⁾。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

調査では緑の園（A区・B区）61基・二の丸（C区～I区・K区・M区）215基・本丸（N区～W区）110基、合計386基の遺構を検出した。主要な遺構には、平安時代の池、江戸時代初期から前期の建物・溝・木樋・土坑・柱穴・路面・整地層、江戸時代中期から後期の土坑・柱穴、近代の土坑・柱穴などがある。

調査区は二条城城内各所に設定したため、層位や遺構の状況は各調査区で相違がある。また、防災設備設計計画に基づき、文化財保護課の指導を受けながら調査を進め、各調査区や調査区内の位置によって遺構の保存を原則としたため、検出した遺構面の時期が異なっている箇所もある。

以下では、各調査区ごとに層位と主要な遺構について紹介する。調査地の歴史的な変遷についてはまとめて総括する。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
平安時代	D区池107
鎌倉時代 ～桃山時代	D区池107
江戸時代初期 ～前期	A区路面、B区路面、D区木樋88・土坑89・石列92・集石100、I区土坑176・土坑211、K区整地面、N区集石・石69、O区溝21・土坑9・土坑14石70・石71・石72・石73・石74・石75・石76・石77・石78・石79、P区溝24・石82・石83・石84、Q区溝107・土坑40・石89・石90、R区石75・石99・石100・石101・石102・石103、S区溝27、V区整地面
江戸時代中期 ～後期	A区土坑43・土坑51、B区路面・溝12・土坑2・土坑3・土坑4・土坑22・土坑33・土坑34・柱穴18・柱穴24・柱穴26・柱穴27、C区溝45・土坑30・土坑44・土坑103、D区土坑62・土坑67・土坑70・土坑73・土坑75・土坑81・土坑87・土坑90、E区土坑47、F区土坑141・土坑149・石215、G区溝35・土坑19・土坑20・土坑22・土坑36、H区土坑116・土坑117・土坑119・土坑122・土坑126・土坑128、I区土坑3・土坑8・土坑31・土坑32・土坑33・土坑55・石41・石42・石173、K区整地面・土坑178・土坑179・土坑180、M区溝185・溝190・溝202・溝205・柱穴186・柱穴187・柱穴188・柱穴193・柱穴194・柱穴200、P区溝20・土坑29・石80・石81・石85・石86・石87・石88・集石109・集石110、Q区集石91、T区土坑58、U区土坑55、V区整地面、W区土坑66
近代	G区柱穴9～柱穴16・柱穴109・柱穴110

(2) A区の調査 (図版1、図8・9)

概要 緑の園西側、北大手門からの城内通路北西部に設定した配管設置予定箇所の調査区である。南北方向から北西に向けてに折れ曲がる「へ」字形で、長さは南半部で約8.5m、折れ曲がる北半部で約4.5m、幅は約1.0mで設定したが、第3面調査中に具体的な配管設置箇所とする目的で、既設管掘形の西肩を確認するため南半部を西側へ約0.5m拡張した。

調査は3面に分けて実施し、第1面で江戸時代後期、第2面で江戸時代中期、第3面で江戸時代前期の遺構を検出し、既設管掘形断面で江戸時代初期の整地層を確認した。

層序 北端部・南端部は既設管などにより攪乱されている。約15～20cmの厚さの路面砂利・盛土の下層は、約10cmの厚さの江戸時代後期の整地層である黒褐色シルト～細砂である。この下層は約10cmの厚さの江戸時代中期の整地層である黒褐色シルト～細砂である。これより下層は既設管掘形断面での観察に基づくもので、約20cmの厚さの江戸時代前期の整地層であるにぶい黄褐色シルトなどが混じる暗褐色シルト～中砂・にぶい黄褐色極細砂～中砂などの下層は江戸時代初

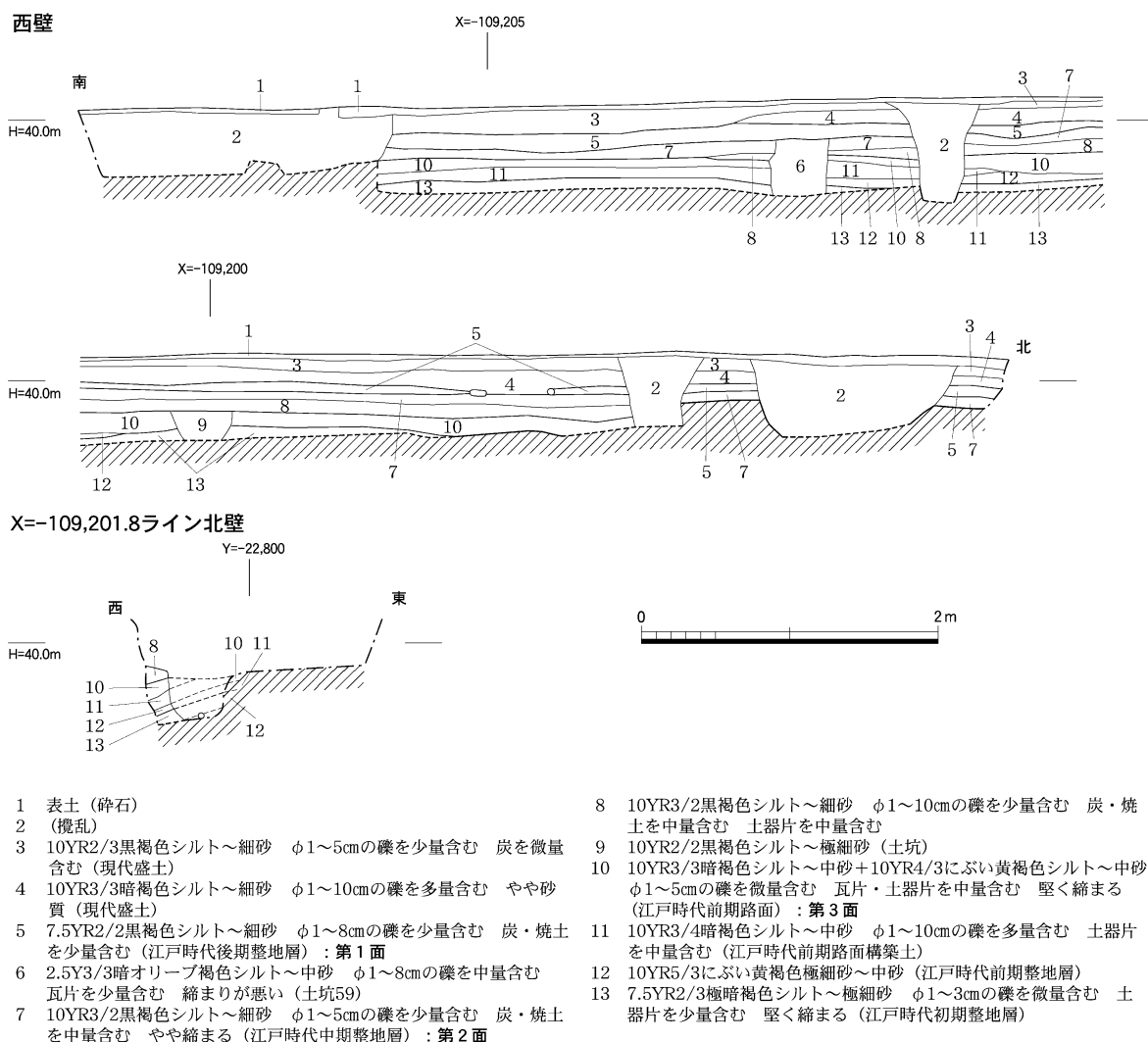


図8 A区断面図 (1:50)

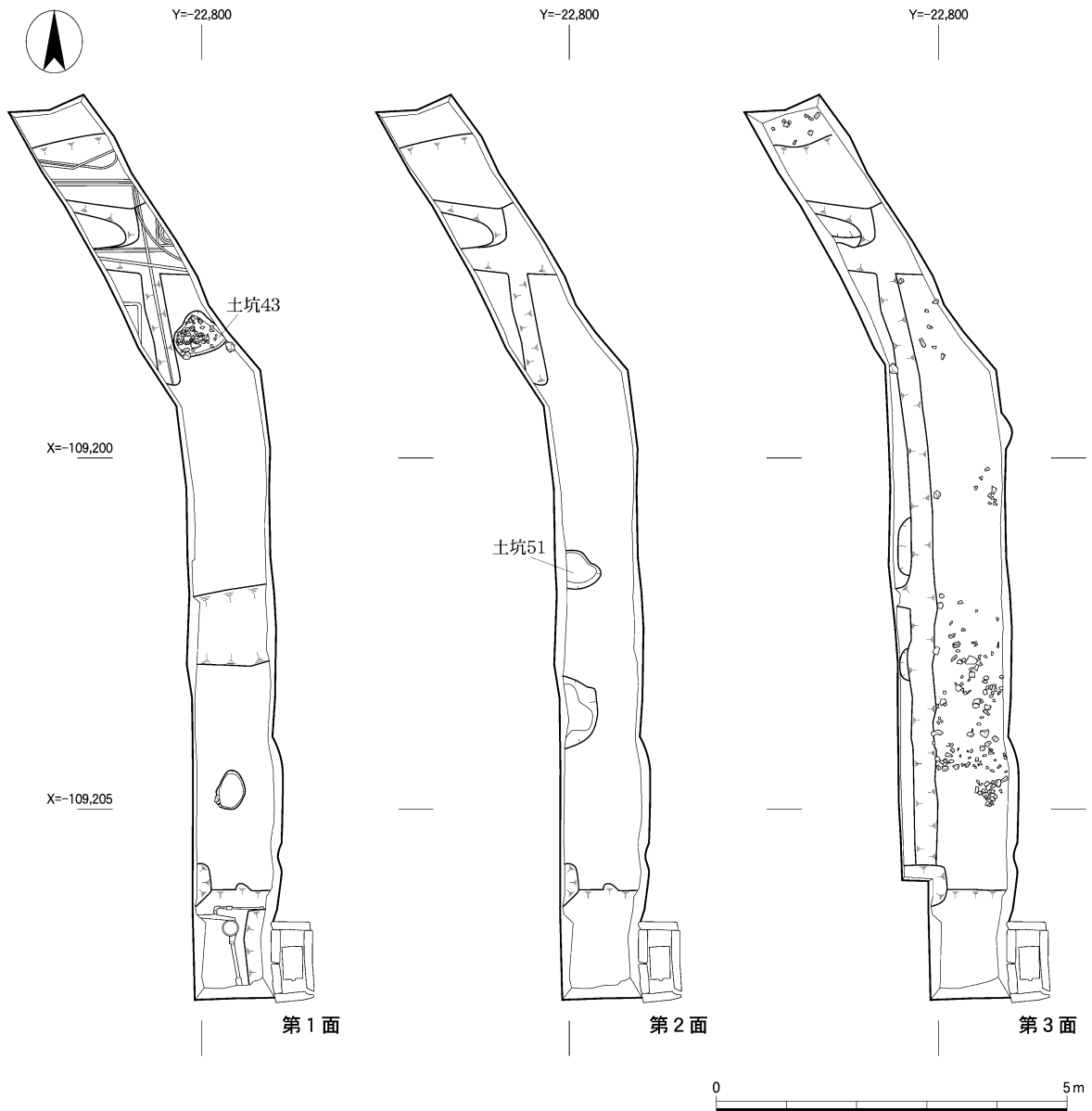


図9 A区平面図 (1 : 100)

期の整地層である暗褐色シルト～極細砂である。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、江戸時代後期の黒褐色シルト～細砂下面を第2面、江戸時代中期の黒褐色シルト～細砂下面を第3面として遺構検出を行った。

第1面 土坑43は調査区屈曲部で検出した。平面形は南北約0.6m・東西約0.7mの不整形な円形で、深さは約0.1mである。数cmから10cmの大きさの石を含む。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代後期の遺物がわずかに出土した。

第2面 土坑51は中央部で検出した。西側が調査区外となるが、平面形は直径約0.5mの円形に復元できる。深さは約0.1mである。埋土は黒褐色砂泥で、出土遺物は平安時代前期から鎌倉時代の遺物が多く混入するが、層位からみて江戸時代中期に属すると考えている。

第3面 にぶい黄褐色シルトなどが混じる暗褐色シルト～中砂は堅く締まっており、上面には部分的に数cmから15cmの礫や瓦片を敷く。下層の暗褐色シルト～中砂は1～10cmの大きさの礫

を多量に含んでいる。X=-109,201.8 付近の既設管掘形断面ではこれらの層が東に向かって高くなる状況が観察できることから、上層が江戸時代前期の路面で、下層が構築土と考えている。なお、側溝は確認していない。

(3) B区の調査 (図版2～4、図10～13)

概要 緑の園西部に設定した調査区で、東側が貯水槽建設予定地、北西側・南西側から西に延びる部分は配管設置予定箇所である。貯水槽部分は南北約23.0 m・東西約8.0 mの長方形で、西側に南北約10.5 m・東西約2.0 mの張り出し部もつ。北西側拡張部は長さ約15.6 m・幅約3.0 m、南西側拡張部は長さ約17.0 m・幅約2.0 mで設定した。ただし、調査区の大部分は2000年から2002年にかけて実施した調査区と重複する¹²⁾。

調査は4面に分けて実施し、第1面で江戸時代後期から近代、第2面で江戸時代中期から後期、第3面で江戸時代前期、第4面で江戸時代初期の遺構を検出した。ただし、貯水槽建設予定地は第1面、北西側拡張部は配管を南西側拡張部に設置することとなったため第2面で遺構検出をとどめ、遺構掘削・下層への掘り下げは実施していない。なお、南西側拡張部では江戸時代中期の整地層を2層認めたため、第2-1面・第2-2面に分けている。

層序 下層までの状況が最も明らかとなった南西側拡張部の層序を紹介する。数cmから10 cmの厚さの表土・盛土などの下層は、約15 cmの厚さの江戸時代後期の包含層である暗褐色シルト～中砂である。この下層は約10 cmの厚さの江戸時代中期の包含層である暗褐色シルト～細砂である。この下層は約10 cmの厚さの江戸時代中期の整地層である灰黄褐色シルト～細砂、約10 cmの厚さの江戸時代前期の整地層であるにぶい黄褐色粘土～シルト、15 cm以上の厚さの江戸時代初期の整地層である黒褐色粘土～シルトとなる。いずれも上面は堅く締まっており、砂・礫・瓦片を敷く。

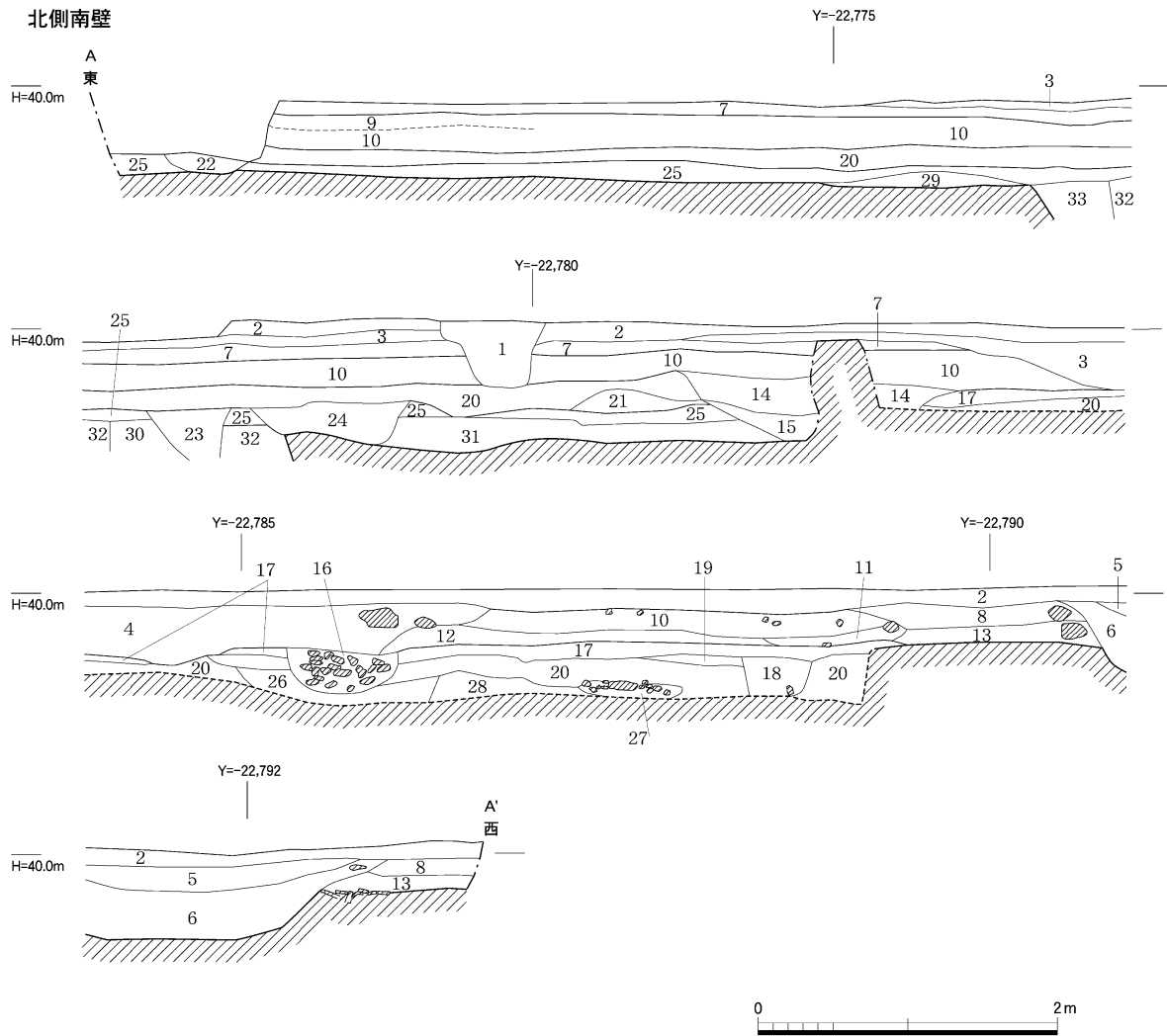
調査では表土・盛土下面を第1面、暗褐色シルト～中砂などの下面を第2面(南西側拡張部では第2-1面)、暗褐色シルト～細砂の下面を第2-2面、灰黄褐色シルト～細砂の下面を第3面、にぶい黄褐色粘土～シルトの下面を第4面として遺構検出を行い、さらに江戸時代初期の整地層を工事予定深度まで掘り下げた。

第1面 土坑2・土坑3・土坑4は貯水槽部分西端断割部分の近代の盛土下面で検出した。南北方向に並び、検出長は約7.5 mである。土坑2・土坑4は輪郭が不明瞭で、土坑3は西側が調査区外となるが、平面形は直径約0.5 mの円形に復元できる。完掘していないため深さは不明である。間隔は北側から約4.0 m・約3.5 mである。いずれも数cmから15 cmの大きさの石を含む。埋土は灰黄褐色砂泥・黒褐色砂泥で、出土遺物はないが、江戸時代後期の遺構と考えている。

北西側拡張部は、検出面全体にまばらに数cmから10 cmの大きさの礫を敷く。

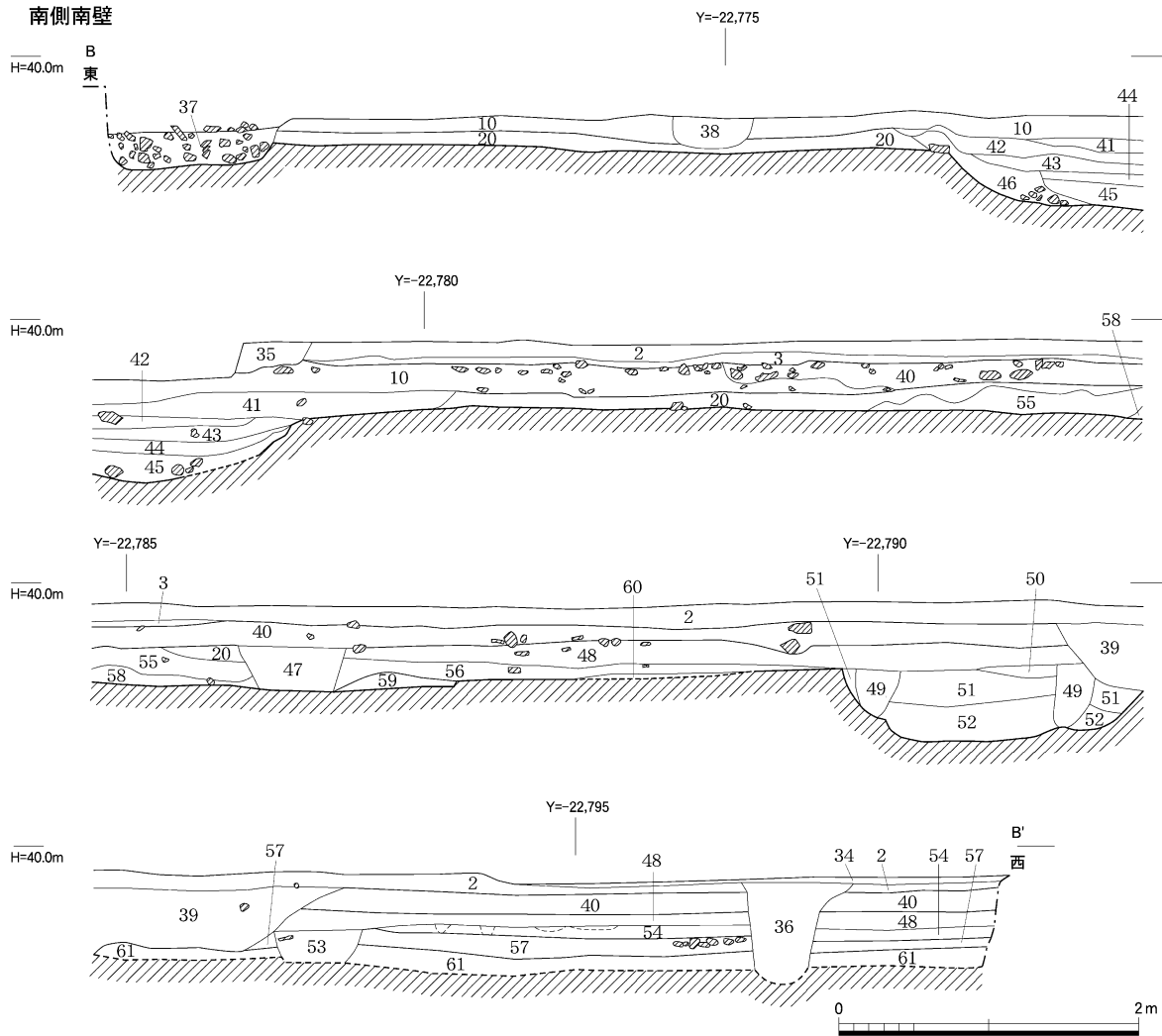
第2面(第2-1面) 北西側拡張部は南側を掘り下げた。検出面全体に数cmから10 cmの大きさの瓦片を敷く。旧調査区で検出した瓦敷きが西側へ拡がるのが明らかとなった。

南西側拡張部は旧調査区の西側を掘り下げた。土坑33は西部で検出した。平面形は直径約0.6 mの円形で、深さは約0.1 mである。数cmから20 cmの大きさの石を詰める。埋土は暗褐色砂泥で、



- | | |
|--|---|
| <p>1 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ3～10cmの礫を少量含む（根の攪乱）</p> <p>2 表土（芝生造成土）</p> <p>3 2.5Y7/4浅黄色シルトに2.5Y7/2灰黄色粘土ブロックが多量混じる（現代盛土 アスファルト含む）</p> <p>4 10YR8/2灰白色 粘土ブロックが詰まる</p> <p>5 10YR3/2黒褐色シルト～細砂に10YR5/6黄褐色粘質シルトブロックが多量混じる（攪乱）</p> <p>6 10YR3/2黒褐色シルト～中砂 φ1～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む</p> <p>7 10YR3/1黒褐色シルト～細砂 φ1～7cmの礫を少量含む 炭化物を少量含む 堅く締まる（現代盛土か）</p> <p>8 10YR3/1黒褐色シルト～細砂 炭を少量含む 砂質（江戸時代後期～近代整地層か）</p> <p>9 10YR3/1黒褐色シルト～中砂 10層の土壌化層か（江戸後期整地層）：第1面</p> <p>10 10YR3/2黒褐色シルト～中砂に10YR4/4褐色粘土ブロックが少量混じる φ1～15cmの礫を少量含む 炭を少量含む 瓦片を少量含む 堅く締まる（江戸時代後期整地層）：第1面</p> <p>11 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ0.5～3cmの礫が詰まる 炭を少量含む</p> <p>12 10YR5/3にぶい黄褐色粘質シルト 炭・焼土を少量含む</p> <p>13 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ1～2cmの礫を多量含む 炭を少量含む 堅く締まる（江戸後期整地層か）</p> <p>14 10YR3/2黒褐色シルト～細砂（極粗砂混） φ1～10cmの礫を中量含む 炭を少量含む</p> <p>15 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト 炭を微量含む</p> <p>16 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ5～20cmの礫が詰まる</p> | <p>17 10YR6/6明黄褐色シルト（江戸時代中期の土間か）：第2面</p> <p>18 10YR3/2黒褐色シルト 炭を多量・焼土を少量含む</p> <p>19 10YR3/2黒褐色シルト～中砂 φ0.5～3cmの礫を多量含む 堅く締まる</p> <p>20 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ1～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む やや粘質（江戸時代中期整地層）：第2面</p> <p>21 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ1～5cmの礫を中量含む 炭を少量含む（根の攪乱）</p> <p>22 （土坑）</p> <p>23 10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂 炭化物を少量含む</p> <p>24 10YR4/2灰黄褐色シルト～極細砂 φ1～10cmの礫を少量含む 炭を多量含む</p> <p>25 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂 φ1～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む やや砂質（江戸時代前期整地層）：第3面</p> <p>26 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ0.5～3cmの礫を多量含む 炭を少量含む（上面に砂と一部に黄褐色粘土を敷く やや締まる）</p> <p>27 10YR3/2黒褐色シルト φ1～10cmの礫を多量含む 炭を少量含む</p> <p>28 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ1～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む 土器片を中量含む</p> <p>29 10YR4/1褐灰色粘土～シルト（江戸時代前期整地層か）</p> <p>30 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ3～12cmの礫を少量含む 炭を少量含む</p> <p>31 7.5YR3/1黒褐色シルト～中砂 φ1～10cmの礫を多量含む 炭を少量含む 堅く締まる</p> <p>32 7.5YR3/2黒褐色シルト～細砂 炭・焼土を少量含む（江戸時代初期整地層）：第4面</p> <p>33 10YR4/2灰黄褐色シルト φ2～5cmの礫を微量含む 炭を微量含む</p> |
|--|---|

図10 B区断面図1（1：50）



- | | |
|--|---|
| <p>34 表土 (碎石)</p> <p>35 表土 (真砂)</p> <p>36 (攪乱)</p> <p>37 10YR3/1黒褐色細砂～中砂 φ5～15cmの礫が詰まる 炭を少量含む</p> <p>38 10YR3/1黒褐色シルト～中砂 φ1～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む</p> <p>39 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 炭を少量含む 締まりが悪い (根の攪乱)</p> <p>40 10YR3/3暗褐色小礫混シルト～中砂 φ1～20cmの礫を多量含む 焼土を少量含む (江戸時代後期整地層か) : 第1面</p> <p>41 10YR2/1黒色シルト～中砂 締まりが悪い 腐植土</p> <p>42 10YR2/2黒褐色シルト～中砂 φ1～15cmの礫を微量含む 炭を多量含む</p> <p>43 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 瓦片を中量含む</p> <p>44 10YR2/2黒褐色シルト～極細砂 炭化物が帯状に入る</p> <p>45 10YR3/2黒褐色シルト～中砂 φ5～15cmの礫を多量含む 炭を少量含む</p> <p>46 10YR3/3暗褐色シルト～細砂 炭を多量・焼土を少量含む</p> <p>47 10YR2/3黒褐色シルト～細砂 炭を多量・焼土を少量含む</p> <p>48 10YR3/3暗褐色シルト～細砂 φ1～3cmの礫を少量含む 炭を少量・焼土を微量含む やや砂質 (江戸時代中期か) : 第2面</p> <p>49 10YR3/2黒褐色シルト～中砂 φ1～10cmの礫を微量含む 炭を多量・焼土を少量含む (ピット)</p> <p>50 10YR2/1黒褐色シルト～細砂 炭を多量含む</p> <p>51 7.5YR3/2黒褐色小礫混シルト～細砂 φ1～5cmの礫を微量含む 炭を少量・焼土を多量含む (土坑)</p> <p>52 10YR3/3暗褐色シルト～細砂 φ3～5cmの礫を多量含む 炭・焼土を多量含む 瓦片を多量含む (土坑)</p> <p>53 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 炭・焼土を少量含む 瓦片を少量含む (ピット)</p> <p>54 10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂に10YR6/6明黄褐色粘土ブロックが多量混じる 堅く締まる (路面修復土か)</p> <p>55 10YR4/3にぶい黄褐色シルト細砂 炭を少量含む</p> <p>56 10YR3/2黒褐色粘土～細砂 炭・焼土を少量含む 堅く締まる</p> | <p>57 10YR6/4にぶい黄褐色粘土～シルト (中砂～粗砂混) φ1～12cmの礫が詰まる 堅く締まる (江戸時代前期路面) : 第3面</p> <p>58 10YR3/3暗褐色シルト～細砂 (極粗砂混) 炭を少量含む</p> <p>59 10YR3/3暗褐色シルト～中砂 炭・焼土を少量含む やや軟質 (江戸時代前期整地層か) : 第3面</p> <p>60 10YR4/3にぶい黄褐色中砂～極粗砂 φ1～10cmの礫を多量含む 堅く締まる (路面構築土)</p> <p>61 10YR2/2黒褐色粘質粘土～シルト 炭を少量含む 土器片を多量含む 上面に小礫を敷く やや締まる (江戸時代初期整地層か) : 第4面</p> <p>62 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～中砂 φ1～15cmの礫を多量含む 炭を少量含む (攪乱 モルタル混じる)</p> <p>63 10YR3/1黒褐色シルト～中砂 (粗砂～極粗砂混) φ1～3cmの礫を少量含む 炭を少量含む (現代土坑か)</p> <p>64 10YR2/1黒色粘質シルト φ5～20cmの礫が詰まる</p> <p>65 10YR3/3暗褐色シルト～中砂 φ1～5cmの礫を多量含む 炭を少量含む 堅く締まる (江戸後期整地層) : 第1面</p> <p>66 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト φ1cm以下の礫を微量含む 炭を少量含む</p> <p>67 10YR2/2黒褐色シルト～細砂 φ1～5cmの礫を少量含む 炭を中量・焼土を少量含む</p> <p>68 7.5YR3/2黒褐色シルト～粗砂 堅く締まる</p> <p>69 10YR3/2黒褐色シルト～中砂に10YR8/1灰白色粘土ブロックが多量混じる φ1～5cmの礫を少量含む (現代土坑か)</p> <p>70 10YR2/2黒褐色やや粘質シルト～細砂 φ1～10cmの礫を少量含む 炭を少量含む 瓦片を少量含む (現代土坑か)</p> <p>71 10YR3/2黒褐色シルト～中砂 φ5～15cmの礫を多量含む 瓦片を少量含む (現代土坑か)</p> <p>72 10YR3/2黒褐色シルト～中砂 φ1～3cmの礫を微量含む 炭を少量含む</p> <p>73 10YR3/1黒褐色シルト～中砂 φ1～10cmの礫を多量含む (攪乱漆喰混)</p> <p>74 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 φ1～20cmの礫が詰まる</p> <p>75 10YR3/3暗褐色シルト～細砂に10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロックが少量混じる 炭を少量含む (江戸前期整地層か) : 第3面</p> |
|--|---|

図 11 B区断面図 2 (1:50)

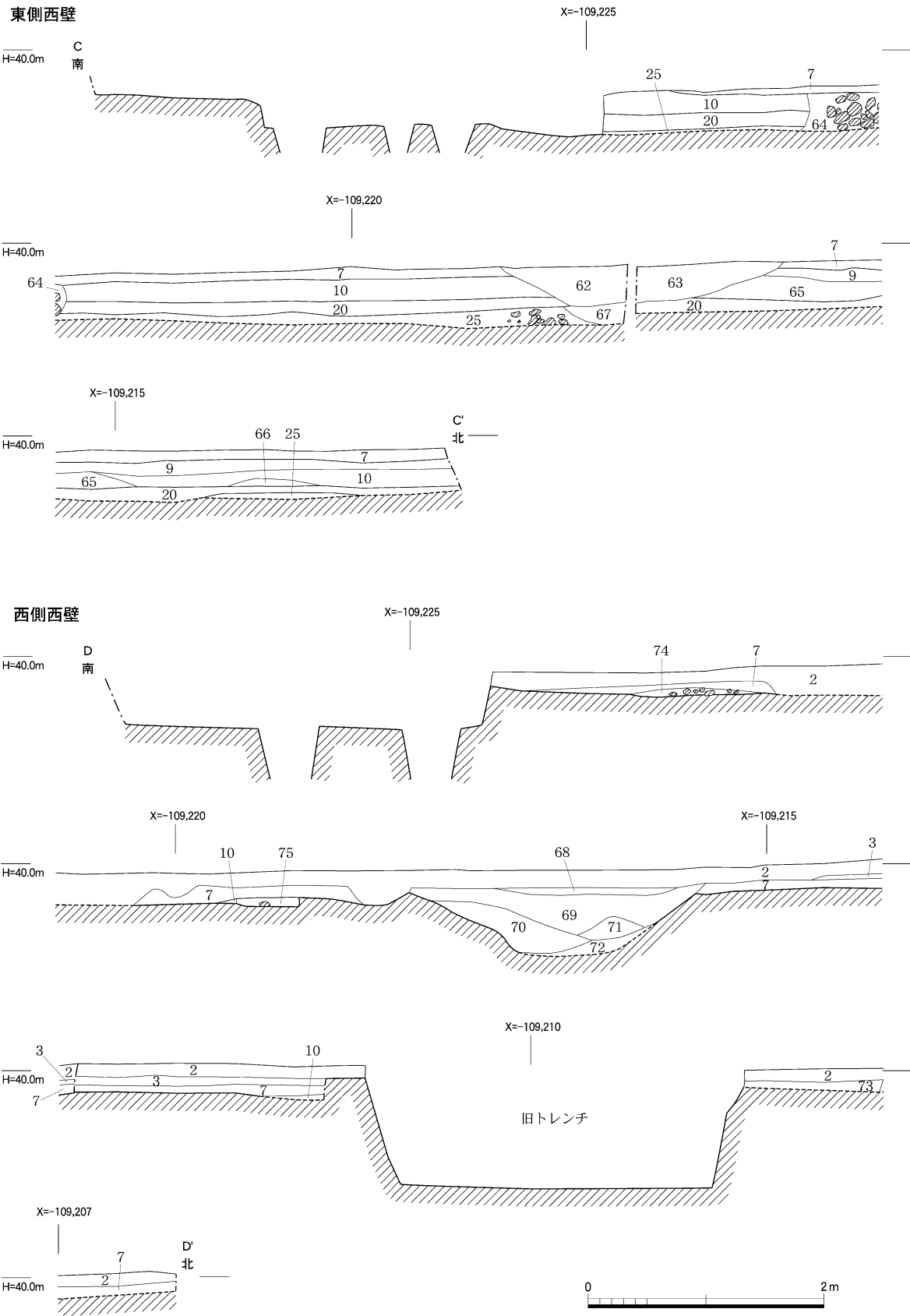


図 12 B区断面図3 (1 : 50)

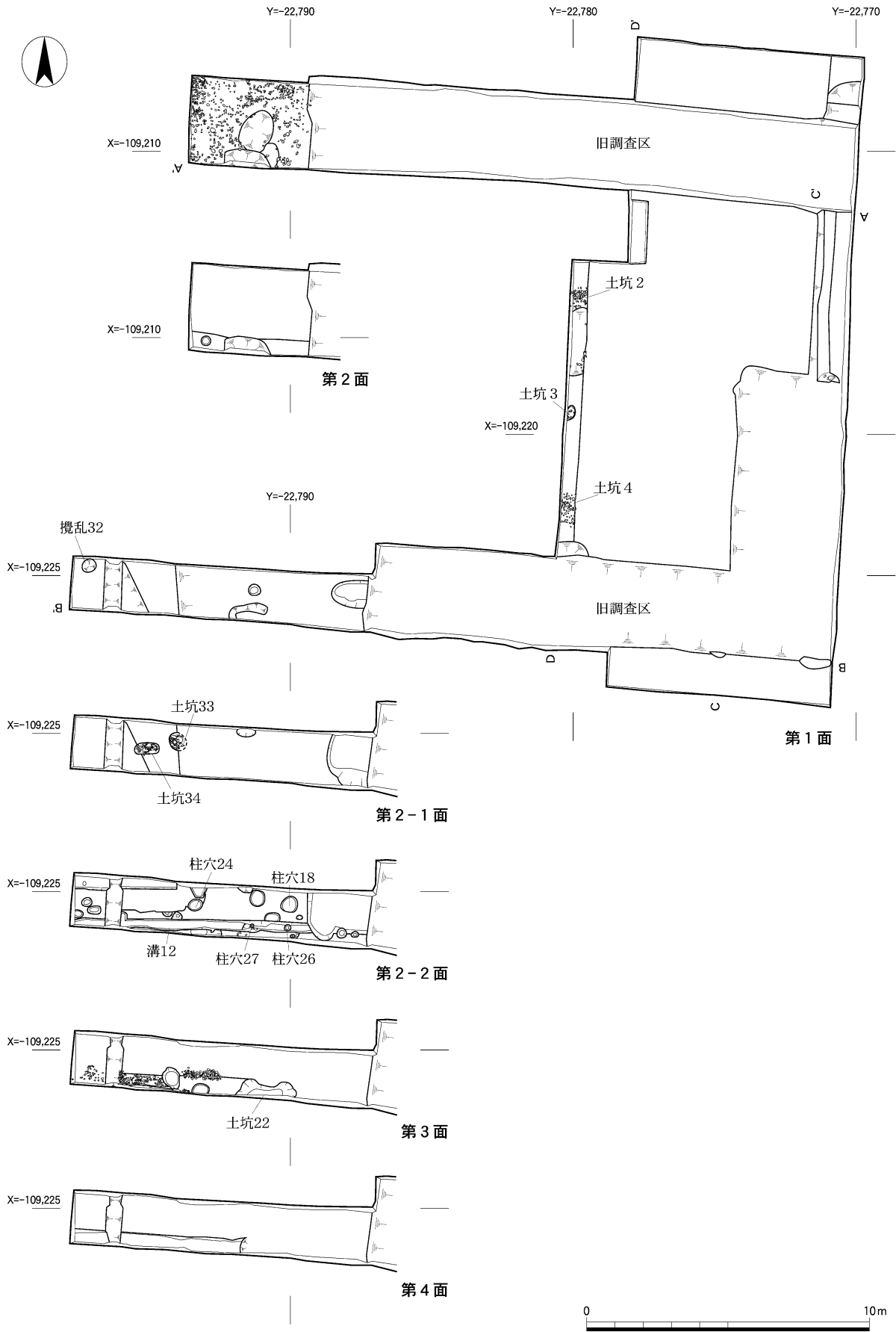


图 13 B区平面图 (1 : 200)

江戸時代中期から後期の遺物がわずかに出土した。柱穴の可能性はある。

土坑 34 は西部で検出した。平面形は南北約 0.4 m・東西約 0.9 m の長円形で、深さは 0.2 m 以上である。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代中期から後期の遺物がわずかに出土した。

第 2-2 面 南西側拡張部は上記の遺構を残して周囲を掘り下げた。江戸時代中期の整地層である灰黄褐色シルト～細砂はやや堅く締まっており、上面には粗い砂を敷く。路面と考えている。

溝 12 は南壁寄りで検出した東西方向の溝である。東側が攪乱され、西側が調査区外に延びる。断面形は浅い U 字形で、検出長約 8.5 m、幅約 0.3 m、深さ約 0.2 m である。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代中期から後期の遺物が出土した。

柱穴 18・柱穴 24 は西部で検出した。東西方向に並ぶ。平面形は直径約 0.4～0.5 m の円形で、完掘していないため深さは不明である。間隔は約 3.4 m である。埋土は柱穴 18 が黒褐色砂泥、柱穴 24 が暗褐色砂泥で、出土遺物はない。

柱穴 26・柱穴 27 は溝 12 の底面で検出した。東西方向に並ぶ。平面形は直径約 0.2 m の円形で、深さは約 0.1 m である。間隔は約 1.3 m である。埋土は柱穴 26 が暗褐色砂泥、柱穴 27 が黒褐色砂泥で、江戸時代中期から後期の遺物が出土した。

第 3 面 南西側拡張部は南端を掘り下げた。江戸時代前期の整地層であるにぶい黄褐色粘土～シルトは堅く締まっており、上面には数 cm から 10 cm の大きさの礫を密に敷く。路面と考えている。路面に顕著な勾配はなく、側溝は確認していない。

土坑 22 は南壁際で検出した。南側が調査区外となるが、南北 0.4 m 以上、東西 2.2 m 以上で、深さは 0.3 m 以上である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物がまとまって出土した。平安時代から室町時代中期の遺物が多く混入する。

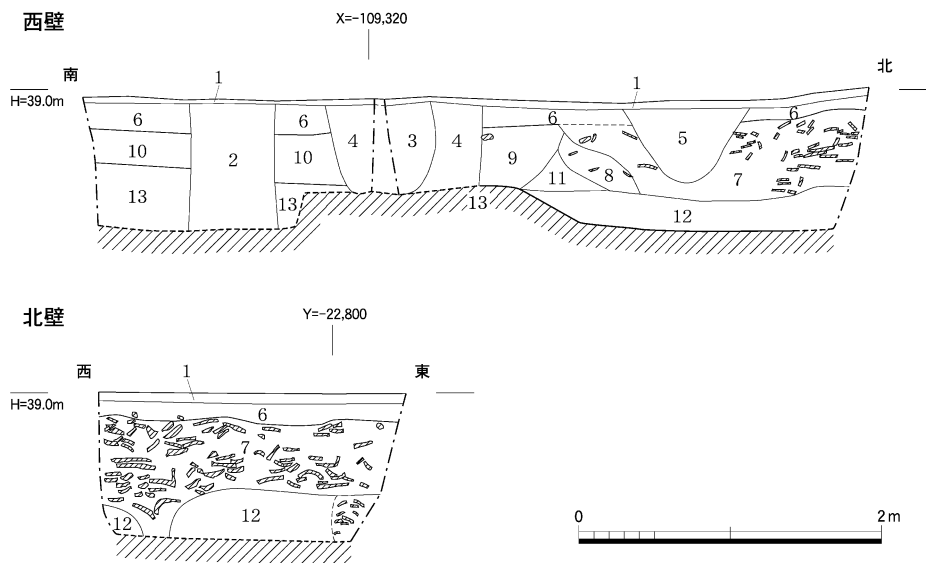
第 4 面 第 3 面で掘り下げた部分をさらに掘り下げた。江戸時代初期の整地層である黒褐色粘土～シルトはやや堅く締まっており、上面には部分的に数 cm から 5 cm の大きさの礫をまばらに敷く。路面と考えている。路面に顕著な勾配はなく、側溝は確認していない。さらに江戸時代初期の整地層を工事予定深度まで掘り下げたが、掘り下げは江戸時代初期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

(4) C 区の調査 (図版 5、図 14・15)

概要 二の丸北東部、台所北側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。北側が放水銃部分、南側が配管部分となる「凸」字形で、南北約 5.0 m、東西は放水銃部分で約 2.0 m、配管部分で約 1.0 m で設定した。

調査は 2 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代中期から後期、第 2 面で江戸時代中期の遺構を検出した。なお、第 2 面は遺構が重複していたことから、第 2-1 面・第 2-2 面に分けている。

層序 配管部分は既設管などにより攪乱されている。また、大型の遺構により包含層が残っていない部分がほとんどである。約 10～20 cm の厚さの表土・盛土の下層は、約 30 cm の厚さのにぶい黄褐色泥土、その下層は灰黄褐色砂泥である。これらの層は配管部分西壁付近でのみ確認す



- | | |
|---|--|
| 1 表土 | 8 10YR4/3にぶい黄褐色泥土～砂泥 瓦片を多量含む (土坑30) |
| 2 (攪乱59) | 9 10YR3/4暗褐色砂泥 (土坑46) |
| 3 (攪乱29) | 10 10YR5/4にぶい黄褐色泥土 (粗砂泥) 瓦片を含む やや粘質 (江戸時代中期整地層か) : 第1面 |
| 4 (攪乱29) | 11 10YR4/2灰黄褐色泥土 (土坑103) |
| 5 (攪乱28) | 12 10YR4/2灰黄褐色砂泥～泥土 (土坑103) |
| 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 礫を多量含む 瓦片を多量含む (近代整地層か) | 13 10YR5/2灰黄褐色砂泥 礫を含む (江戸時代前期整地層か) : 第2面 |
| 7 10YR4/3にぶい黄褐色泥土～砂泥 瓦片を多量含む (土坑30) | |

図 14 C区断面図 (1:50)

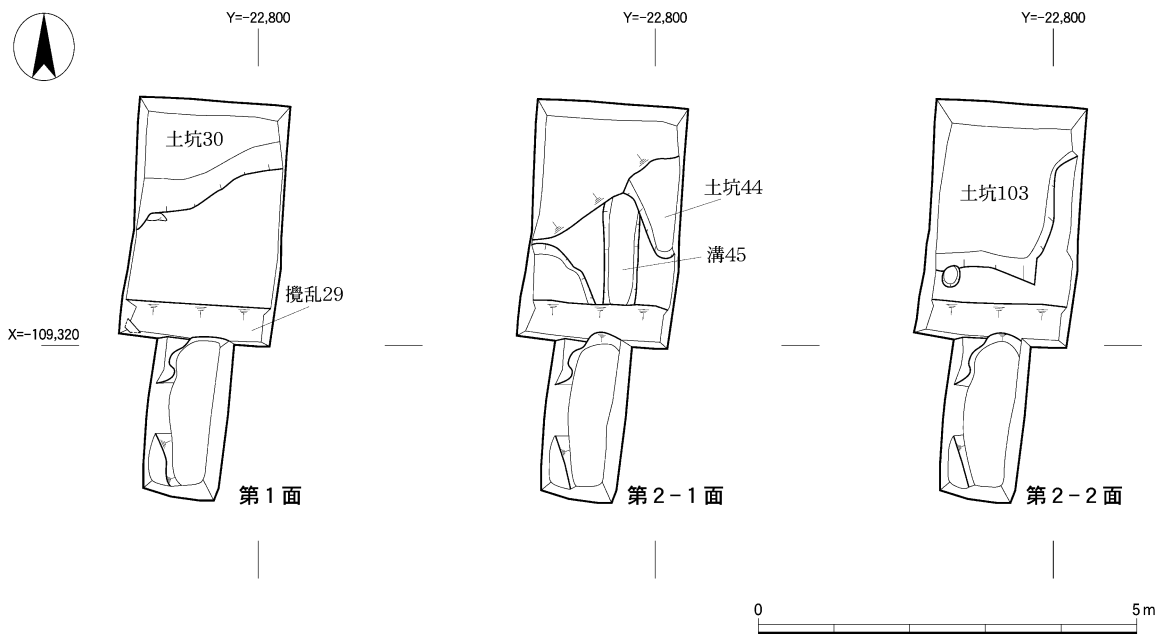


図 15 C区平面図 (1:100)

ることができた。にぶい黄褐色泥土は江戸時代中期の整地層、灰黄褐色砂泥は江戸時代前期の整地層と推定している。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、にぶい黄褐色泥土下面および第1面検出遺構底面を第2面として遺構検出を行った。

第1面 土坑 30 は北部で検出した。西側・北側・東側が調査区外となる大型の土坑で、深さは

0.5 m以上である。埋土は黒褐色砂泥で、江戸時代後期および中期以前の多量の瓦が出土した。

第2-1面 土坑44は北東部で検出した。北側は土坑30に攪乱され、東側は調査区外になる。南北1.3 m以上、東西0.7 m以上の不整形な平面形で、深さは約0.2 mである。埋土は褐色砂泥で、江戸時代中期以前の多量の瓦が出土した。

溝45は中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側は攪乱されている。断面形は浅いU字形で、長さ1.5 m以上、幅約0.4 m、深さ約0.2 mである。埋土は褐色砂泥で、江戸時代中期以前の遺物が出土した。

第2-2面 土坑103は北部で検出した。西側・北側が調査区外となる大型の土坑で、深さは約0.5 mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代中期以前の多量の瓦が出土した。

(5) D区の調査(図版6～9、図16～21)

概要 二の丸北部に設定した調査区で、土塀より北側の一斉開放弁建設予定地を北部、南側の配管設置予定箇所を南部とする。

北部は南北約4.8 m・東西約6.8 mの方形で、東側に南北約2.1 m・東西約3.0 m、南側に南北約0.8 m・東西約2.0 mの張り出し部もつ。

調査は3面に分けて実施し、第1面で江戸時代中期から後期、第2面で江戸時代前期、第3面で平安時代から室町時代の遺構を検出し、断面で江戸時代初期から前期の整地層を確認した。

南部は当初は南北約20.2 m、東西は北端で約2.0 m・南端で約3.0 mの南西側が張り出す長方形で設定したが、第1面調査中に後述する石列92の状況を追求するため南西側を拡張し、南端で約3.8 mの東西幅となった。

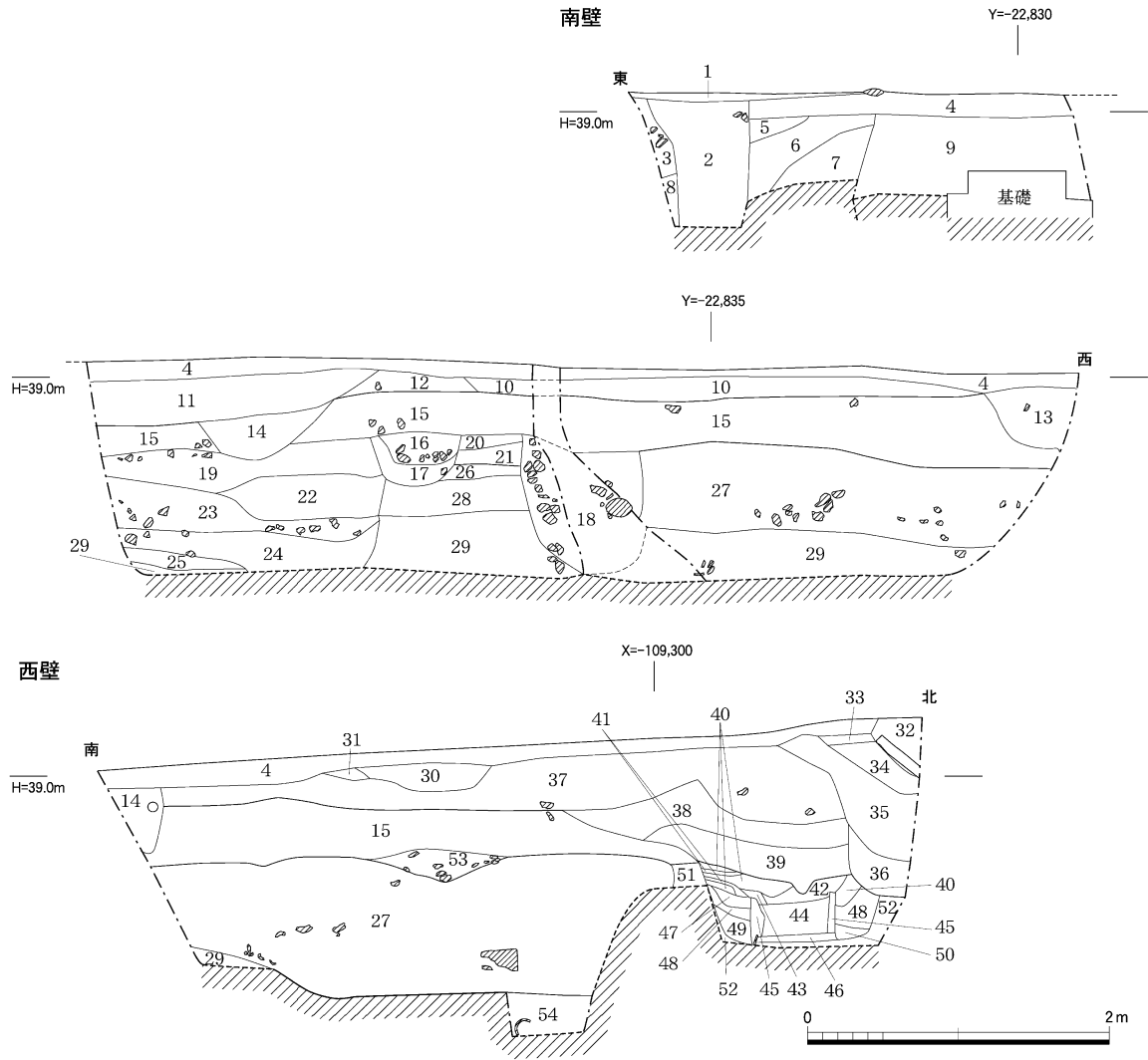
調査は3面に分けて実施し、第1面で江戸時代中期から後期、第2面で江戸時代前期の遺構を検出し、第3面で江戸時代前期の整地層を確認した。

層序 北部は東側張り出し部は既設管などにより攪乱されている。約30 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約30 cmの厚さの江戸時代中期から後期の包含層であるにぶい黄褐色砂泥である。この下層は江戸時代初期から前期の整地層であるにぶい黄褐色砂泥などを約90 cmの厚さで一度に積み上げている。この下層は平安時代の池107堆積土の上部となる粗砂混じりの黒褐色砂泥である。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、江戸時代中期から後期のにぶい黄褐色砂泥下面を第2面、江戸時代初期から前期のにぶい黄褐色砂泥などの下面を第3面として遺構検出を行った。

南部は南端部および東壁沿いが既設管などにより攪乱されている。約30 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約10～20 cmの厚さの江戸時代中期の包含層であるにぶい黄褐色砂泥などである。この下層は江戸時代前期の整地層であるにぶい黄橙色泥土などで、15 cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、にぶい黄褐色砂泥などの下面を第2面、にぶい黄橙色泥土などを工事予定深度まで掘り下げた部分を第3面として遺構検出を行った。



- | | |
|---|---|
| <p>1 表土</p> <p>2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (攪乱60)</p> <p>3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (攪乱 コンクリート含む)</p> <p>4 10YR4/2灰黄褐色砂泥～細砂 (現代盛土)</p> <p>5 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (攪乱)</p> <p>6 10YR4/4褐色砂泥～細砂 (攪乱)</p> <p>7 10YR4/4褐色砂泥～細砂 φ3～15cmの礫を含む (攪乱)</p> <p>8 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (粗砂混) 締まりが悪い (攪乱)</p> <p>9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥～細砂 φ1～15cmの礫を含む (大正天皇大典の建物基礎)</p> <p>10 10YR4/4褐色砂泥 (近代盛土)</p> <p>11 10YR3/3暗褐色砂泥 φ0.2～3cmの礫を含む 炭を微量含む (近代盛土)</p> <p>12 10YR3/3暗褐色砂泥 φ0.2～5cmの礫を含む (近代盛土か)</p> <p>13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (攪乱)</p> <p>14 10YR3/3暗褐色砂泥 φ0.2～3cmの礫を含む (土坑68)</p> <p>15 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ10cmの礫を少量含む (江戸時代後期か) : 第1面</p> <p>16 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ3～10cmの礫を含む (土坑)</p> <p>17 10YR3/4暗褐色砂泥 (土坑)</p> <p>18 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ3～20cmの礫を多量含む 瓦片を多量含む 締まりが悪い (集石89)</p> <p>19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑90)</p> <p>20 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥～細砂 (土坑90)</p> <p>21 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ2～13cmの礫を多量含む (土坑90)</p> <p>22 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (土坑90)</p> <p>23 10YR4/4褐色砂泥 (土坑90)</p> <p>24 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (江戸時代中期か)</p> <p>25 10YR3/3暗褐色砂泥 (江戸時代中期か)</p> <p>26 10YR3/3暗褐色砂泥に10YR5/4にぶい黄褐色砂泥が混じる (江戸時代初期～前期整地層) : 第2面</p> <p>27 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ0.2～13cmの礫を含む (江戸時代初期～前期) : 第2面</p> | <p>28 10YR3/3暗褐色砂泥～細砂 (江戸時代初期～前期)</p> <p>29 10YR4/2灰黄褐色砂泥～細砂 (江戸時代初期～前期)</p> <p>30 10YR3/2黒褐色砂泥 φ0.5～5cmの礫を中量含む 締まりが悪い (攪乱)</p> <p>31 10YR3/2黒褐色砂泥～細砂 (攪乱)</p> <p>32 10YR3/2黒褐色砂泥 φ0.5～10cmの礫を多量含む (攪乱 底部にコンクリート)</p> <p>33 10YR6/6明黄褐色砂 (近代盛土)</p> <p>34 10YR5/6灰黄褐色粘質土に10YR3/4暗褐色粘質土が混じる (攪乱64)</p> <p>35 10YR3/3暗褐色砂泥 (攪乱64)</p> <p>36 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (攪乱64)</p> <p>37 10YR3/3暗褐色砂泥 (近代盛土 11層に同じ)</p> <p>38 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR5/4にぶい黄褐色粘質土が混じる (近代盛土か)</p> <p>39 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (粗砂混) (近代盛土か)</p> <p>40 7.5Y6/1灰色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトが混じる</p> <p>41 10YR5/3にぶい黄褐色細砂～シルト</p> <p>42 10YR4/4褐色砂泥～細砂に10YR6/6明黄褐色シルトが混じる</p> <p>43 7.5YR6/1灰色シルトに10YR6/6明黄褐色シルトが混じる</p> <p>44 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ0.5～3cmの礫を少量含む (木樋88)</p> <p>45 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (木樋88側板)</p> <p>46 2.5Y4/2暗灰黄色細砂～シルト (木樋88底板)</p> <p>47 10YR5/2灰黄褐色細砂 (木樋88)</p> <p>48 10YR4/2灰黄褐色砂泥～細砂に40層のブロックが混じる (木樋88)</p> <p>49 10YR5/3にぶい黄褐色細砂～シルト (木樋88)</p> <p>50 10YR5/3にぶい黄褐色細砂～シルトに5Y6/2灰オリブ色シルトのブロックが混じる (木樋88)</p> <p>51 7.5Y4/3褐色砂泥 (粗砂混)</p> <p>52 10YR4/2灰黄褐色砂泥～細砂</p> <p>53 10YR3/3暗褐色砂泥 φ3～8cmの礫を含む</p> <p>54 10YR3/2黒褐色砂泥 (粗砂混) (池107) : 第3面</p> |
|---|---|

図 16 D区北部断面図 (1:50)

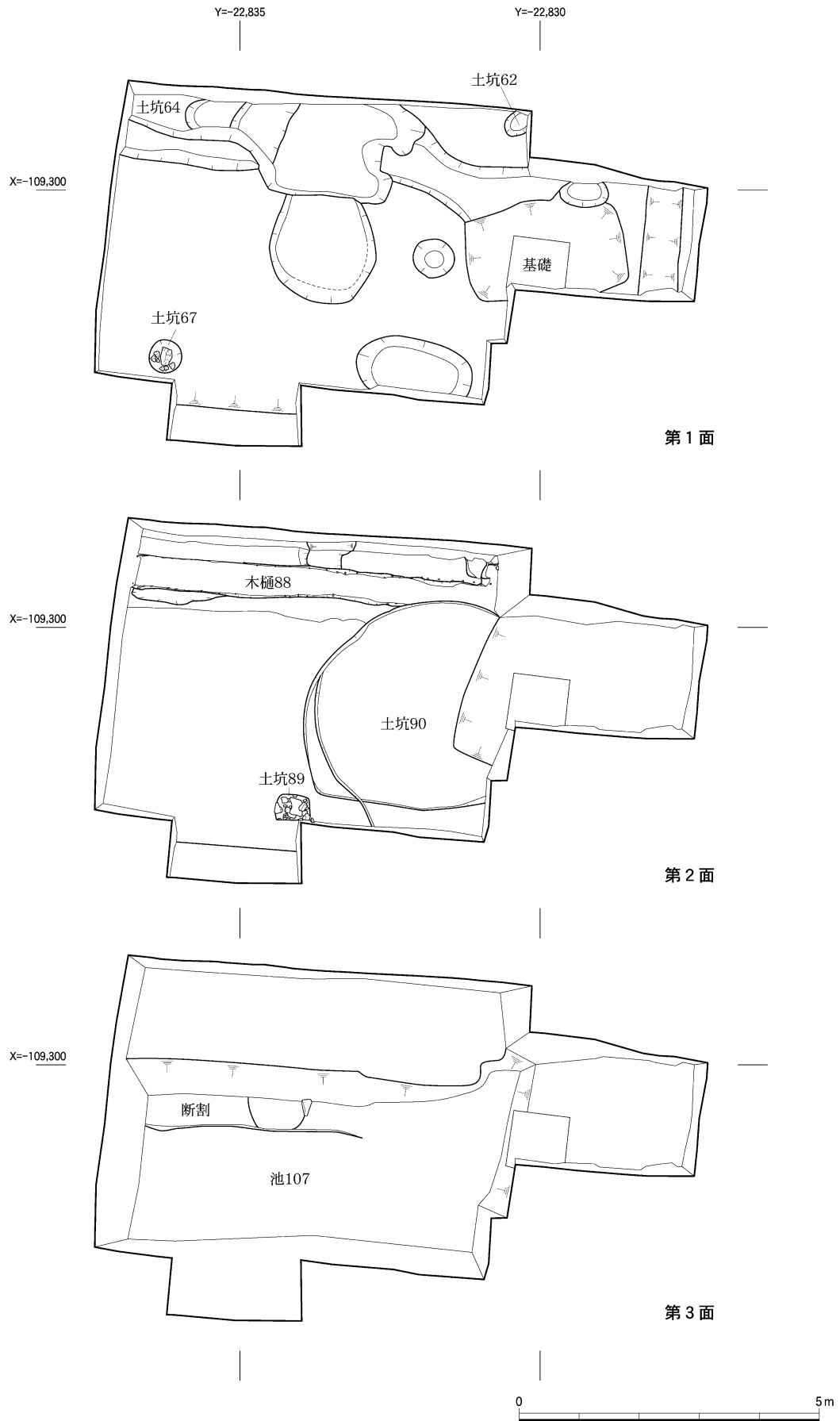


图 17 D区北部平面图 (1 : 100)

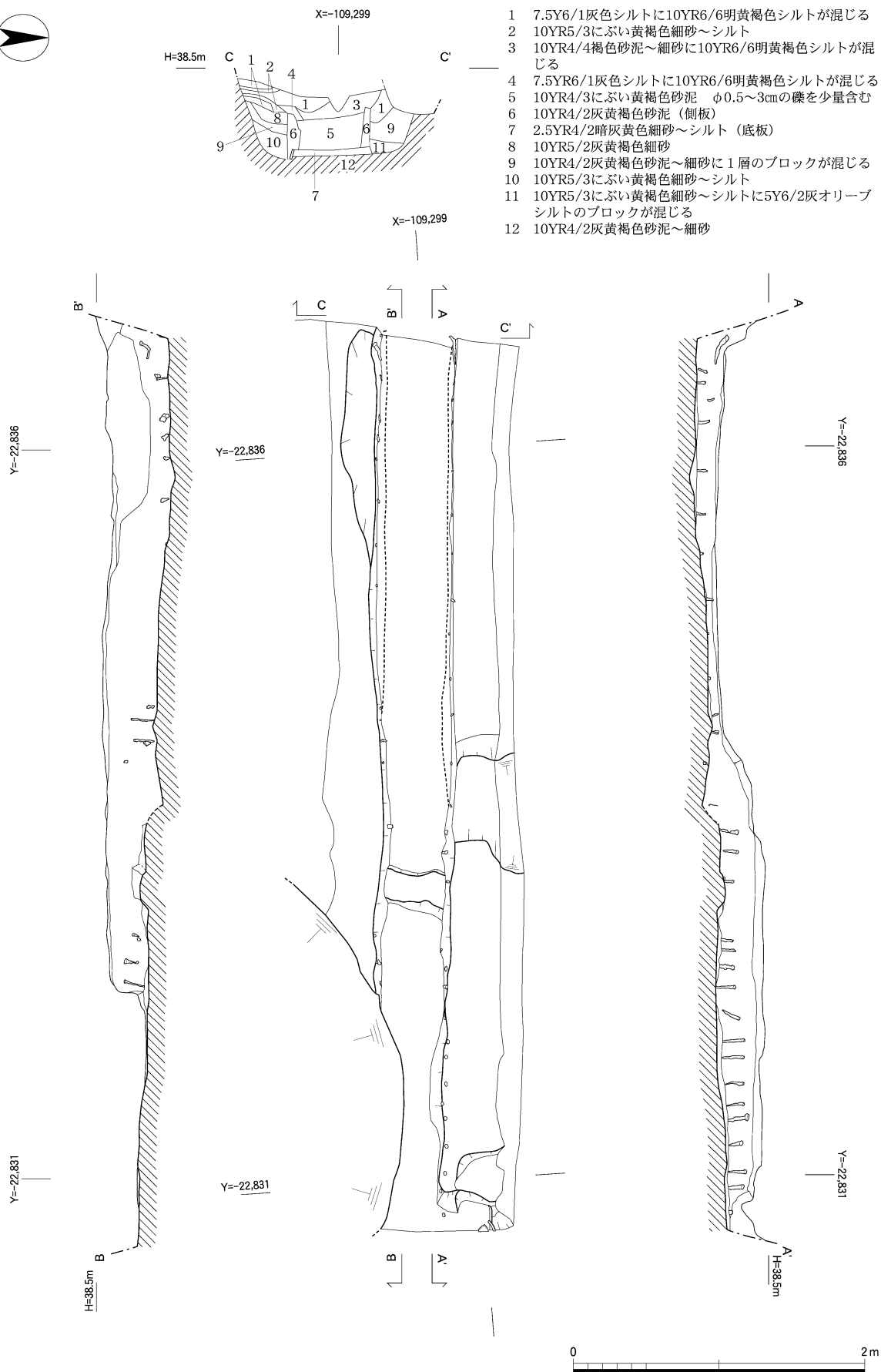


図 18 D区木槨 88 実測図 (1 : 40)

北部第1面 東側張り出し部の基礎は大正天皇即位の大典に伴う構築物である。

土坑 62 は北東部で検出した。北東側が調査区外となるが、平面形は南北約 0.2 m・東西約 0.2 mの楕円形に復元できる。深さは約 0.1 mである。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代中期の遺物がわずかに出土した。平安時代後期の遺物が混入する。

土坑 67 は南西部で検出した。平面形は直径約 0.3 mの円形で、深さ約 0.1 mである。数cmから 30 cmの大きさの石を含む。埋土は暗褐色砂泥で、出土遺物はない。

北部第2面 土坑 89 は南部で検出した。南側は調査区外となるが、平面形は南北 0.4 m以上、東西約 0.6 mの隅丸方形に復元できる。深さは約 0.1 mである。数cmから 20 cmの大きさの石を含む。出土遺物はない。

土坑 90 は東部で検出した。東側を攪乱されているが、平面形は直径約 3.4 mの円形に復元できる。深さは約 0.8 mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥・灰黄褐色砂泥などで、江戸時代中期の遺物が出土した。平安時代前期から後期の遺物が多く混入する。

木樋 88 は北部で検出した東西方向の遺構である。東側・西側は調査区外へ延びる。検出長は約 6.0 mである。西側で北に 3～4 度振る方位をとる。底面はわずかに西に向けて傾斜する。断面形が隅丸逆台形の掘形内に木樋を据え付ける。掘形は上面幅約 1.2 m・底面幅約 0.8 mで、深さは約 0.5 mである。木樋は断面の復元幅約 55 cm・復元高約 30 cmの箱形で、掘形との間を灰色シルトなどで厚く充填している。木樋内には明黄褐色シルトなどが落ち込んでいることから、木樋上面にもこれらを貼り付けていたことがわかる。木質のほとんどが腐朽していたが、底板の上に側板を載せて結合しており、組合せのために打ち込んだ鉄釘が約 10～20 cmの間隔で残る。江戸時代前期の遺物が出土した。

北部第3面 木樋 88 を残して調査区南半部を掘り下げた。また、堆積状況を確認するために浅い断割を行った。池 107 は調査区全体に拡がる。池底までは掘り下げていないが、堆積状況から南西方向へ落ち込んでいると考えている。断割部分では礫が敷かれたように拡がる部分がある。埋土は粗砂混じりの黒褐色砂泥などで、平安時代後期の遺物が出土した。弥生土器が混入する。

南部第1面 北東部壁際の基礎は大正天皇即位の大典に伴う構築物である。

土坑 70・土坑 73・土坑 75 は北部で検出した。南北方向に並び、検出長は約 4.2 mである。平面形は直径約 0.5～0.6 mの円形で、完掘していないため深さは不明である。間隔は北側から約 1.8 m・約 2.4 mである。いずれも数cmから 20 cmの大きさの石を含む。埋土は黒褐色砂泥で、出土遺物はない。

土坑 81 は中央部西壁際で検出した。西側は調査区外となるが、平面形は南北約 0.5 m・東西 1.0 m以上の溝状で、完掘していないため深さは不明である。数cmから 10 cmの大きさの石を含む。出土遺物はない。

土坑 87 は南部西壁際で検出した。西側は調査区外となるが、平面形は南北約 0.4 m・東西 0.5 m以上の楕円形に復元できる。完掘していないため深さは不明である。数cmから 10 cmの大きさの石を含む。出土遺物はない。

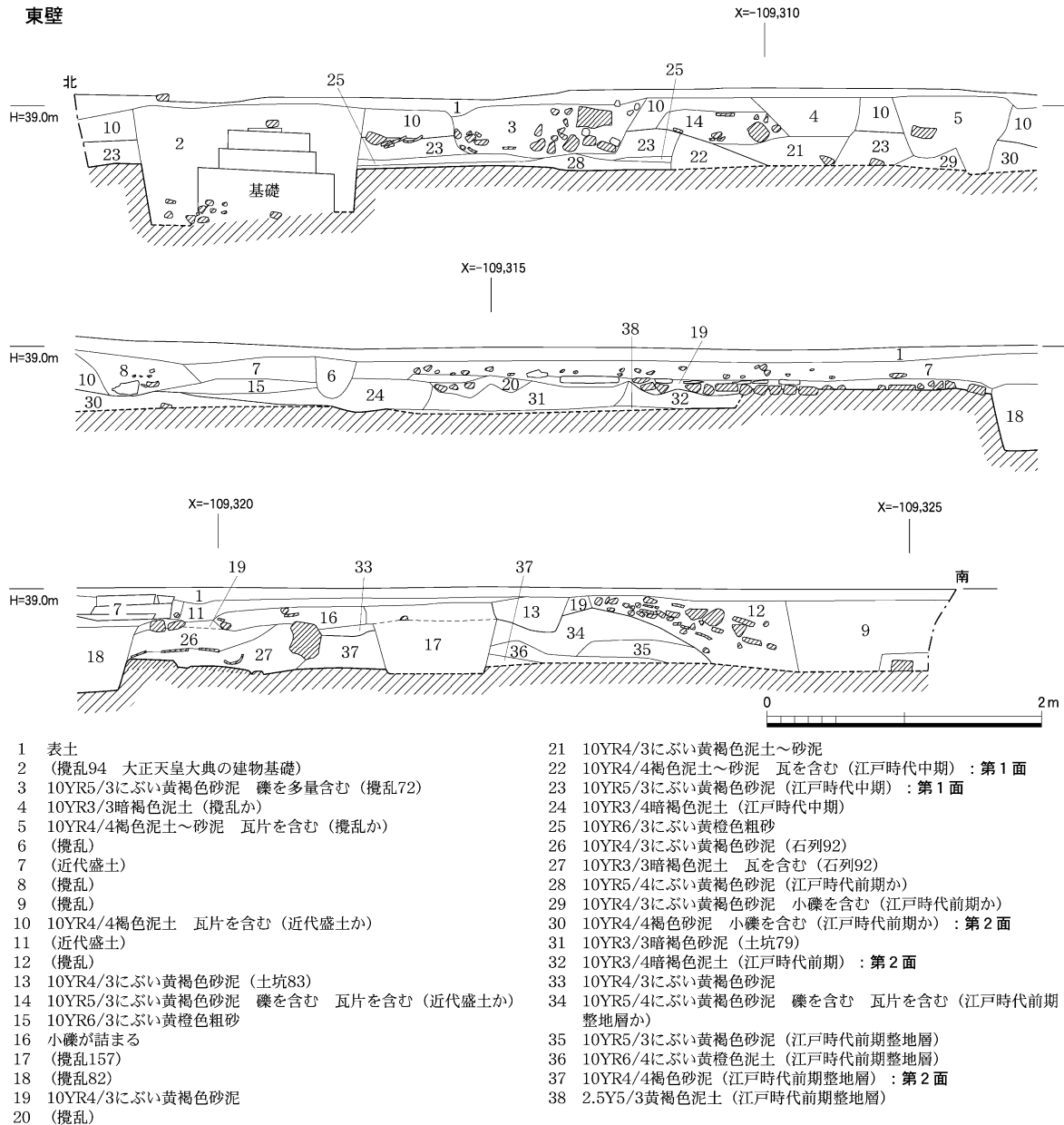


図19 D区南部断面図(1:50)

南部第2面 上記の遺構などを残して北部から中央部は東半部、南部では下層遺構を確認する目的で南北方向の断割を2箇所設定して掘り下げた。

石列92は南部で検出した。抜き取られた石材が多いが、東西方向の石組溝であった可能性が高い。東側・西側が調査区外へ延びる。検出長は約3.5mである。断面で明瞭な掘形を確認できないことから、整地と同時に構築していることがわかる。底部は平坦な石材、南側は細長い石材を長軸を東西方向にして並べる。北側の集石106は抜き取られた石材の裏込めと考えられるので、幅は約1.3mに復元できる。石材の大きさは長軸方向約70～80cm・短軸方向約30cmで、種類は花崗岩・砂岩などである。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、出土遺物はない。

集石100は中央部で検出した。南北約1.5m・東西約1.9mの不整形な範囲に数cmから20cmの大きさの石が面状に広がる。整地面の可能性が考えられる。出土遺物はない。



X=-109.310

X=-109.315

X=-109.320

X=-109.325

Y=-22.836

Y=-22.836

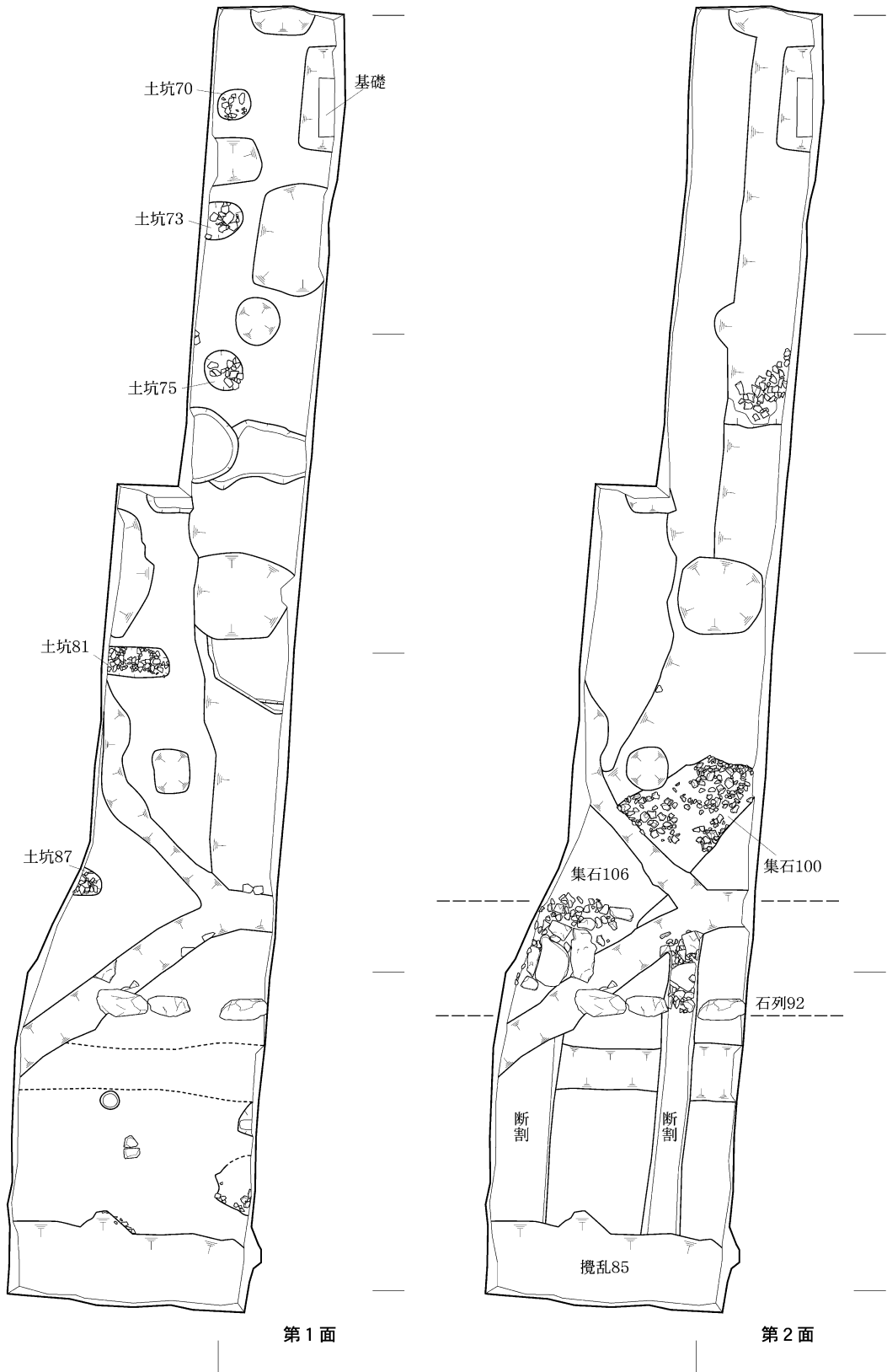


图 20 D区南部平面图 (1 : 100)

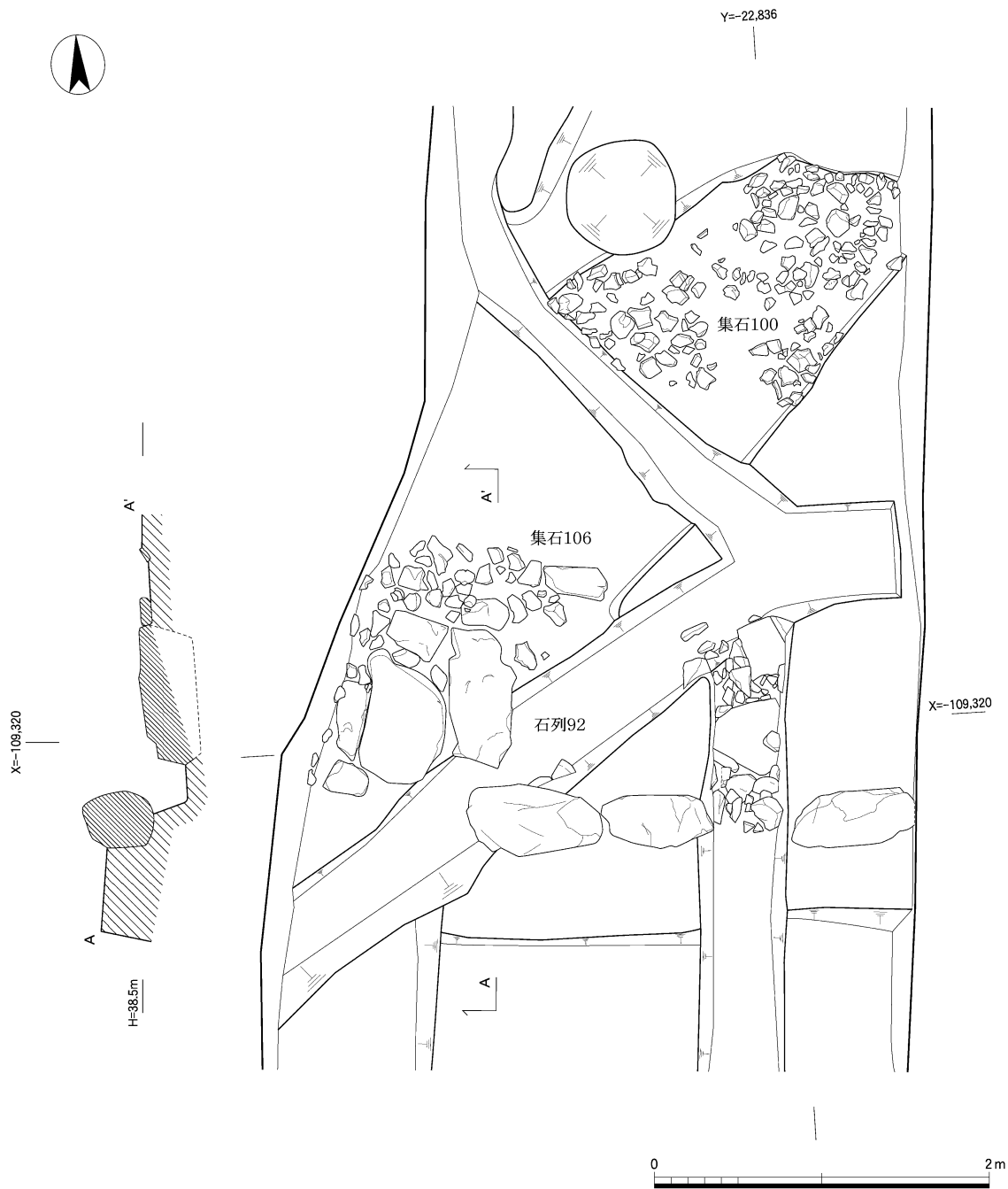
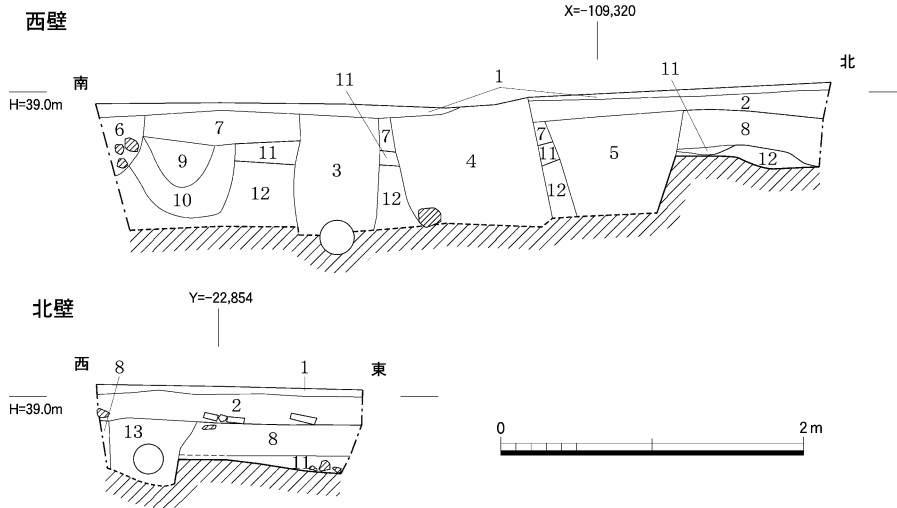


図 21 D区石列92実測図(1:40)

南部第3面 第2面で掘り下げた部分を石列92などを残して工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

(6) E区の調査(図版5、図22・23)

概要 二の丸北部、二の丸御殿白書院北東側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。北側が放水銃部分、南側が配管部分となる「凸」字形で、南北約5.0m、東西は放水銃部分で約2.0m、配管部分で約1.0mで設定したが、第2面調査中に後述する土坑47の南肩を確認するため放水銃部分を南側へ約0.3m拡張した。



- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 表土 | 8 7.5YR4/3褐色砂泥 φ10cm位の礫を含む (江戸時代中期か) |
| 2 (現代盛土) | 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑) |
| 3 (攪乱) | 10 7.5YR4/3褐色砂泥 (土坑) |
| 4 (攪乱) | 11 10YR5/6黄褐色砂泥～細砂 (江戸時代中期か) : 第1面 |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑47) | 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (江戸時代前期整地層か) |
| 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ5~15cmの礫を含む (土坑96) | 13 (攪乱) |
| 7 10YR4/4褐色砂泥 | |

図 22 E区断面図 (1 : 50)

調査は2面に分けて実施し、第1面で江戸時代中期から後期、第2面で江戸時代前期・中期の整地層を確認した。なお、第1面は放水銃部分と配管部分で堆積状況が異なっていたことから、第1-1面・第1-2面に分けている。

層序 大部分を既設管などにより攪乱されている。約10cmの厚さの表土の下層は、放水銃部分は約10~15cmの厚さの盛土、配管部分は約20cmの厚さの褐色砂泥である。褐色砂泥は江戸時代後期の包含層の可能性もある。その下層は放水銃部分は約30cmの厚さの褐色砂泥、配水管部分は約10cmの厚さの黄褐色砂泥～細砂である。これらの下層はにぶい黄褐色砂泥で、40cm以上の厚さがある。褐色砂泥・黄褐色砂泥～細砂は江戸時代中期の整地層、にぶい黄褐色砂泥は江戸時代前期の整地層と推定している。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1-1面、配管部分の褐色砂泥下面を第1-2面、にぶい黄褐色砂泥を工事予定深度まで掘り下げた部分を第2面として遺構検出を行った。

第1-1面 攪乱を認めたのみである。

第1-2面 土坑47は中央部で検出した。東側・西側は調査区外となる。平面

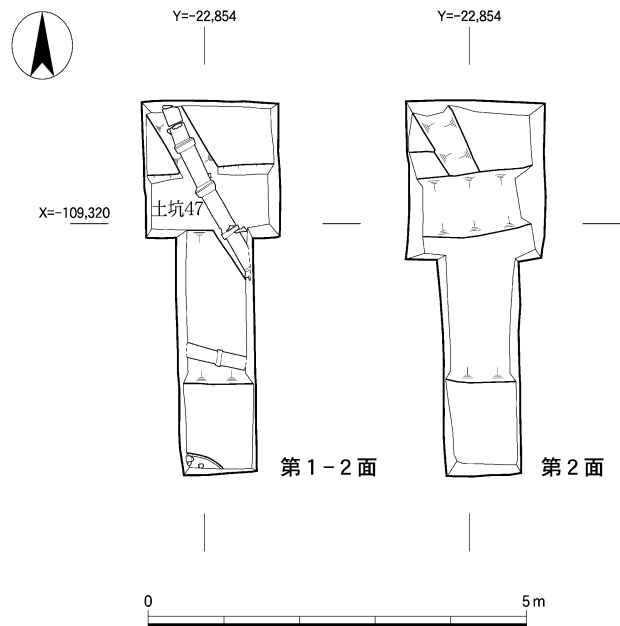


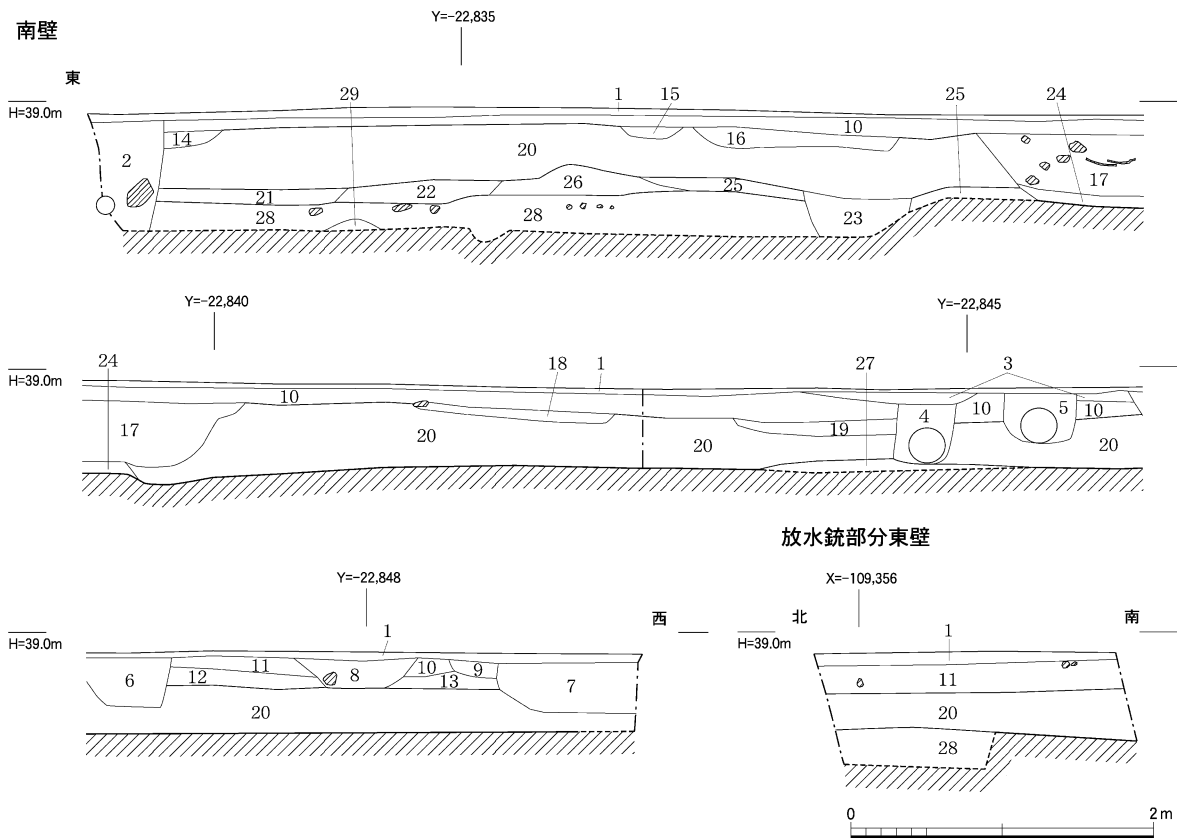
図 23 E区平面図 (1 : 100)

形は南北約 0.9 m、東西 1.7 m 以上の溝状で、深さは 0.6 m 以上である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代中期の遺物がわずかに出土した。室町時代の遺物が多く混入する。

第 2 面 土坑 47 より南側を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

(7) F 区の調査 (図版 10、図 24・25)

概要 二の丸中央部、二の丸御殿白書院と黒書院の中間東側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。西端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる「へ」字形で、放水銃部分は南北



- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 表土 2 (攪乱) 3 7.5YR4/3褐色砂泥 (近代盛土) 4 (攪乱) 5 (攪乱) 6 (攪乱) 7 (攪乱) 8 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 φ1~10cmの礫を含む 瓦片を含む 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥と2.5Y3/2黒褐色砂泥が混じる 10 10YR4/4褐色砂泥 炭を少量含む 瓦片を少量含む (近代盛土か) 11 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (粗砂混) 締まりが悪い (近代盛土か) 12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 φ1~9cmの礫を少量含む 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~3cmの礫を少量含む 瓦片を少量含む 14 10YR4/6褐色砂泥 φ1~3cmの礫を含む (土坑154) 15 10YR3/3暗褐色砂泥 炭を多量含む 瓦片を多量含む (溝153) 16 10YR4/6褐色砂泥に10YR5/8黄褐色砂泥ブロックが混じる φ1~10cmの礫を多量含む (土坑152) 17 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥と10YR4/6褐色砂泥が混じる φ1~10cmの礫を含む 瓦片を含む (土坑150) | <ul style="list-style-type: none"> 18 10YR4/4褐色砂泥 φ1~3cmの礫を含む (土坑148) 19 7.5YR4/4褐色砂泥と10YR4/6褐色砂泥が混じる (粗砂混) φ1~5cmの礫を含む (土坑147) 20 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫を多量含む (江戸時代中期~後期整地層) : 第1面 21 10YR4/6褐色砂泥に2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥ブロックが混じる 土器片を少量含む (江戸時代前期整地層) : 第2面 22 10YR3/4暗褐色砂泥 炭を少量含む 瓦片を少量含む (江戸時代前期整地層) : 第2面 23 10YR4/6褐色砂泥に10YR5/6黄褐色粘質土ブロックが混じる φ1~5cmの礫を多量含む 24 7.5YR4/4褐色砂泥に10YR4/6褐色粘質土ブロックが混じる (粗砂混) (江戸時代前期整地層) 25 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 (江戸時代前期整地層) : 第2面 26 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (江戸時代前期整地層) : 第2面 27 10YR3/4暗褐色砂泥に7.5YR5/6暗褐色粘質土ブロックが混じる (江戸時代前期整地層) : 第2面 28 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥に7.5YR5/6明褐色砂泥ブロックが混じる 土器片を含む (江戸時代初期整地層) : 第3面 29 10YR6/8明黄褐色シルト (江戸時代初期整地層) |
|---|--|

図 24 F 区断面図 (1 : 50)

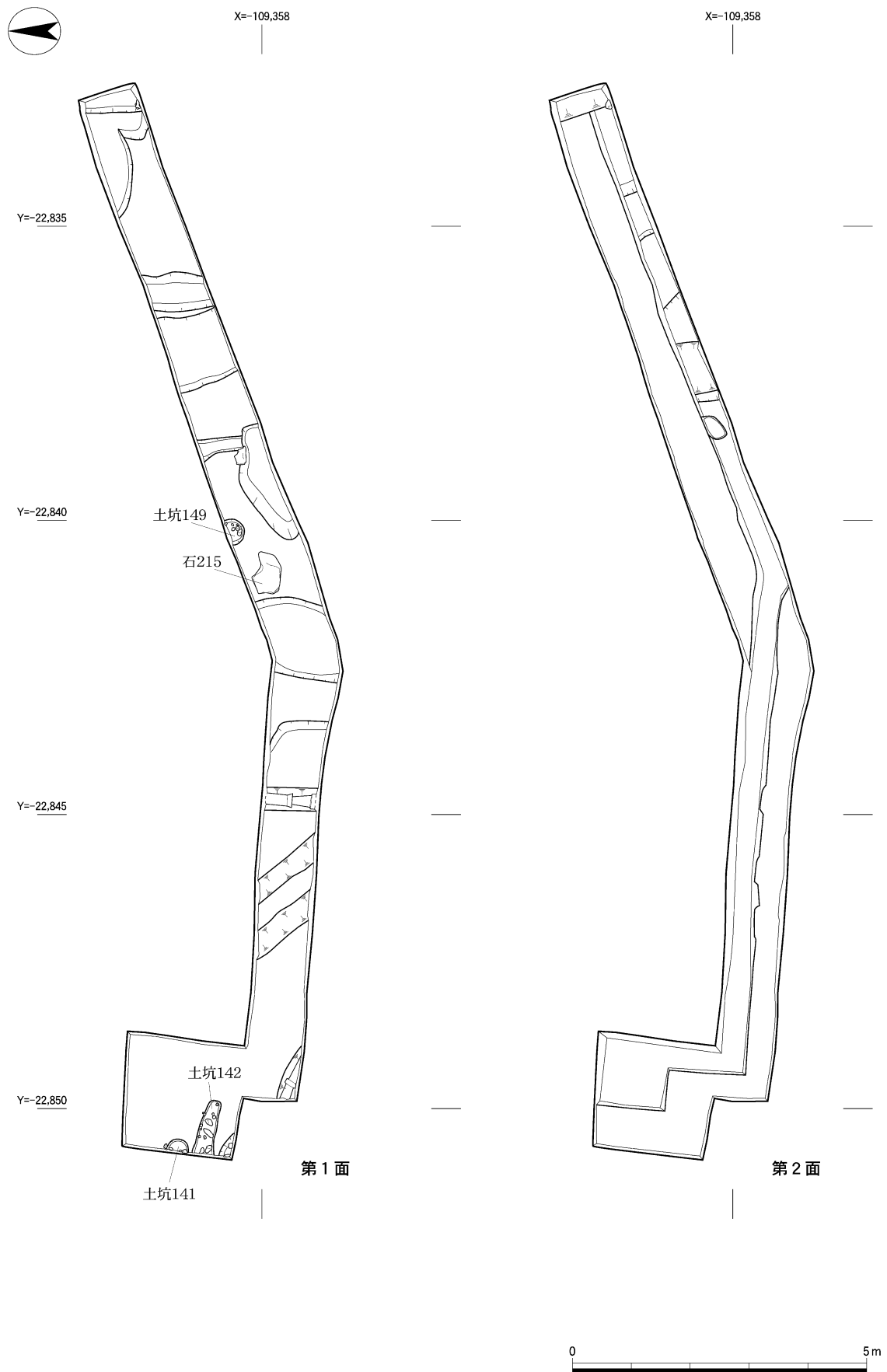


图 25 F区平面图 (1 : 100)

約 2.0 m・東西約 2.0 m、配管部分の長さは西半部で約 7.5 m、折れ曲がる東半部で約 10.0 m、幅は約 1.0 mで設定した。

調査は 3 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代中期から後期、第 2 面で江戸時代前期の遺構を検出し、第 3 面で江戸時代初期の整地層を確認した。

層序 約 15 ～ 20 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約 30 ～ 40 cmの厚さの江戸時代中期から後期の整地層である礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥である。この下層は約 10 ～ 20 cmの厚さの江戸時代前期の整地層である褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥などで褐色粘質土・褐色砂泥のブロックを含む部分がある。この下層は江戸時代初期の整地層である暗オリーブ褐色砂泥で、30 cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第 1 面、にぶい黄褐色砂泥下面を第 2 面、褐色砂泥などの下面を第 3 面として遺構検出を行い、さらに暗オリーブ褐色砂泥を工事予定深度まで掘り下げた。

第 1 面 土坑 141 は西部で検出した。西側が調査区外となるが、平面形は直径約 0.3 ～ 0.4 mの円形に復元できる。完掘していないため深さは不明である。数cmから 10 cmの大きさの石を含む。埋土は褐色砂泥で、出土遺物はない。

土坑 142 は西部で検出した。西側は調査区外となるが、平面形は南北約 0.4 m・東西 0.9 m以上の溝状で、完掘していないため深さは不明である。数cmから 10 cmの大きさの石を含む。埋土は褐色砂泥で、出土遺物はない。

土坑 149 は中央部で検出した。北側が調査区外となるが、平面形は直径約 0.4 mの円形に復元できる。完掘していないため深さは不明である。数cmから 10 cmの大きさの石を含む。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、出土遺物はない。

石 215 は中央部で検出した。大きさは約 60 cmで、石材の種類は花崗岩である。掘形を確認できないことから、原位置から移動されたものである可能性がある。

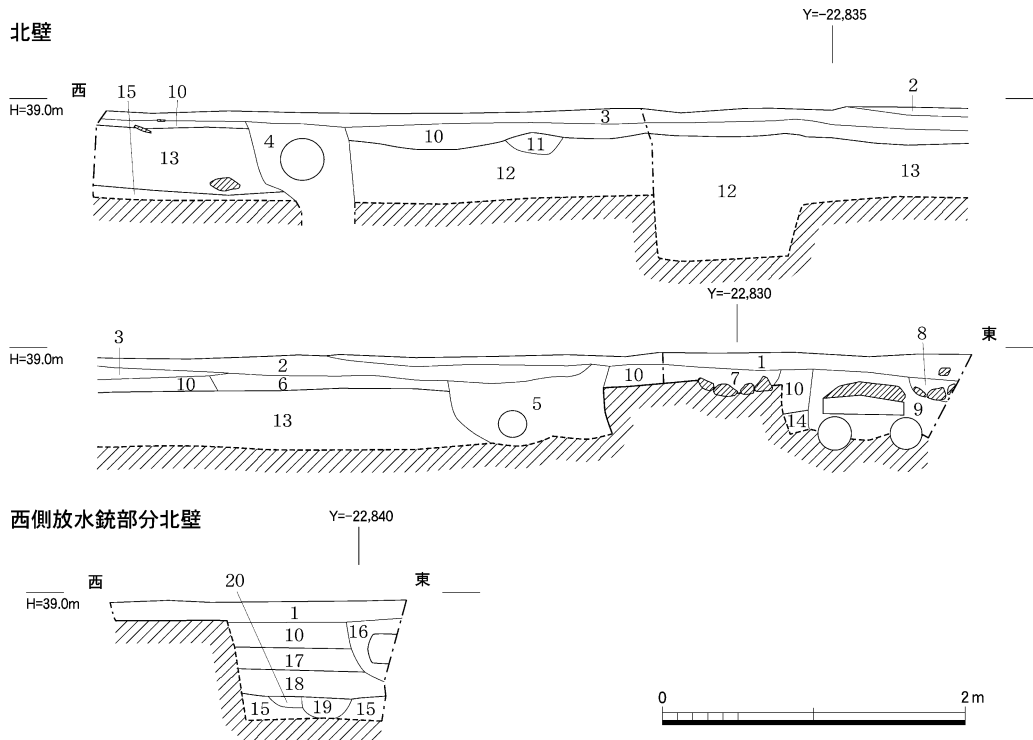
第 2 面 上記の遺構などを残して放水銃部分は北東側、配管部分は西半部の北側、東半部の南側を掘り下げた。東半部で浅い土坑を検出したのみである。

第 3 面 第 2 面で掘り下げた部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代初期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

(8) G区の調査 (図版 11、図 26・27)

概要 二の丸中央部、二の丸御殿黒書院東側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区で、東側はH区につながる。北西角・北辺中央の 2 箇所が放水銃部分、ほかは配管部分となる L 字形で、南北約 2.0 m・東西約 13.3 mで設定したが、第 1 面調査中に後述する柱穴群の拡がりを確認するため東半部を北側へ約 2.0 ～ 3.0 m拡張した。

調査は 3 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代後期から近代の遺構を検出し、第 2 面で江戸時代前期、第 3 面で江戸時代初期の整地層を確認した。



- | | |
|--|--|
| <p>1 表土（白砂）</p> <p>2 表土（白砂・腐植土）</p> <p>3 表土（腐植土）</p> <p>4 (攪乱)</p> <p>5 (攪乱)</p> <p>6 10YR3/3暗褐色砂泥 瓦片を多量含む</p> <p>7 7.5YR4/3褐色砂泥（土坑109）</p> <p>8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（土坑112）</p> <p>9 (攪乱)</p> <p>10 10YR4/4褐色砂泥 φ1~3cmの礫を多量含む 瓦片を含む（近代盛土か H区2層と同じ）</p> <p>11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 瓦片を多量含む（溝35）</p> <p>12 10YR3/4暗褐色砂泥 瓦片を多量含む（土坑36）</p> | <p>13 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1~10cmの礫を多量含む 瓦片を少量含む（江戸時代中期～後期整地層）：第1面</p> <p>14 10YR3/3暗褐色砂泥に7.5YR4/4褐色砂泥ブロックが混じる（江戸時代前期整地層）：第2面</p> <p>15 2.5YR3/3暗オリーブ褐色砂泥 炭を含む 土器片を含む（江戸時代初期整地層）：第3面</p> <p>16 (攪乱)</p> <p>17 2.5YR4/4褐色砂泥（粗砂混） 炭を少量含む（江戸時代中期～後期整地層）：第1面</p> <p>18 10YR5/6黄褐色砂泥 φ1~10cmの礫を多量含む 瓦片を少量含む（江戸時代前期整地層）：第2面</p> <p>19 10YR4/4褐色砂泥（粗砂混） φ1~2cmの礫を含む（土坑）</p> <p>20 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥に2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥ブロックが混じる 炭を含む</p> |
|--|--|

図 26 G区断面図（1：50）

層序 北東部は既設管などにより攪乱されている。また、大型の遺構により包含層が残っていない部分も多い。約 10～20 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約 25～40 cmの厚さの江戸時代中期から後期の整地層である礫を多く含む黄褐色砂泥である。この下層は約 20 cmの厚さの江戸時代前期の整地層である褐色砂泥のブロックを含む暗褐色砂泥である。この下層は江戸時代初期の整地層である暗オリーブ褐色砂泥で、20 cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、黄褐色砂泥下面を第2面、暗褐色砂泥下面を第3面として遺構検出を行い、さらに暗オリーブ褐色砂泥を工事予定深度まで掘り下げた。

第1面 東部で柱穴群を検出した。柱穴9～柱穴16・柱穴109・柱穴110が東西・南北方向に並び、南北5.0 m以上・東西2.8 m以上の範囲に広がる。柱穴の平面形は直径約0.4～0.6 mの円形で、完掘していないため深さは不明である。間隔は北側から約0.9 m・約2.1 m・約1.0 m・約1.0 m、東側から約1.4 m・約1.4 mである。いずれも数cmから15 cmの大きさの石を含む。埋土は暗褐色砂泥などで、平安時代から江戸時代の遺物がわずかに出土したのみである。柱穴15・

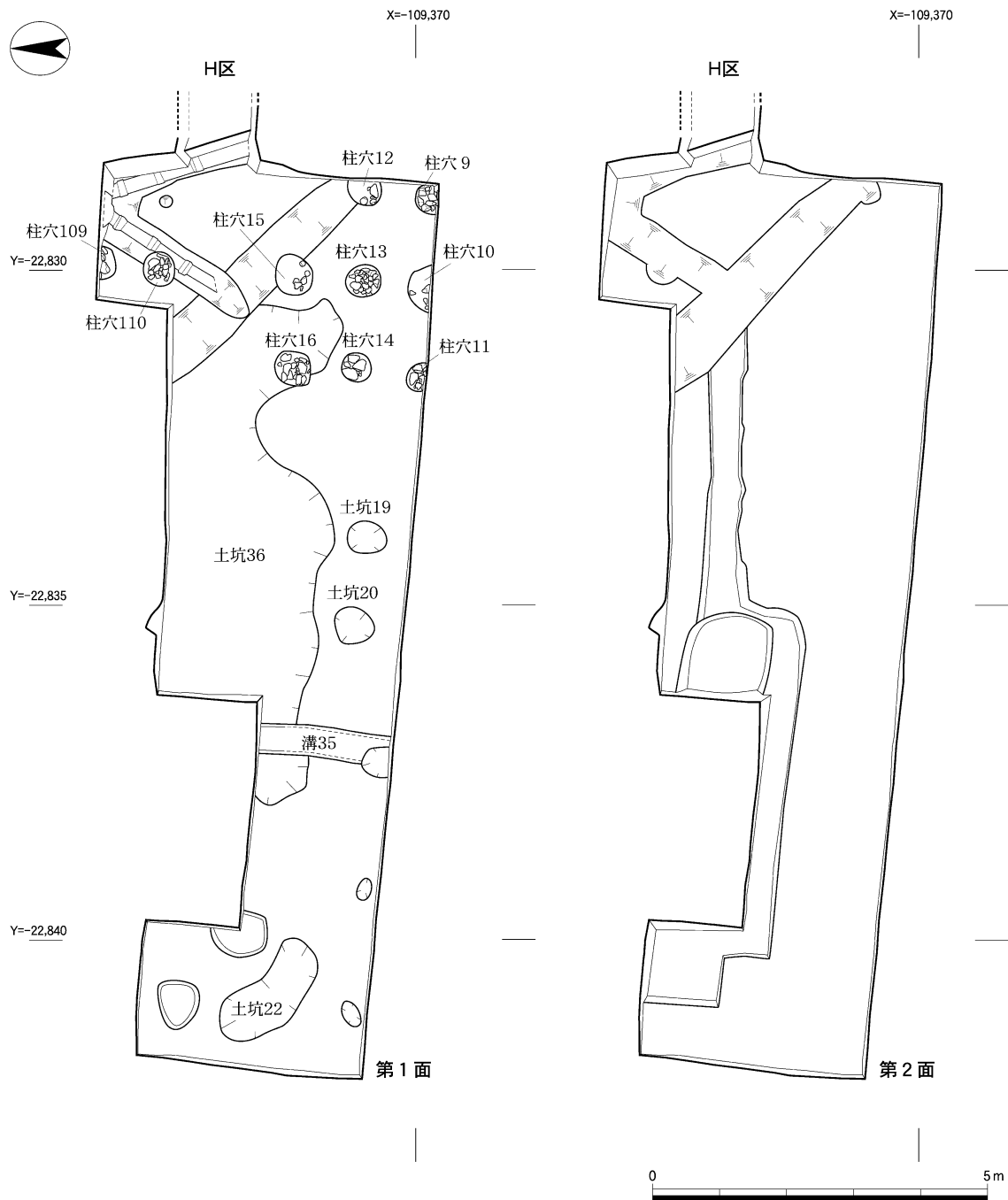


図 27 G区平面図 (1 : 100)

柱穴 110 は下水管理土上面の遺構である。

土坑 19・土坑 20 は中央部で検出した。東西方向に並ぶ。平面形はともに直径約 0.6 m の円形で、完掘していないため深さは不明である。間隔は約 1.4 m である。埋土は暗褐色砂泥で、土坑 20 から瓦片が 1 点出土したのみである。

土坑 22 は西部で検出した。南北約 1.4 m ・東西約 1.4 m の不整形な平面形で、完掘していないため深さは不明である。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代後期の遺物がわずかに出土した。

土坑 36 は中央部北壁沿いで検出した。北側が調査区外となる大型の土坑で、深さは 0.8 m 以上である。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代の多量の瓦が出土した。

溝 35 は中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側が調査区外に延びる。断面形は浅い U 字形で、長さ 2.0 m 以上、幅約 0.4 m で、深さは約 0.1 m である。埋土は褐色砂泥で、出土遺物はない。

第 2 面 上記の遺構などを残して西側放水銃部分は北東側、東側放水銃部分は土坑 36 埋土、配管部分は北壁沿いと土坑 36 埋土を掘り下げた。土坑 36 底面は工事予定深度よりも深く、西側放水銃部分および土坑 36 西側では遺構は検出していない。

第 3 面 第 2 面で掘り下げた西側放水銃部分および土坑 36 西側の配管部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代初期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

(9) H 区の調査 (図版 12、図 28・29)

概要 二の丸中央部、台所と御清所の間西側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区で、西側は G 区につながる。東端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる東西に細長い形で、放水銃部分は南北約 2.0 m・東西約 2.0 m、配管部分の長さは約 31.0 m、幅は約 1.0 m で設定した。

調査は 3 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代中期から後期、第 2 面で江戸時代前期の遺構を検出し、第 3 面で江戸時代初期の整地層を確認した。

層序 放水銃部分は廃棄土坑などにより攪乱されている。約 10～20 cm の厚さの表土・盛土の下層は、約 10～20 cm の厚さの黒褐色砂泥・暗褐色砂泥である。これらは江戸時代後期の整地層の可能性もある。この下層は約 10～20 cm の厚さの江戸時代中期の整地層である礫を多く含む褐色砂泥である。この下層は約 40～50 cm の厚さの江戸時代前期の整地層であるオリーブ褐色砂泥・暗褐色砂泥などで、下部には褐色粘質土が面状に拡がる部分がある。この下層は江戸時代初期の整地層である暗オリーブ褐色砂泥で、10 cm 以上の厚さがある。

調査では機械掘削で盛土・黒褐色砂泥・暗褐色砂泥までを除去し、この下面を第 1 面、褐色砂泥下面を第 2 面、オリーブ褐色砂泥などの下面を第 3 面として遺構検出を行った。

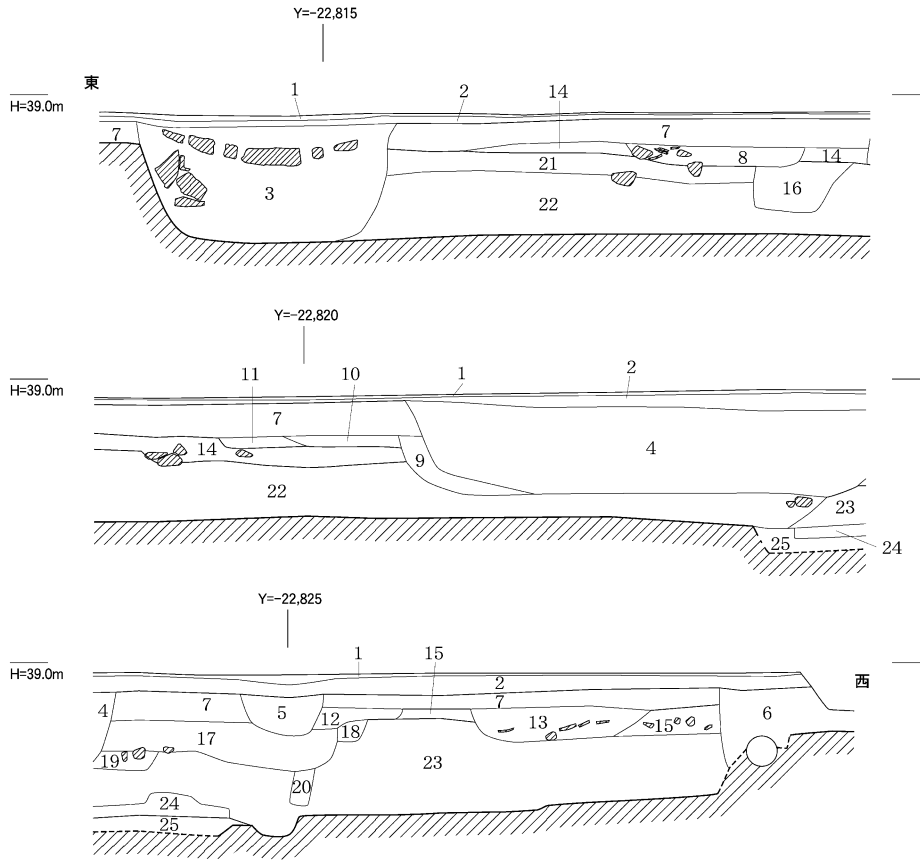
第 1 面 土坑 116 は東部で検出した。北側・南側が調査区外となるが、平面形は南北 0.8 m 以上、東西約 1.0 m の溝状で、深さは約 0.3 m である。埋土は褐色砂泥で、江戸時代前期から中期の遺物がわずかに出土した。

土坑 117・土坑 119・土坑 122・土坑 126 は東部で検出した。東西方向に並び、検出長は約 6.0 m である。南側は調査区外となるが、平面形は直径約 0.5～0.8 m の円形に復元できる。深さは約 0.1 m である。間隔は東側から約 2.1 m・約 1.9 m・約 2.0 m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥・暗褐色砂泥などで、土坑 117 から江戸時代後期の遺物が少量出土した。

土坑 128 は中央部で検出した。南側を攪乱され、北側は調査区外となるが、平面形は南北 0.5 m 以上・東西約 1.0 m の円形に復元できる。深さは約 0.2 m である。底面に 5～15 cm の大きさの石が詰まる。埋土は褐色砂泥～細砂で、江戸時代中期から後期の遺物がわずかに出土した。

第 2 面 上記の遺構などを残して攪乱 133 を境として東半部の北側、西半部の南側を掘り下げた。東半部で浅い土坑を検出したのみである。

西半南壁



東半北壁

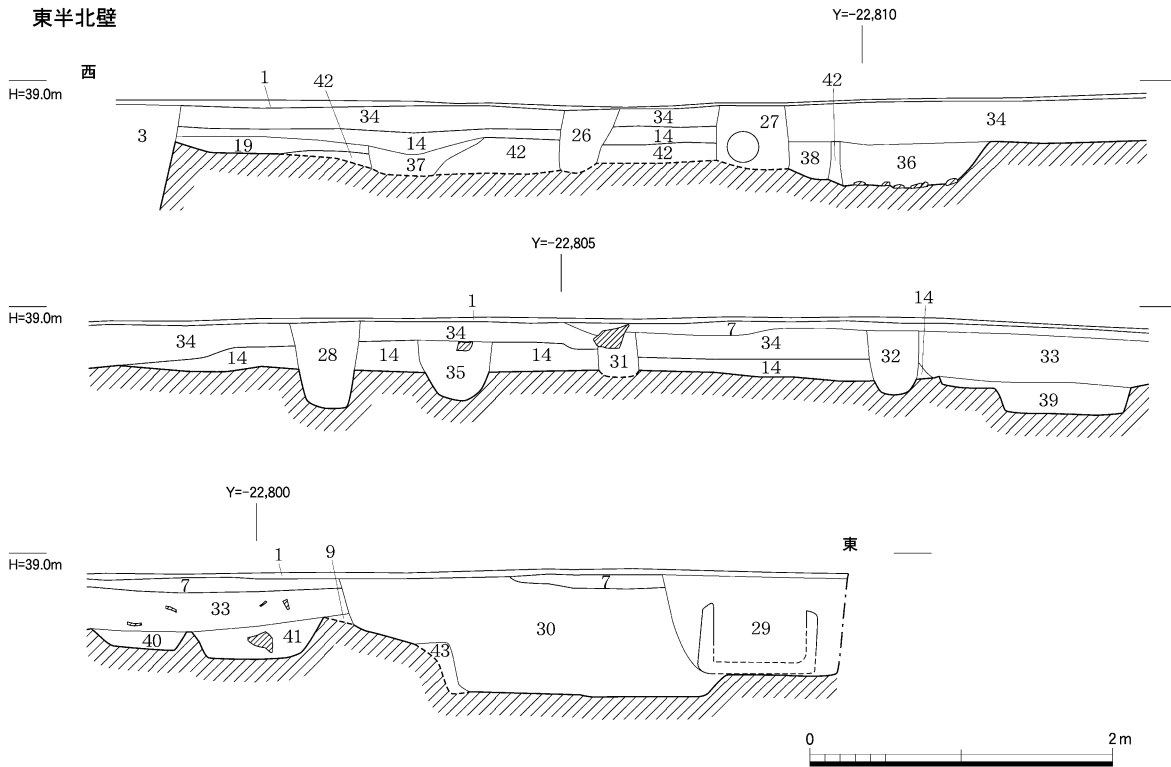


图 28 H区断面图 (1 : 50)

- | | |
|--|---|
| 1 表土 | 23 10YR4/4褐色砂泥に7.5YR4/6褐色細砂ブロックが混じる φ1～15cmの礫を多量含む 瓦片を含む (江戸時代前期盛土) : 第2面 |
| 2 10YR4/4褐色砂泥 φ1～3cmの礫を多く含む 瓦片を含む (近代盛土か G区10層と同じ) | 24 10YR4/6褐色粘質土 (江戸時代前期盛土) |
| 3 (攪乱133) | 25 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 炭を少量含む 土器片を少量含む (江戸時代初期整地層) : 第3面 |
| 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ13～15cmの礫を多量含む 瓦片を多量含む (土坑135) | 26 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (攪乱132) |
| 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土器片を少量含む (土坑) | 27 (攪乱) |
| 6 (攪乱) | 28 10YR3/3暗褐色砂泥 (攪乱125) |
| 7 7.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1～3cmの礫を多量含む 炭を含む 土器片を含む やや粘質 (江戸時代後期整地層か) | 29 (攪乱) |
| 8 10YR4/4褐色砂泥 (粗砂混) φ5～15cmの礫を多量含む 瓦片を含む (土坑134) | 30 (攪乱114) |
| 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑155) | 31 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ2～10cmの礫を含む (柱穴121) |
| 10 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片を含む (土坑136) | 32 10YR3/3暗褐色砂泥 (土坑118) |
| 11 10YR2/2黒褐色砂泥 φ1～3cmの礫を含む 土器片を少量含む | 33 10YR4/4褐色砂泥 φ1～10cmの礫を含む 瓦片を多量含む (土坑115) |
| 12 10YR3/4暗褐色砂泥 (土坑139) | 34 10YR3/4暗褐色砂泥 φ2～5cmの礫を含む 土器片・瓦片を少量含む (江戸時代後期整地層か) |
| 13 7.5YR4/4褐色砂泥 φ1～10cmの礫を多量含む 瓦片を多量含む (土坑140) | 35 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑123) |
| 14 7.5YR4/3褐色砂泥 (粗砂混) φ0.5～3cmの礫を多量含む (江戸時代中期整地層) : 第1面 | 36 10YR4/4褐色砂泥 (土坑128) |
| 15 10YR4/6褐色砂泥 φ1～10cmの礫を多量含む (江戸時代中期整地層か) : 第1面 | 37 10YR4/4褐色砂泥 炭を少量含む (土坑168) |
| 16 10YR4/4褐色砂泥 炭を少量含む (土坑169) | 38 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (土坑129) |
| 17 10YR3/4暗褐色砂泥 (土坑137) | 39 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ2～5cmの礫を多量含む 瓦片を含む (土坑167) |
| 18 10YR3/3暗褐色砂泥 炭を含む 土器片を含む | 40 10YR4/4褐色砂泥 φ0.5～5cmの礫を多量含む (土坑166) |
| 19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (粗砂混) φ1～7cmの礫を多量含む 土器片を少量含む | 41 10YR4/4褐色砂泥 φ1～15cmの礫を含む 炭を含む 土器片・瓦片を含む (土坑116) |
| 20 7.5YR4/2灰褐色砂泥 土器片を少量含む | 42 10YR3/1黒褐色砂泥 炭を含む 土器片を含む (江戸時代前期盛土か) |
| 21 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (江戸時代前期整地層) : 第2面 | 43 10YR3/4褐色砂泥に7.5YR5/6明褐色粘質土ブロックが混じる (江戸時代前期盛土) |
| 22 10YR3/3暗褐色砂泥 φ3～10cmの礫を多量含む 瓦片を少量含む (江戸時代前期盛土) : 第2面 | |

第3面 西半部の第2面で掘り下げた部分を工事予定深度まで掘り下げた。ちょうど江戸時代初期の整地層上面にあたる。遺構は検出していない。Y=-22,824付近で褐色粘質土が拡がる状況を認めたため、この層の性格・厚さを確認するために江戸時代初期の整地層の一部を掘り下げた。掘り下げは江戸時代初期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

(10) I 区の調査 (図版 13・14、図 30・31)

概要 I 区は二の丸東部、土堀内側に接して設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。南東角・東辺南寄りの2箇所が放水銃部分、ほかは配管部分となる、南北約 14.5 m・東西約 2.1 mの南北に細長い方形で設定したが、第1面調査中に遺構の拡がりを確認するため北側へ約 3.0 m 拡張した。

調査は4面に分けて実施し、第1面で江戸時代後期、第2面で江戸時代中期、第3面で江戸時代前期、第4面で江戸時代初期の遺構を検出した。

層序 北端部および西半部の大部分は既存管などにより攪乱されている。約 20 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約 10～15 cmの厚さの江戸時代後期の整地層である黒褐色砂泥である。この下層は約 15～20 cmの厚さの江戸時代中期の整地層である暗褐色粘質土ブロックが混じる黒褐色砂泥などである。この下層は約 20 cmの厚さの江戸時代前期の整地層であるにぶい黄褐色砂泥である。この下層は江戸時代初期の整地層である暗オリーブ褐色砂泥などで、40 cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、黒褐色砂泥下面を第2面、暗褐色粘質土ブロックが混じる黒褐色砂泥などの下面を第3面、にぶい黄褐色砂泥下面を第4面として遺構検出を行い、さらに放水銃部分については暗オリーブ褐色砂泥などを工事予定深度まで掘り下げた。

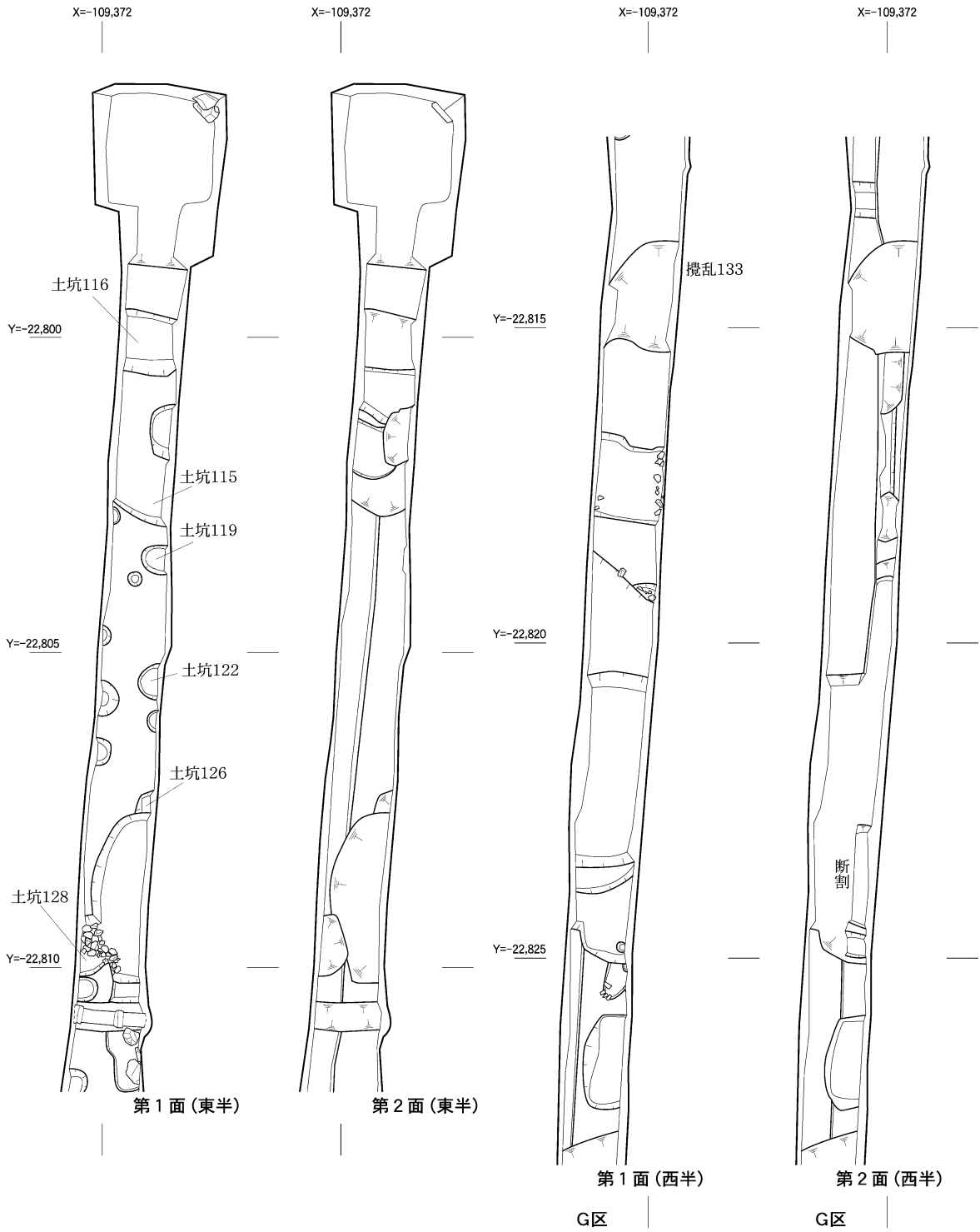
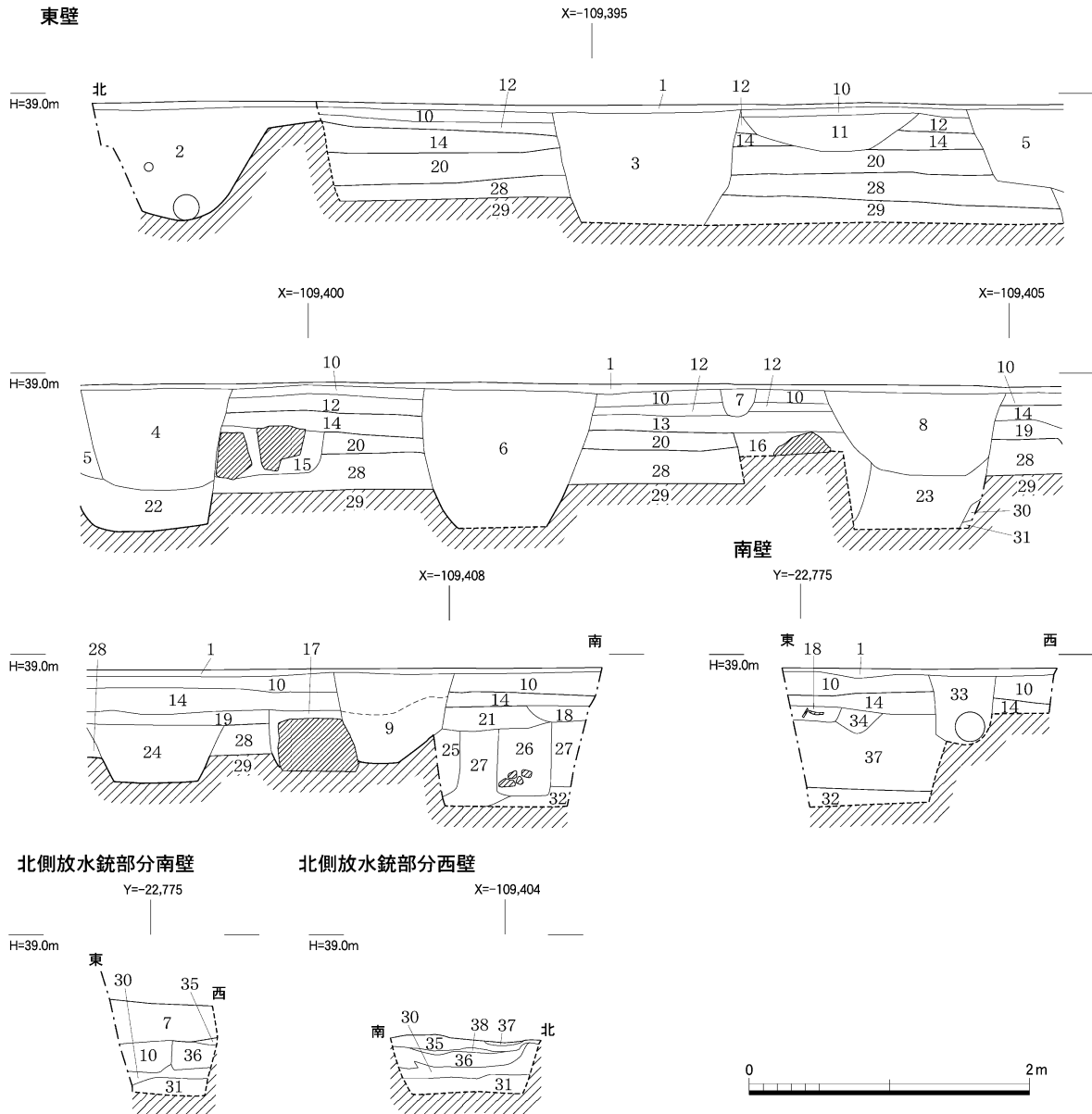


图 29 H区平面图 (1 : 100)



- | | |
|---|---|
| <p>1 表土 (攪乱)</p> <p>2 10YR3/2黒褐色砂泥 φ2~13cmの礫を多量含む 瓦片を多量含む (土坑32)</p> <p>3 10YR3/3暗褐色砂泥 φ2~13cmの礫を少量含む 瓦片を少量含む (土坑33)</p> <p>4 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1~8cmの礫を多量含む 瓦片を中量含む</p> <p>5 10YR3/4暗褐色砂泥に10YR3/3暗褐色粘質土ブロックが混じる φ1~15cmの礫を多量含む 瓦片を含む</p> <p>6 10YR3/2黒褐色砂泥に2.5Y4/6オリーブ褐色粘質土ブロックが混じる (粗砂泥) 炭を少量含む 瓦片を少量含む</p> <p>7 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1~7cmの礫を多量含む 瓦片を多量含む (土坑31)</p> <p>8 10YR4/4褐色砂泥 φ3~13cmの礫を多量含む 土器片・瓦片を含む (土坑8)</p> <p>9 10YR3/3暗褐色砂泥 瓦片を少量含む (近代盛土か)</p> <p>10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ2~7cmの礫を含む 瓦片を多量含む</p> <p>11 10YR3/4暗褐色砂泥 炭を少量含む 土器片を少量含む</p> <p>12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~5cmの礫を含む 土器片・瓦片を含む (土坑43)</p> <p>13 10YR4/4褐色砂泥 φ1~14cmの礫を含む (江戸時代後期整地層) : 第1面</p> <p>14 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 瓦片を少量含む (石41掘形)</p> <p>15 10YR4/4褐色砂泥 φ5~13cmの礫を含む (石173掘形)</p> <p>16 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭を少量含む 土器片を少量含む (石42掘形)</p> <p>17 10YR3/2黒褐色粘質土 炭を少量含む 瓦片を少量含む (土坑58)</p> <p>18 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ3~10cmの礫を含む (土坑55)</p> <p>19 10YR3/2黒褐色砂泥に10YR3/3暗褐色粘質土ブロックが混じる φ1~7cmの礫を含む 炭を含む 土器片を含む (江戸時代中期整地層) : 第2面</p> <p>20 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭を少量含む 瓦片を少量含む (江戸時代中期整地層) : 第2面</p> | <p>21 10YR3/4暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫を中量含む 炭を微量含む 土器片を微量含む</p> <p>22 10YR3/4暗褐色砂泥 φ2~6cmの礫を多量含む 土器片・瓦片を少量含む (土坑176)</p> <p>23 10YR4/4褐色砂泥 φ3~8cmの礫を含む 瓦片を少量含む (土坑172)</p> <p>24 10YR3/4暗褐色砂泥 (細砂泥) φ1~3cmの礫を少量含む 炭を少量含む 土器片を少量含む (溝171)</p> <p>25 10YR4/4褐色砂泥に10YR3/4暗褐色砂泥が混じる φ1~10cmの礫を多量含む 土器片・瓦片を少量含む (土坑170)</p> <p>26 7.5YR3/2黒褐色砂泥に10YR3/3暗褐色粘質土ブロックが混じる 炭を多量含む 土器片を含む (土坑か)</p> <p>27 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~3cmの礫を多く含む 炭を多量含む 土器片を含む (江戸時代前期整地層) : 第3面</p> <p>28 2.5YR3/3暗オリーブ褐色砂泥 φ3cm位の礫を少量含む 炭を多量含む 土器片を含む (江戸時代初期整地層) : 第4面</p> <p>29 10YR4/2灰黄褐色粘質土 φ0.5~3cmの礫を少量含む (江戸時代初期整地層)</p> <p>30 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (細砂泥) (江戸時代初期整地層)</p> <p>31 10YR3/4暗褐色粘質土 (江戸時代初期整地層) : 第4面</p> <p>32 (攪乱105)</p> <p>33 10YR3/4暗褐色粘質土</p> <p>34 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土に2.5Y4/6赤褐色砂泥が混じる 焼土層 (甕埋土か)</p> <p>35 10YR3/4暗褐色砂泥に2.5Y4/6赤褐色砂泥が混じる (甕埋土か)</p> <p>36 10YR4/2灰黄褐色砂泥 焼土・瓦片を含む</p> <p>37 5YR3/3暗赤褐色砂泥 薄い炭層が堆積 (甕埋土か)</p> |
|---|---|

図30 I区断面図 (1:50)

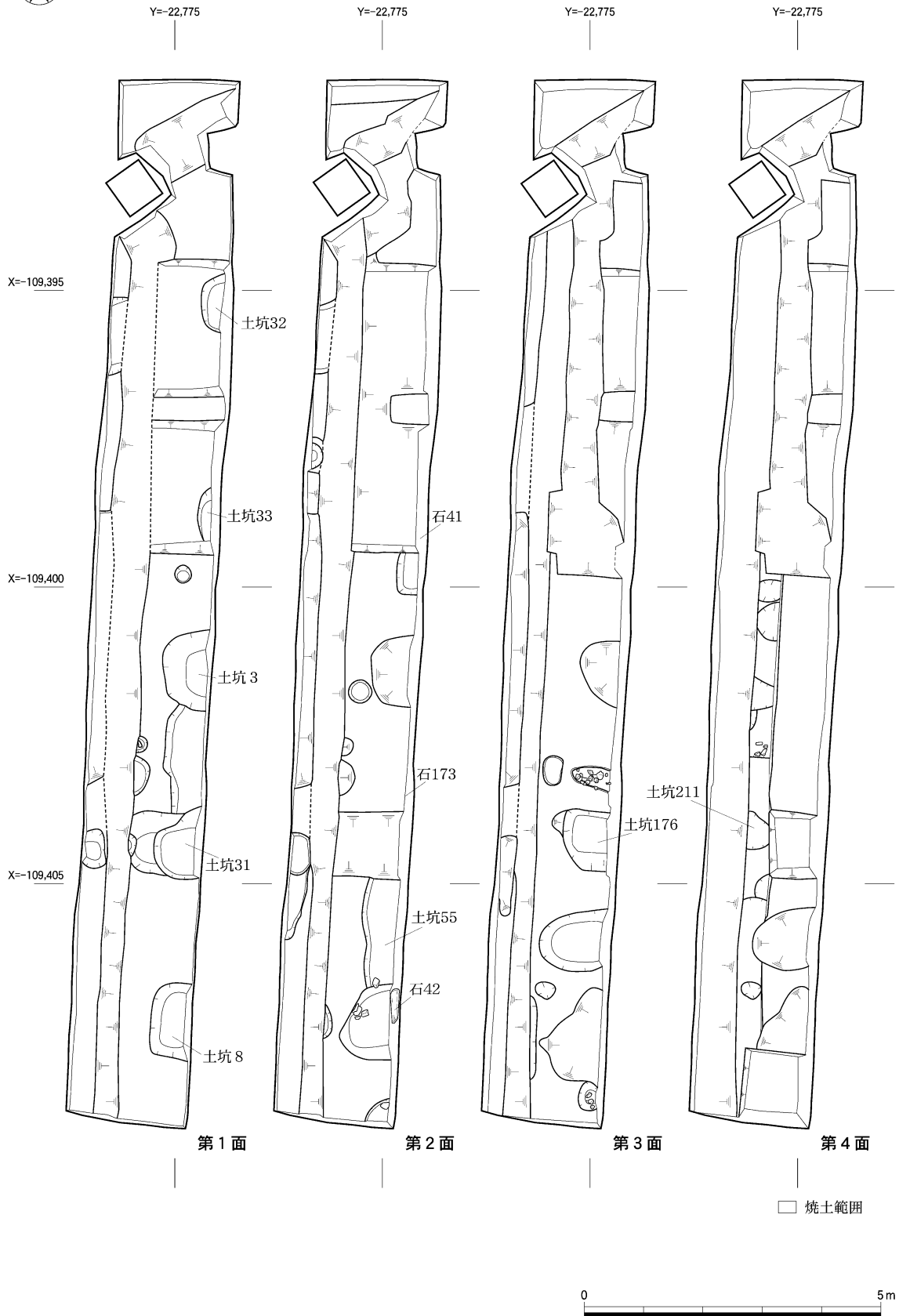


图 31 I区平面图 (1 : 100)

第1面 土坑 32・土坑 33・土坑 3・土坑 31・土坑 8は東壁沿いで検出した。南北方向に並び、検出長は約12.3 mである。いずれも東側が調査区外となるが、平面形は南北約0.8～1.3 m・東西0.6 m以上の隅丸方形で、深さは約0.6～1.0 mである。間隔は北側から約3.6 m・約2.5 m・約3.0 m・約3.2 mとやや不揃いである。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色砂泥などで、江戸時代後期の遺物が出土した。土塀際に並ぶことから、控え柱の柱穴列と考えている。

第2面 石 41・石 173・石 42は東壁面で確認した。南北方向に並び、検出長は約7.3 mである。掘形は南北約0.6～1.0 mであるが、壁面で確認したため東西方向は不明である。深さは約0.5～0.6 mである。間隔は北側から約3.7 m・約3.6 mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥・褐色砂泥で、出土遺物はないが、層序の状況から江戸時代中期の遺構であることがわかる。第1面の土坑列と同じく、控え柱の柱穴列と考えている。

土坑 55は南部東壁際で検出した。北側・南側は攪乱され、東側は調査区外となる大型の土坑で、深さは約0.1 mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代中期の遺物が出土した。

第3面 北半部配管部分は既存管の掘形を掘り下げた。土坑 176は南部東壁際で検出した。東側が調査区外となるが、平面形は南北約1.0 m、東西0.6 m以上の隅丸方形で、深さは0.5 m以上である。埋土は褐色砂泥で、江戸時代前期の遺物がわずかに出土した。

第4面 南半部配管部分は既存管東側沿いに約0.4 mの幅で掘り下げた。土坑 211は南部で検出した。検出範囲が限られているため詳細は不明であるが、南北約2.4 mの範囲に焼土層が広がる。南側は攪乱されているが、北端には数cmから10 cmの大きさの石が集まる。焼土層は約25 cmの厚さがあり、途中に炭層を挟む。こうした状況から大型の竈である可能性を考えている。出土遺物はない。

放水銃部分は工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代初期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

(11) K区の調査 (図版 15、図 32・33)

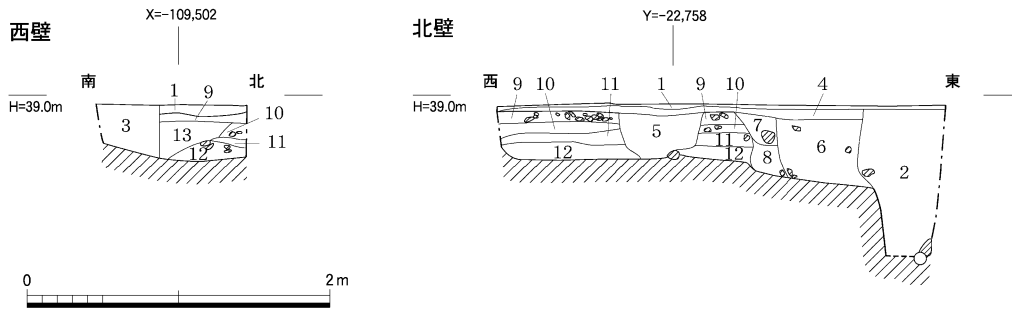
概要 K区は二の丸南東部、土塀外側に設定した配管設置予定箇所の調査区である。南北約1.0 m・東西約3.0 mの方形で設定した。

調査は2面に分けて実施し、第1面で江戸時代中期から後期、第2面で江戸時代前期の遺構を検出した。

層序 東端部は既存管により攪乱されている。約10 cmの厚さの路面砂利・盛土の下層は約10 cmの厚さの江戸時代中期から後期の整地層である礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥である。この下層は褐色砂泥・オリーブ褐色砂泥・暗褐色砂泥となる。これらは約20 cmの厚さがあり、江戸時代中期の整地層の可能性はある。暗褐色砂泥の下層は江戸時代前期の整地層である。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、暗褐色砂泥下面を第2面として遺構検出を行った。

第1面 第1面にあたる黄褐色砂泥は堅く締まっていることから、江戸時代中期から後期の整



- | | |
|--|---|
| 1 表土 | 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~3cmの礫を含む(土坑180) |
| 2 (攪乱) | 9 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~3cmの礫を多量含む 上面は堅く締まる(江戸時代中期~後期の路面か) : 第1面 |
| 3 (攪乱) | 10 10YR4/4褐色砂泥 φ1~3cmの礫を少量含む |
| 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 φ0.5~1cmの礫を多量含む(近代盛土) | 11 2.5Y4/4オリブ褐色砂泥に2.5Y5/2暗灰黄色粘質土ブロックが混じる |
| 5 10YR4/4褐色砂泥(土坑178) | 12 10YR3/4暗褐色砂泥 砂粒やや大きい φ2~10cmの礫を含む |
| 6 2.5Y4/4オリブ褐色砂泥に7.5YR5/2灰褐色泥土ブロックが混じる φ1~3cmの礫を多量含む 炭を含む 土器片・瓦片を含む(土坑180) | 13 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ0.5~2cmの礫を含む |
| 7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ3~10cmの礫を含む(土坑180) | |

図 32 K区断面図(1:50)

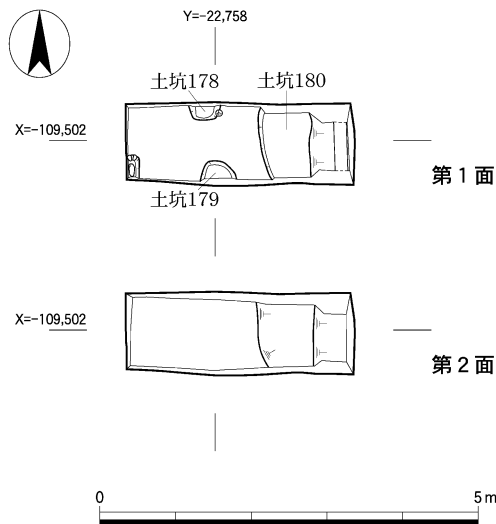


図 33 K区平面図(1:100)

地面もしくは路面である可能性が高い。

土坑 178・土坑 179 は中央部で検出した。南北方向に並ぶ。土坑 178 は北側、土坑 179 は南側が調査区外となるが、ともに平面形は直径約 0.4 ~ 0.5 m の円形に復元できる。深さは土坑 178 が約 0.3 m、土坑 179 が約 0.2 m である。間隔は約 0.9 m である。埋土は褐色砂泥で、出土遺物はない。

土坑 180 は東部で検出した。東側が攪乱され、北側・南側が調査区外となる大型の土坑で、深さは約 0.4 m である。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代中期の遺物が少量出土した。平安時代から江戸時代前期の遺物が混入する。

第 2 面 第 2 面にあたる江戸時代前期の整地層は堅く締まっており、上面に 1 ~ 10 cm の大きさの礫や瓦片を敷き詰めることから、二の丸造営に伴う整地面もしくは路面と考えている。

(12) M区の調査(図版 16、図 34・35)

概要 M区は二の丸南部、二の丸御殿遠待南側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。北端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる南北に細長い形で、放水銃部分は南北約 2.0 m・東西約 2.0 m、配管部分の長さは約 11.0 m、幅は約 1.0 m で設定した。

調査は 3 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代中期から後期、第 2 面で江戸時代前期から中期の遺構を検出し、第 3 面で江戸時代前期の整地層・盛土を確認した。

層序 南端は既存管により攪乱されている。約 20 cm の厚さの表土・盛土の下層は、約 10 cm の厚さの褐色砂泥である。江戸時代後期の整地層である可能性がある。この下層は約 10 cm の厚さの

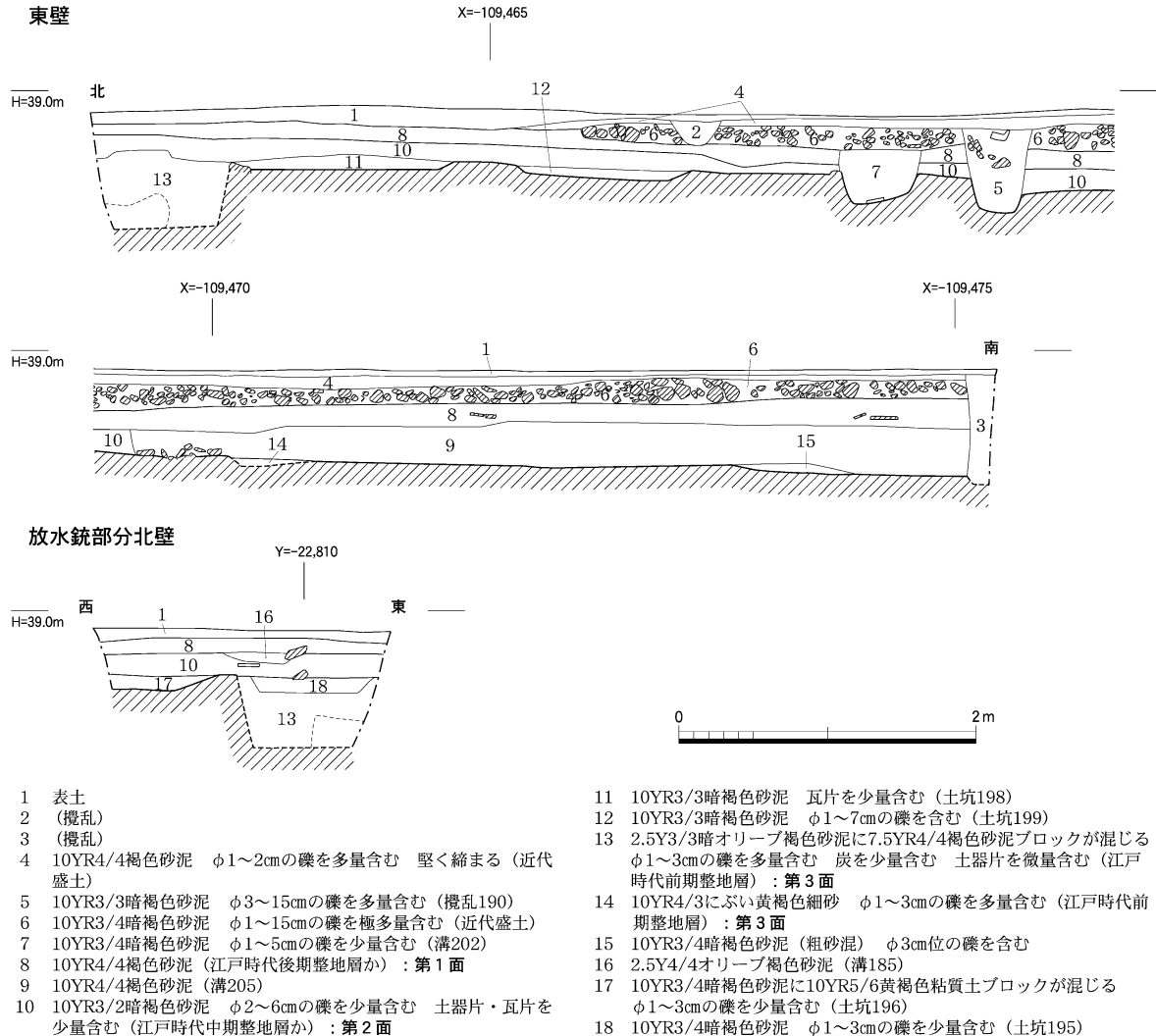


図 34 M区断面図 (1 : 50)

江戸時代中期の整地層である暗褐色砂泥である。この下層は江戸時代前期の整地層・盛土である褐色砂泥のブロックを含む暗オリーブ褐色砂泥で、50 cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第1面、褐色砂泥・暗褐色砂泥下面を第2面、暗オリーブ褐色砂泥を工事予定深度まで掘り下げた部分を第3面として遺構検出を行った。

第1面 柱穴 186・柱穴 187・柱穴 200・柱穴 188・柱穴 193・柱穴 194 は北部から南部にかけて検出した。南北方向に並び、検出長は約 9.7 m である。平面形は直径約 0.2 m の円形で、深さは約 0.1 m である。間隔は北側から約 1.5 m・約 1.0 m・約 1.5 m・約 3.0 m・約 2.7 m と不揃いであるが、柱穴 188 と柱穴 193・柱穴 193 と柱穴 194 の間にもう 1 基ずつあった柱穴が削平された可能性がある。埋土はにぶい黄褐色砂泥・褐色砂泥などで、柱穴 188 から時期不明の遺物がわずかに出土したのみである。

溝 185 は北部で検出した南北方向の溝である。北側が調査区外に延びる。断面形は浅い U 字形で、長さ 2.2 m 以上、幅約 0.5 m で、深さは約 0.1 m である。埋土は褐色砂泥で、江戸時代中期の遺物がわずかに出土した。

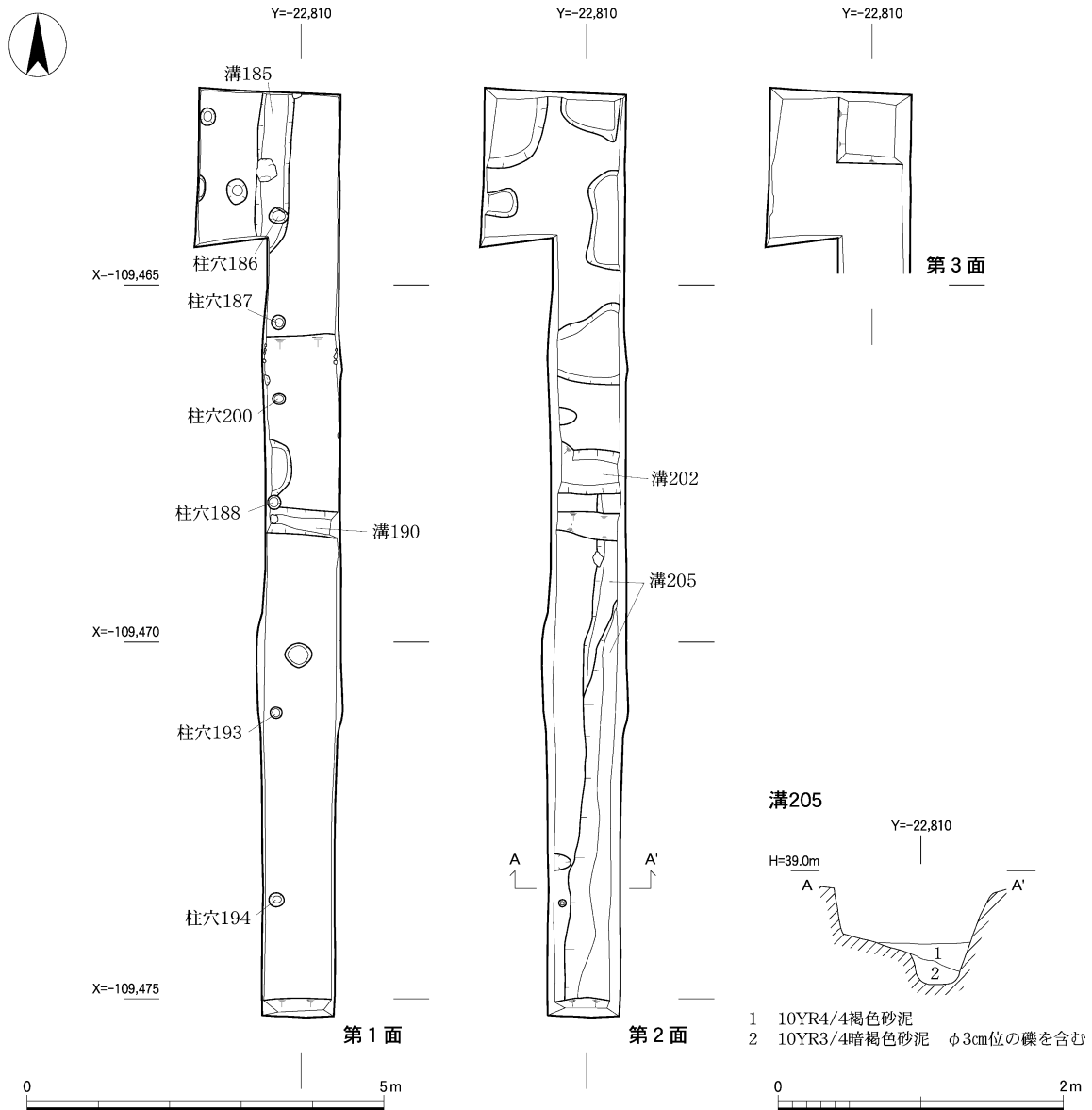


図35 M区平面図(1:100)、溝205断面図(1:50)

溝190は中央部で検出した東西方向の溝である。東側・西側が調査区外に延びる。断面形は深いU字形で、長さ0.9m以上、幅約0.4mで、深さは約0.5mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、室町時代以前の遺物がわずかに混入して出土した。

第2面 溝202は中央部で検出した東西方向の溝である。東側・西側が調査区外に延びる。断面形はU字形で、長さ0.9m以上、幅約0.6mで、深さは約0.4mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、江戸時代中期の遺物がわずかに出土した。

溝205は中央部から南部で検出した南北方向の溝である。溝202と接するが、溝205の方が古い。南側は攪乱され、東側は調査区外となる。断面形はU字形で、長さ6.4m以上、幅0.6m以上で、深さは0.2m以上である。埋土は褐色砂泥などで、江戸時代前期から中期の遺物が少量出土した。

第3面 放水銃部分北東側を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の整地層中にとどまり、遺構は検出していない。

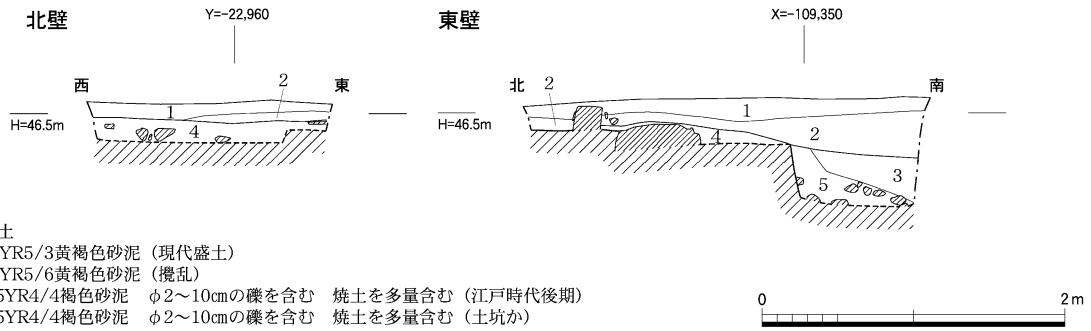


図 36 N区断面図 (1 : 50)

(13) N区の調査 (図版 17、図 36・37)

概要 N区は本丸東部石垣土塁上に設定した監視カメラ設置予定箇所の調査区である。南北約 1.9 m、東西約 1.7 m の方形で設定したが、集石の拡がりを追求するため北東部を北側へ約 0.7 m 拡張した。

調査は 1 面のみで、江戸時代前期から中期の遺構を検出した。ただし、遺構が重複していたことから、第 1-1 面・第 1-2 面に分けている。

層序 約 10 ~ 30 cm の厚さの表土・盛土の下層は、約 10 ~ 30 cm の厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む褐色砂泥である。この下層は集石となる。

調査では人力掘削で盛土までを除去し、盛土下面を第 1-1 面、褐色砂泥下面を第 1-2 面として遺構検出を行った。

第 1-1 面 石 69 は大きさは約 60 cm で、石材の種類はチャートである。平坦な面を上にして据えており、表面は熱を受けて赤く変色・剥離している部分が多い。礎石と考えている。

集石は北半部で検出した。数 cm から 20 cm の大きさの石が密に詰まっており、石 69 の下部にも拡がる。石材の種類はチャート・砂岩が多い。多間櫓の基礎と考えている。

なお、北側拡張部の細長い石材はコンクリートが付着しており、近代に属するものである。

第 1-2 面 集石がない南東側を掘り下げた。褐色砂泥は南に向けて厚くなる堆積状況にあり、下面や北側壁面には第 1-1 面の集石が拡がる。このことから第 1-1 面・第 1-2 面の集石は一連の遺構で、褐色砂泥は攪乱もしくは窪みに溜まったものと考えている。また、集石は 40 cm 以上の厚さで積み上げていることが判明した。褐色砂泥からは焼土・焼壁・焼瓦・鉄釘などが出土した。

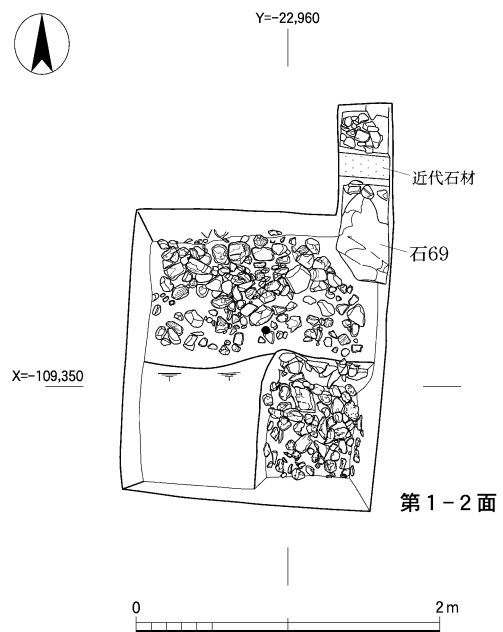


図 37 N区平面図 (1 : 50)

(14) O区の調査 (図版 18・19、図 38～40)

概要 O区は本丸東部、現本丸御殿の常御殿・御書院東側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区で、北側はP区につながる。南端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる南北に細長い形で、放水銃部分は南北約2.0m・東西約2.0m、配管部分の長さは約24.5m、幅は約1.0mで設定したが、第1面調査中に後述する礎石列を検出したため、礎石列の性格を判断する目的で、南端配管部分

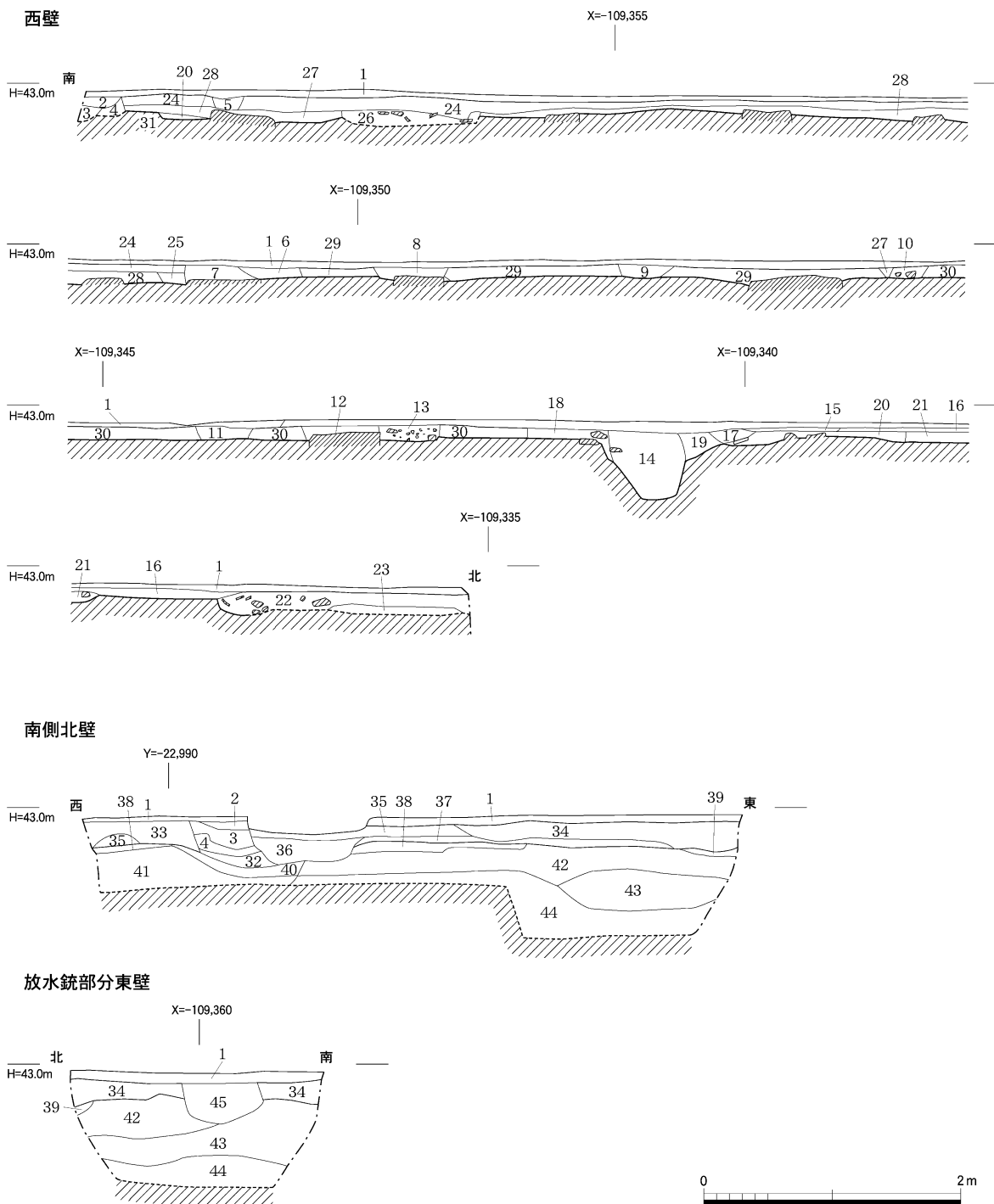


図 38 O区断面図 (1 : 50)

- | | | | |
|----|---|----|--|
| 1 | 表土 | 24 | 7.5YR5/3にぶい黄褐色砂泥 焼土を少量含む |
| 2 | 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥 焼壁・焼瓦を少量含む(土坑3) | 25 | 10YR4/3褐色砂泥(粗砂混) 焼土を少量含む |
| 3 | 10YR7/6明黄褐色粘質土 焼壁・瓦片を中量含む(土坑3) | 26 | 7.5YR5/6明褐色砂泥 焼瓦を多量含む 締まりが悪い(土坑6) |
| 4 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ0.5cm位の礫を含む(土坑3) | 27 | 2.5YR3/2暗赤褐色砂泥(粗砂混) 焼土を含む |
| 5 | 10YR6/2灰黄褐色粗砂(土坑4) | 28 | 10YR2/2黒褐色砂泥 焼土を多量含む |
| 6 | 7.5YR5/1褐色砂泥 φ3~4cmの礫を多量含む(土坑8) | 29 | 7.5YR3/4暗褐色砂泥 焼土・焼瓦を中量含む |
| 7 | 7.5YR2/2黒褐色砂泥 φ2~3cmの礫を少量含む 焼土を微量含む(土坑8) | 30 | 5YR3/3暗赤褐色砂泥 焼土・焼瓦を多量含む |
| 8 | 7.5YR2/3極暗褐色砂泥 φ2~3cmの礫を少量含む 焼瓦を少量含む | 31 | 2.5YR5/3黄褐色粗砂 |
| 9 | 10YR6/2灰黄褐色砂泥 | 32 | 10YR7/6明黄褐色粘質土 φ0.5~0.7cmの礫を中量含む 焼壁・瓦片を中量含む(土坑3) |
| 10 | 10YR6/2灰黄褐色粗砂 | 33 | 7.5YR4/4褐色砂泥 焼瓦・瓦片を少量含む(攪乱か) |
| 11 | 7.5YR6/3にぶい褐色砂泥(粗砂混) φ0.5~1cmの礫を少量含む | 34 | 10YR3/4暗褐色砂泥 焼瓦を含む 締まりが悪い(攪乱か) |
| 12 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 焼土を少量含む | 35 | 10YR2/2黒褐色砂泥 焼壁・焼瓦を含む |
| 13 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥(土坑28) | 36 | 10YR3/1黒褐色砂泥 焼土を含む |
| 14 | (攪乱) | 37 | 5Y5/8明赤褐色砂泥 全体に焼けている 脆い |
| 15 | 2.5Y6/3にぶい黄褐色粘質土 | 38 | 2.5Y7/4浅黄色砂泥(細砂混) φ0.1~0.5cmの礫を含む 砂質(江戸時代前期整地層か) : 第2面 |
| 16 | 10YR4/4褐色砂泥 φ1~2cmの礫を中量含む 焼土を少量含む | 39 | 2.5Y7/4浅黄色砂泥(細砂混) φ0.1~0.5cmの礫を含む 砂質(江戸時代前期整地層か) : 第2面 |
| 17 | 5YR3/3暗赤褐色砂泥 焼土・焼瓦を多量含む | 40 | 10YR2/3黒褐色砂泥 焼土・焼壁を含む 砂質 |
| 18 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 | 41 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ10~15cmの礫を多量含む |
| 19 | 7.5Y5/3にぶい褐色砂泥 φ5~10cmの礫を中量含む 焼瓦・瓦片を中量含む | 42 | 7.5Y6/4にぶい褐色砂泥 φ1~2cmの礫を中量・φ0.5~0.8cmの礫を多量含む(江戸時代前期盛土) : 第2面 |
| 20 | 7.5Y5/3にぶい褐色砂泥 φ1~3cmの礫を含む 焼土を含む | 43 | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ3~8cmの礫を含む(江戸時代前期盛土) |
| 21 | 7.5Y5/2灰褐色砂泥 φ1~2cmの礫を中量含む | 44 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 43層より脆い土質(江戸時代前期盛土) |
| 22 | 7.5Y5/3にぶい褐色砂泥 φ5~10cmの礫を中量含む 焼瓦・瓦片を中量含む | 45 | (攪乱) |
| 23 | 10YR3/4暗褐色砂泥 φ10~15cmの礫を多量含む 焼土・焼瓦を少量・瓦片を多量含む | | |

を西側へ約1.3m延長した。配管経路は現存する石組溝を利用して西側に迂回させることとなった。

調査は3面に分けて実施し、第1面で江戸時代前期から後期、第2面で江戸時代前期の遺構を検出し、第3面で江戸時代前期の盛土を確認した。

層序 約10cmの厚さの表土・盛土の下層は、約10cmの厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む暗赤褐色砂泥である。この下層は約5cmの厚さの江戸時代前期の整地層である浅黄色砂泥で、上面の一部は赤く焼けている。この下層は江戸時代前期の盛土であるにぶい褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥で、70cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で盛土までを除去し、盛土・暗赤褐色砂泥下面を第1面、浅黄色砂泥下面を第2面、にぶい褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥を工事予定深度まで掘り下げた部分を第3面として遺構検出を行った。

第1面 石79・石78・石77・石75・石72・石70は北部から南部にかけて、焼土を含む暗赤褐色砂泥に覆われる状態で検出した礎石列である。南北方向に並び、検出長は約18.4mで、P区の石82を含めると約22.7mである。北側で東に3~4度振る方位を取る。大きさは約60~80cmで、石材の種類は花崗岩・チャートである。間隔は北側から約3.8m・約3.7m・約4.2m・約2.8m・約3.9m、石82と石79の間隔は約4.3mと不揃いである。また、石77と石75の間には石76、石75と石72の間には石74・石73、石72と石70の間には石71がある。やや小振り、少し西に偏した位置にあたる。いずれも平坦な面を上にしており、掘形を確認できないことから整地と同時に据え付けている可能性がある。石77・石76・石74・石73・石72の表面は熱を受けて赤く変色・剥離している。石77・石74の変色が著しい範囲は直径約15~20cmで、柱あたりに相当すると推定する。石79には矢穴痕が残る。

土坑14は北部で検出した。東側・西側は調査区外となる南北約2.4m・東西1.0m以上の大型の土坑で、深さは約0.2mである。埋土は焼土を含むにぶい褐色砂泥などで、焼瓦を含む江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

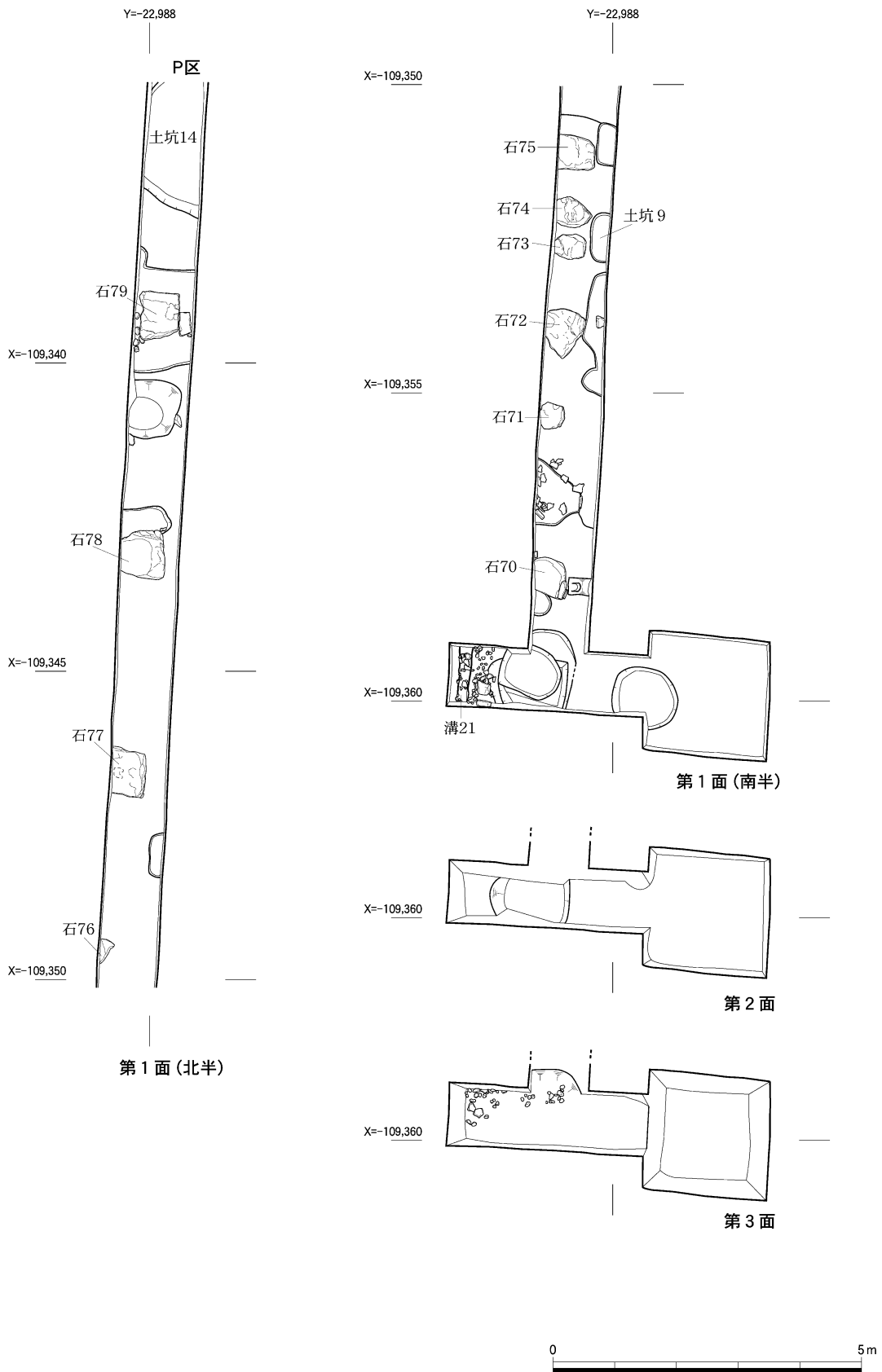


图 39 O区平面图 (1 : 100)

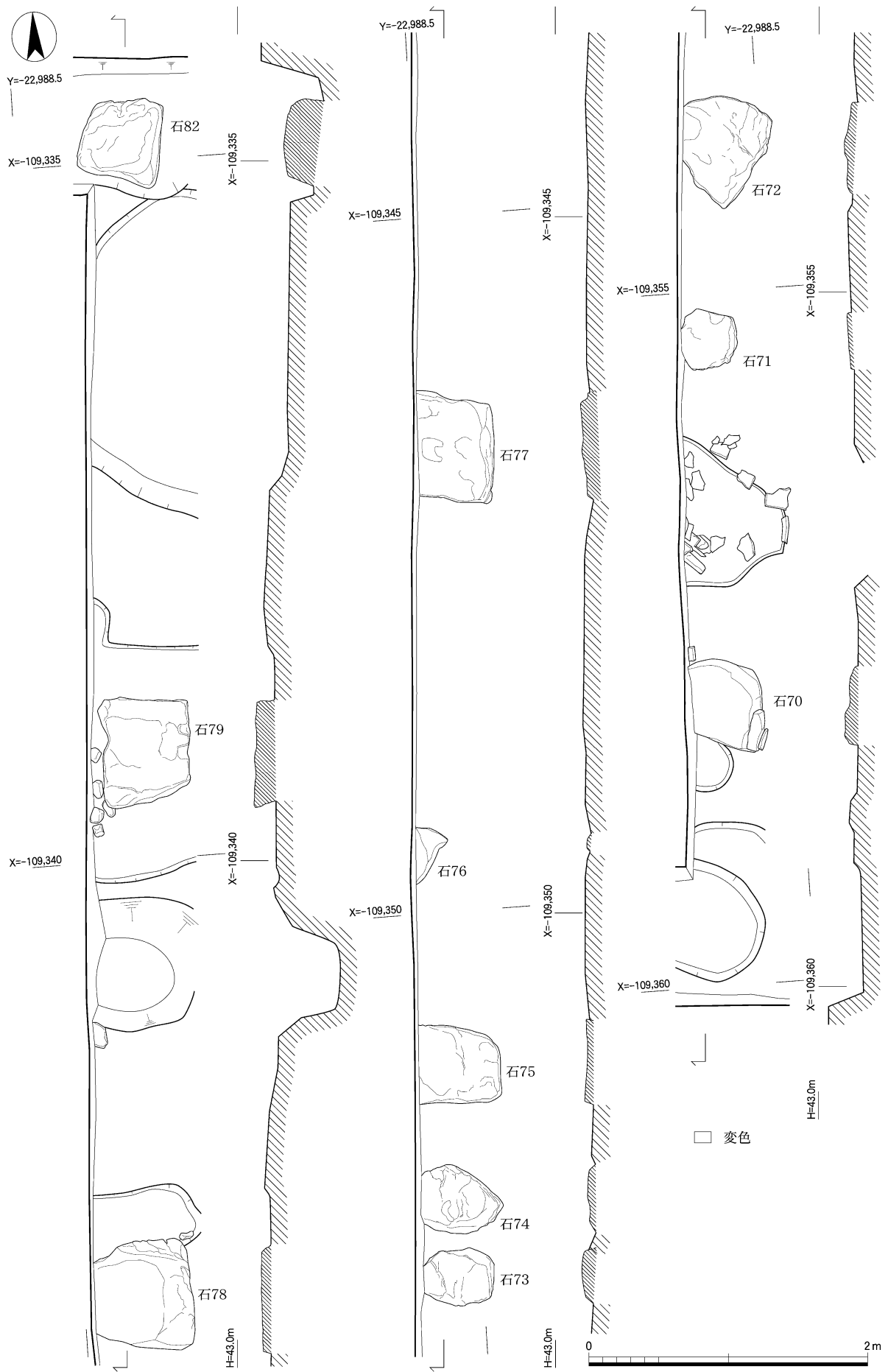


图 40 O区礎石列实测图 (1:40)

土坑 9 は中央部で検出した。東側が調査区外となるが、平面形は南北約 1.0 m、東西 0.4 m 以上の隅丸方形に復元できる。深さは約 0.1 m である。埋土は黒褐色砂泥で、焼瓦を含む江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

溝 21 は南部で検出した南北方向の溝である。北側は壁際で攪乱され、南側は調査区外に延びる。断面形は浅い U 字形で、長さ 0.9 m 以上、幅約 0.2 m で、深さは約 0.1 m である。埋土は黒褐色砂泥で、焼瓦を含む江戸時代前期から中期の遺物がわずかに出土した。

第 2 面 南北方向の配管部分を残し、放水銃部分および南端の東西方向の配管部分を掘り下げた。遺構は検出していない。

第 3 面 第 2 面で掘り下げた部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。盛土には数 cm から 20 cm の大きさの石が含まれている。

(15) P 区の調査 (図版 20 ~ 22、図 41 ~ 47)

概要 P 区は本丸東部、現本丸御殿の御書院東側に設定した調査区で、東側の一斉開放建設予定地を東部、西側の放水銃設置予定箇所を西部とする。西部中央で南側は O 区につながる。

東部は南北約 6.5 m ・ 東西約 4.8 m の方形で設定した。西側で P 区西部につながる。

調査は 3 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代中期から後期の遺構を検出し、第 2 面で江戸時代前期の整地層、第 3 面で江戸時代前期の盛土を確認した。

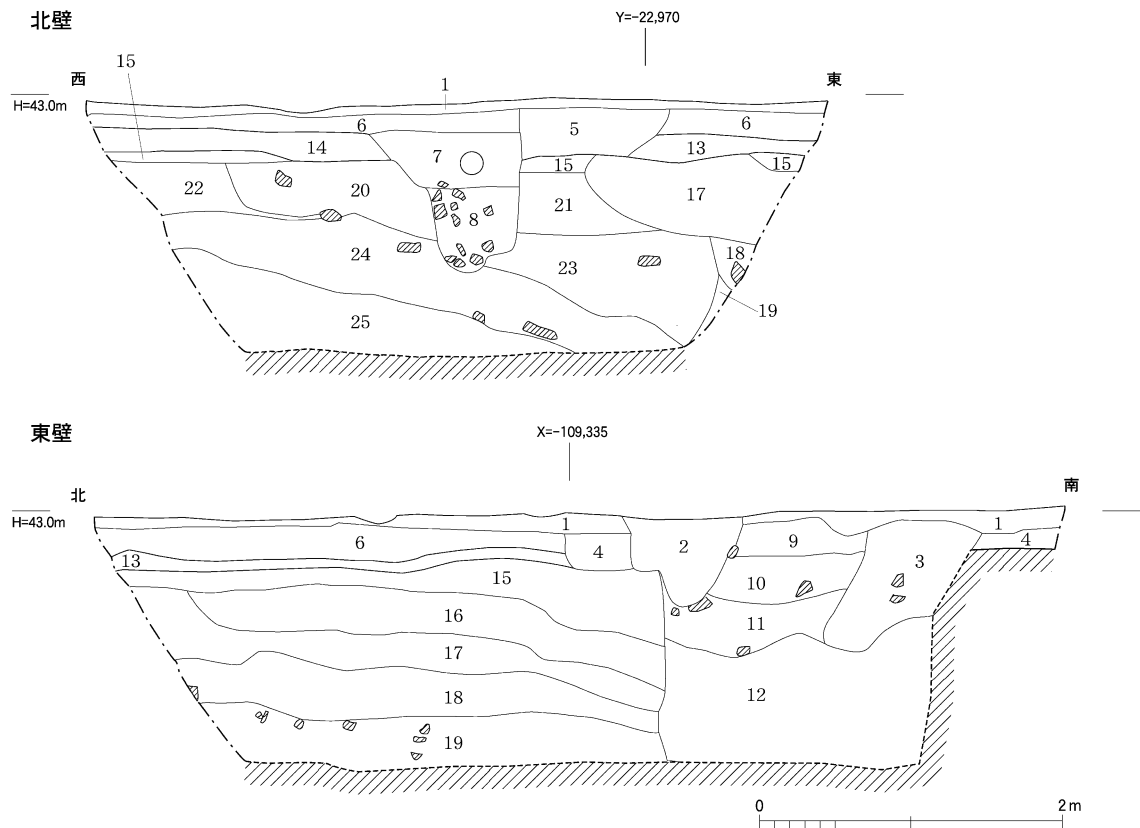
西部は西端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる東西に細長い形で、現存する石組溝によりさらに東半部と西半部に分割される。東半部は東西約 15.5 m、東部につながる部分で南北約 2.0 m、西端で南北約 1.0 m の細長い「凸」字形で設定したが、第 1 面調査中に後述する集石 109 を検出したため、屈曲部を南西側へ拡張した。西半部は放水銃部分は南北約 1.8 m ・ 東西約 1.7 m、配管部分の長さは約 6.3 m、幅は約 1.0 m で設定したが、第 1 面調査中に後述する礎石列を検出したため、配管部分を北側へ約 1.0 m 拡張した。

調査は 3 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代前期から後期、第 2 面で江戸時代前期の遺構を検出し、第 3 面で江戸時代前期の盛土を確認した。

層序 東部は約 5 ~ 10 cm の厚さの表土・盛土の下層は、約 10 ~ 20 cm の厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む暗褐色砂泥である。この下層は約 10 ~ 20 cm の厚さの江戸時代前期の整地層である灰褐色砂泥・黒褐色砂泥で、やや堅く締まっている。この下層は江戸時代前期の盛土である黄褐色粘質土のブロックを含む灰黄褐色砂泥・礫を多く含む黒褐色砂泥・にぶい黄褐色砂礫などで、140 cm 以上の厚さがある。盛土は東側すなわち本丸外側の堀の方向に傾斜する状態で積み上げられている。

調査では機械掘削で暗褐色砂泥上部までを除去し、盛土・暗褐色砂泥下面を第 1 面、灰褐色砂泥・黒褐色砂泥下面を第 2 面、黄褐色粘質土のブロックを含む灰黄褐色砂泥などを工事予定深度まで掘り下げた部分を第 3 面として遺構検出を行った。

西部は東半部・西半部とも約 5 ~ 10 cm の厚さの表土・盛土の下層は、約 10 ~ 30 cm の厚さの



- | | |
|---|--|
| <p>1 表土</p> <p>2 10YR4/3褐色砂泥 (根の攪乱)</p> <p>3 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ10~15cmの礫・φ2~3cmの礫を中量含む (根の攪乱か)</p> <p>4 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥 φ3~4cmの礫を下層に含む</p> <p>5 10YR4/3褐色砂泥 焼土を中量含む (攪乱)</p> <p>6 10YR3/3暗褐色砂泥 焼土を少量含む (近代盛土)</p> <p>7 10YR3/3暗褐色砂泥 焼瓦を含む (攪乱)</p> <p>8 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ10~15cmの礫を多量含む</p> <p>9 7.5YR4/4褐色砂泥 φ2~3cmの礫を中量含む</p> <p>10 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 φ5~8cmの礫を中量含む</p> <p>11 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~2cmの礫を多量・φ10~15cmの礫を少量含む</p> <p>12 10YR3/4暗褐色砂泥 焼瓦・瓦片を多量含む (土坑29)</p> <p>13 2.5Y3/2黒褐色砂泥 φ1~3cmの礫を中量含む (江戸時代前期整地層) : 第1面</p> <p>14 7.5YR5/2灰褐色砂泥 φ3~4cmの礫を中量含む (江戸時代前期整地層) : 第1面</p> <p>15 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥に黄褐色ブロックがまばらに混じる (江戸時代前期盛土) : 第2面</p> | <p>16 7.5YR5/2灰黄褐色砂泥にφ1~3cmの黄褐色粘質土ブロックが少量混じる φ0.3~0.5cmの礫を多量含む 堅固な土質</p> <p>17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥にφ10~15cmの黄褐色ブロックがまばらに混じる 黒褐色の部分がある (江戸時代前期盛土)</p> <p>18 10YR2/2黒褐色砂泥 締まりが悪い (江戸時代前期盛土)</p> <p>19 7.5YR4/2灰褐色砂泥 φ1~2cmの礫を多量・φ10~15cmの礫を少量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>20 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ3~8cmの礫を多量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>21 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ3~8cmの礫を多量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>22 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ2~3cmの礫を少量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>23 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥 φ0.5~1cmの礫を多量・φ5~10cmの礫を中量含む 締まりが悪い (江戸時代前期盛土)</p> <p>24 7.5YR4/3褐色砂泥 φ5~10cmの礫を中量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>25 7.5YR4/3褐色砂泥ににぶい橙色粘土ブロックが混じる φ5~10cmの礫を少量含む (江戸時代前期盛土)</p> |
|---|--|

図 41 P区東部断面図

江戸時代後期の包含層である焼土を含む褐色砂泥などである。この下層は約10cmの厚さの江戸時代前期の整地層である黄褐色砂泥で、上面の一部は赤く焼けている。この下層は江戸時代前期の盛土である礫を含むオリーブ褐色砂泥などで、40cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で褐色砂泥などの上部までを除去し、盛土・褐色砂泥などの下面を第1面、黄褐色砂泥下面を第2面、礫を含むオリーブ褐色砂泥などを工事予定深度まで掘り下げた部分を第3面として遺構検出を行った。

東部第1面 溝20は中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側が調査区外へ延びる。検出長は約6.3mで、北半は素掘り、南半は両側に石を並べる石組溝となる。石材の大きさは約20~40cmで、種類はすべて花崗岩である。ただし、溝中央には近代の土管が埋設されており、

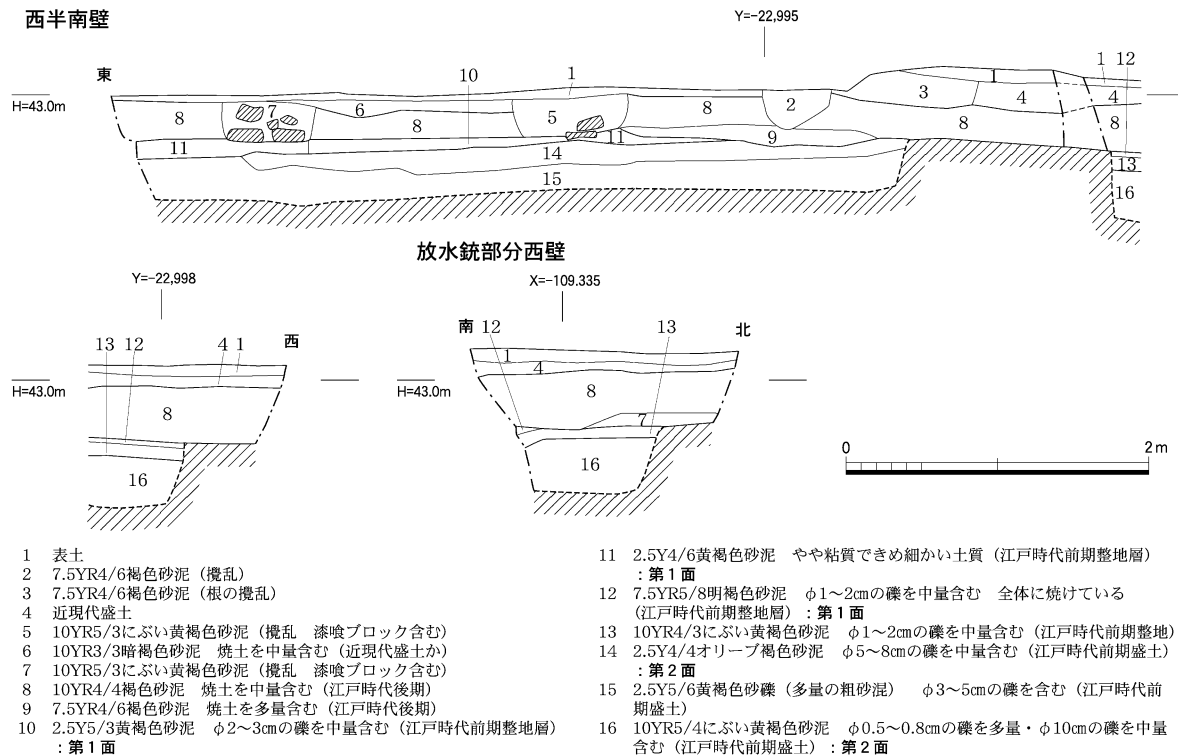
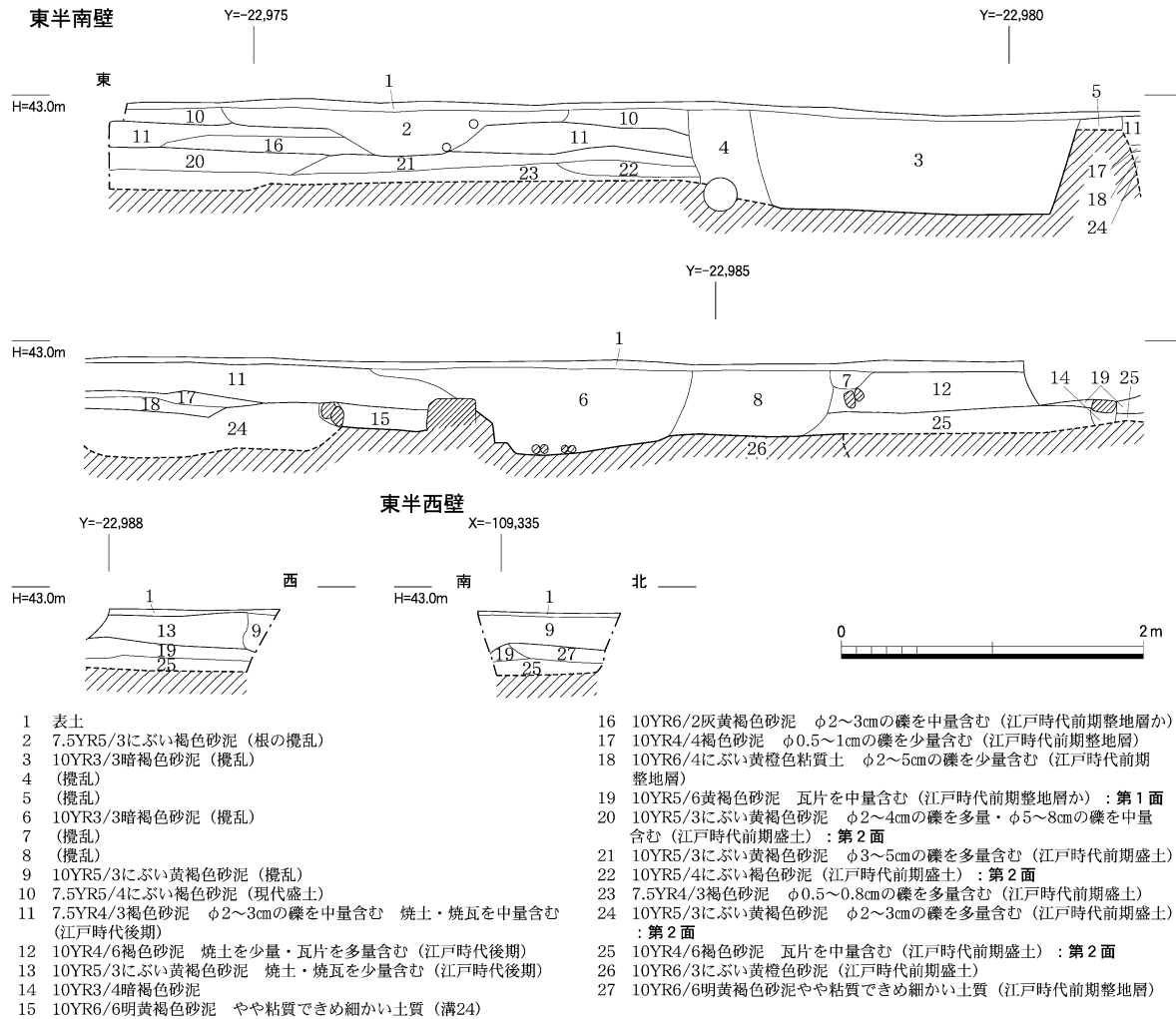


図 42 P区西部断面図 (1:50)

江戸時代の溝を修復して利用したと考えられ、石組北端の石材は後補である。調査区外北延長には井戸、南延長には現在も石組溝が残るので井戸からの排水溝であることがわかる。埋土は黒褐色砂泥で、焼瓦を含む江戸時代の遺物が出土した。

集石 110 は南東部で検出した。石材の大きさは約 20 ～ 40 cm で、種類は花崗岩が多い。原位置から移動されたもので、溝 20 の北半部の石材を取り外して集積した遺構の可能性がある。

東部第 2 面 溝 20 の石組を残して、北側を掘り下げた。土坑 29 は南東部東壁際で、集石 110 の石材を取り外した下面で検出した。東側は調査区外となる南北約 2.2 m ・ 東西 1.2 m 以上の大型の土坑で、深さは約 1.4 m である。埋土には多量の焼瓦を含んでおり江戸時代後期の遺構である。

東部第 3 面 第 2 面で掘り下げた部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。

西部第 1 面 集石 109 は東半部東部で検出した。北側は調査区外となる。石材の大きさは約 30 ～ 50 cm で、種類はチャートなどである。掘形を確認できないことから、原位置から移動されたものである可能性がある。

石 80 ・ 石 81 は東半部中央部で検出した。石材の大きさは石 80 が約 50 cm、石 81 が約 30 cm で、種類は花崗岩である。検出位置が高く、掘形を確認できないことから、原位置から移動され

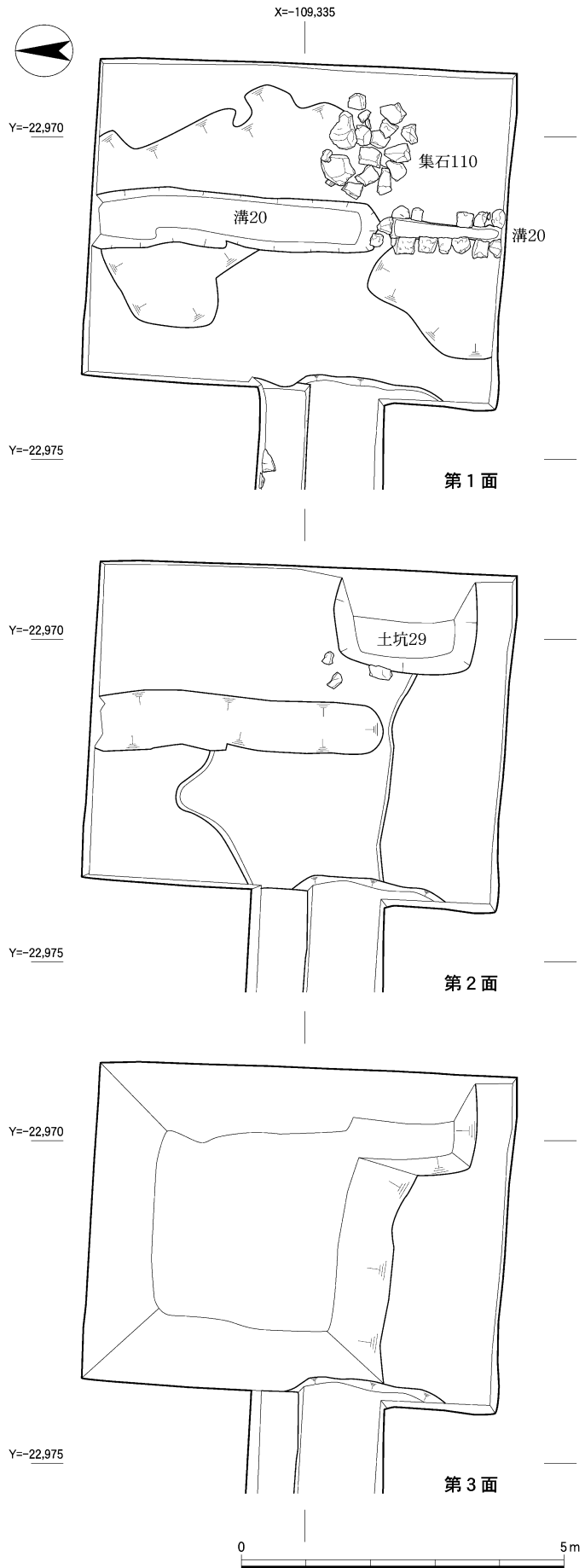


図 43 P 区東部平面図 (1 : 100)

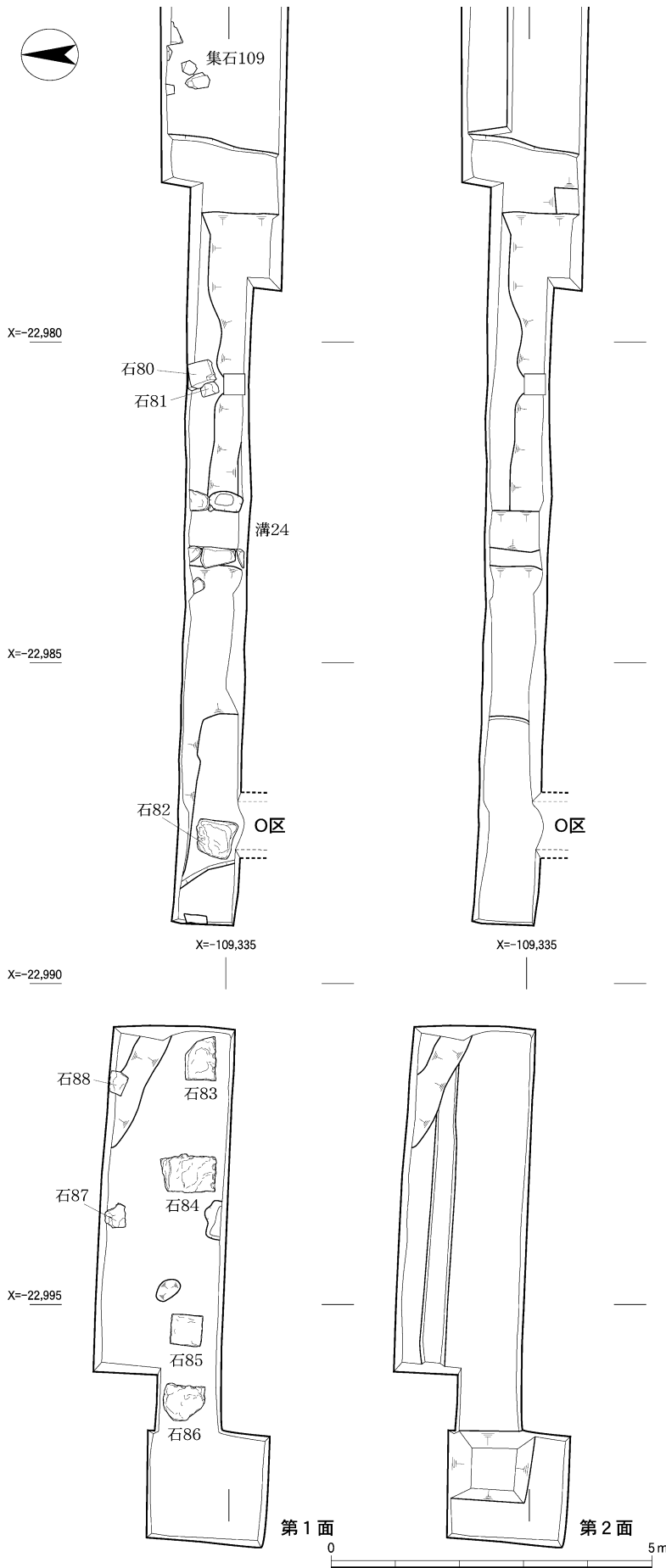


図 44 P 区西部平面図 (1 : 100)

たものである可能性がある。

溝 24 は東半部中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側が調査区外へ延びる。断面形は逆台形で、長さ 0.9 m 以上、幅約 1.2 m で、深さは約 0.2 m である。底面は素掘りで南北両側に細長い石材を並べる。西側中央の石材の大きさは長軸方向約 70 cm ・短軸方向約 30 cm で、種類はチャートである。埋土はにぶい褐色砂泥で、焼土・焼瓦を含む江戸時代の遺物が出土した。

石 82 ・石 83 ・石 84 ・石 85 ・石 86 は東半部西部から西半部にかけて、焼土を含む褐色砂泥に覆われる状態で検出した礎石列である。東西方向に並び、検出長は約 8.8 m である。西側で北に 3 ～ 4 度振る方位を取る。石材の大きさは約 50 ～ 100 cm で、種類は花崗岩・チャートである。間隔は東側から約 3.5 m ・約 1.8 m ・約 2.4 m ・約 1.1 m と不揃いであるが、調査区外の石 82 と石 83 の間にもう 1 基石があったことも考えられる。

いずれも平坦な面を上にして据え付けている。表面には熱による変色・剥離の痕跡は観察できない。石 83 ・石

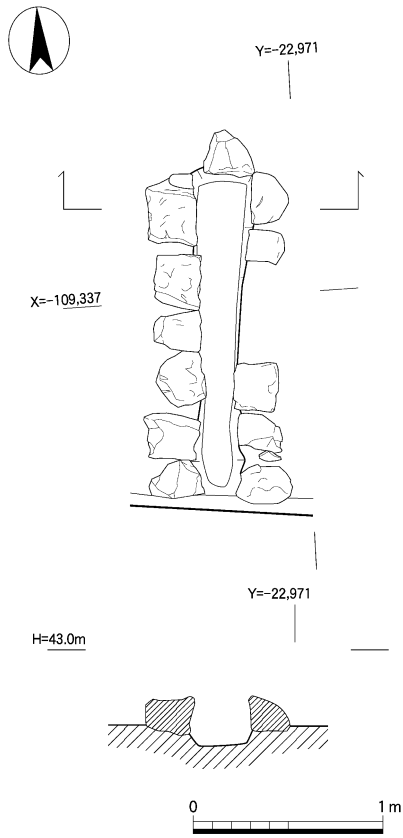


图 45 P区沟 20 实测图 (1 : 40)

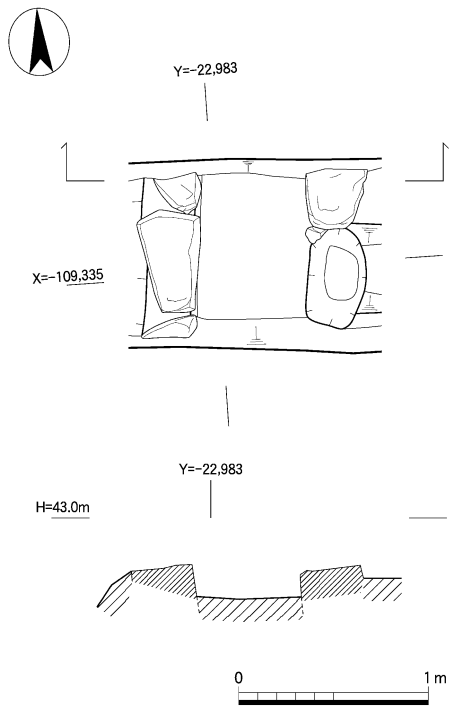
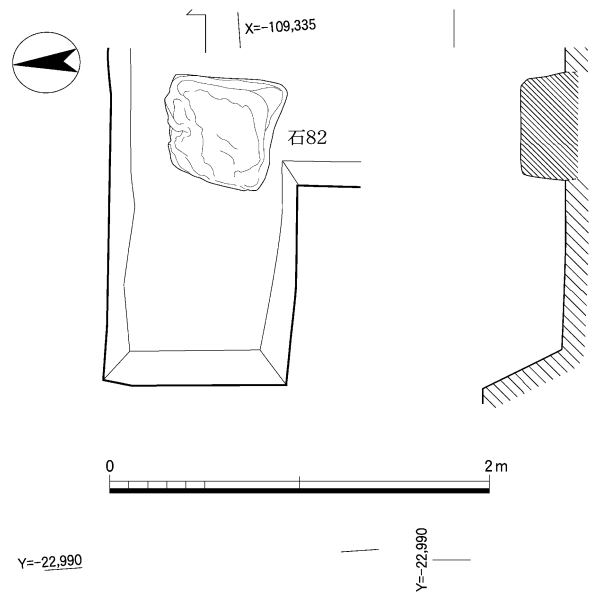
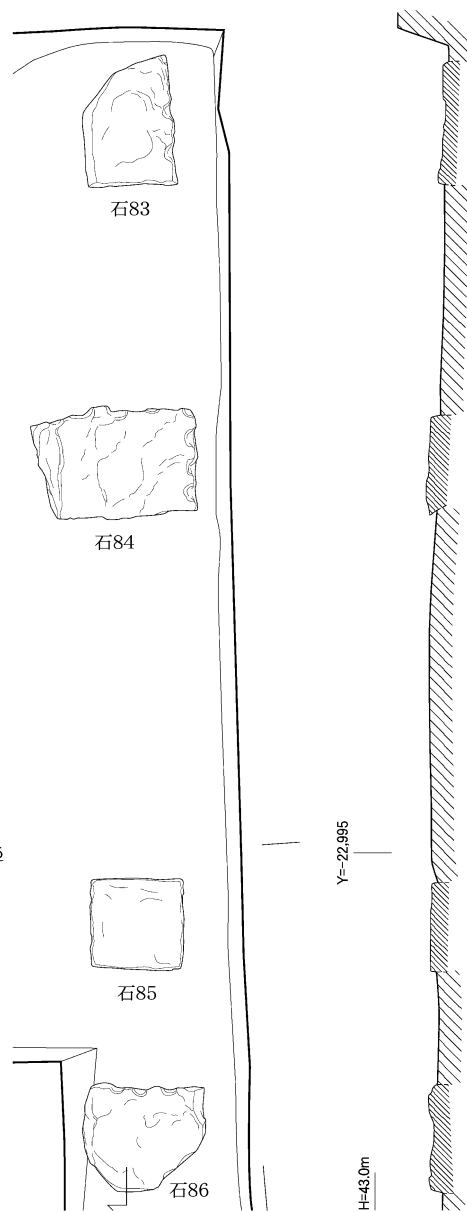


图 46 P区沟 24 实测图 (1 : 40)



Y=-22,990

Y=-22,990



Y=-22,995

Y=-22,995

H=43.0m

图 47 P区西部礎石列实测图 (1 : 40)

84・石 86 には矢穴痕が残る。

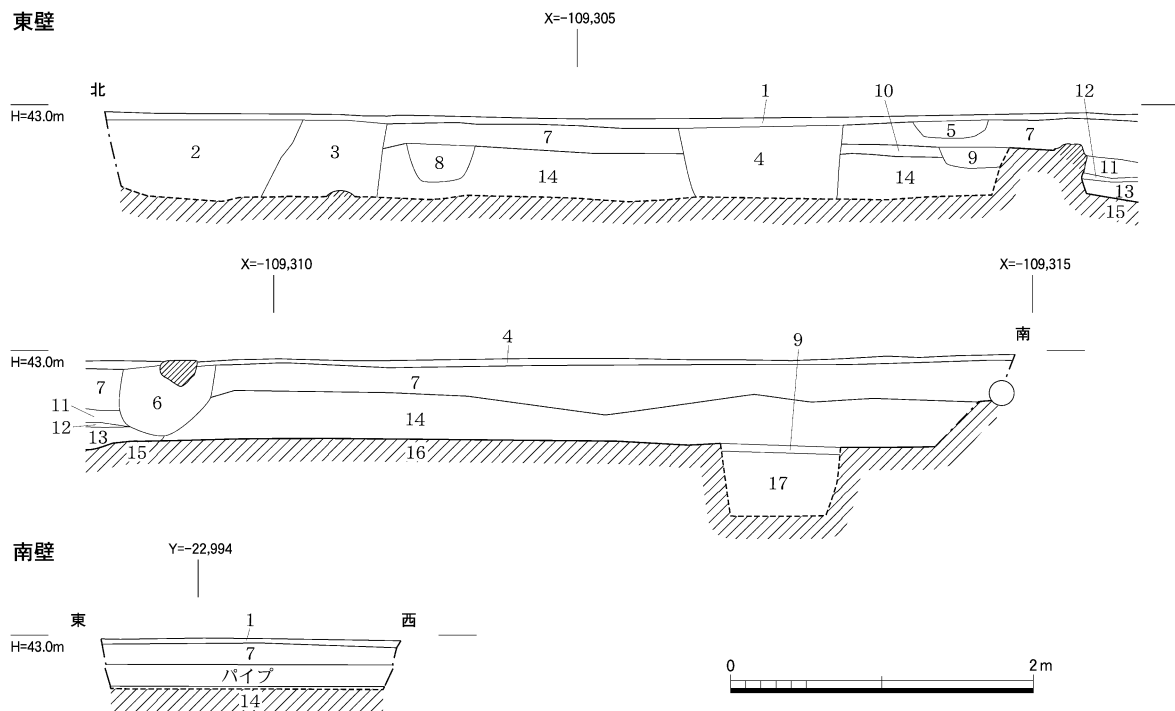
石 88・石 87 は西半部の拡張した北壁際で検出した。東西方向に並ぶ。大きさは約 40～50 cm で、石材の種類はともに花崗岩である。間隔は約 2.2 m である。平坦な面を上にして据え付けている。

西部第 2 面 上記の遺構などを残して東半部は南壁沿い、西半部配管部分は石列の間、放水銃部分は北東側を掘り下げた。遺構は検出していない。

西部第 3 面 放水銃部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。

(16) Q 区の調査 (図版 23、図 48～50)

概要 Q 区は本丸北東部、現本丸御殿の台所東部に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。南端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる南北に細長い形で、放水銃部分は南北約 2.0 m・東西約 2.0 m、配管部分の長さは約 11.0 m、幅は約 1.0 m で設定したが、第 1 面調査中に後述する礎石列を検出したため、配管部分を南端で西側へ約 0.5 m 斜めに拡張した。



- | | |
|---|---|
| <p>1 表土</p> <p>2 7.5YR4/3褐色砂泥 (攪乱)</p> <p>3 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (攪乱45)</p> <p>4 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (攪乱42)</p> <p>5 7.5YR3/3暗褐色砂泥 φ2～3cmの礫を含む 焼土・焼瓦を含む (土坑38)</p> <p>6 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (土坑)</p> <p>7 7.5YR4/4褐色砂泥 φ1～3cmの礫を微量含む 焼土を中量含む (江戸時代後期)</p> <p>8 7.5YR5/2褐色砂泥 小礫を中量含む 焼瓦を中量含む (土坑44)</p> <p>9 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥</p> <p>10 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 やや粘質できめ細かい土質 (江戸時代前期整地層) : 第1面</p> | <p>11 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 きめ細かい土質 (溝107)</p> <p>12 2.5Y5/4黄褐色砂泥 粘質 (溝107)</p> <p>13 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ3～5cmの礫を少量含む (溝107)</p> <p>14 10YR3/3暗褐色砂泥 φ3～5cmの礫が詰まる 堅固な土質 (江戸時代前期盛土)</p> <p>15 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥に黄褐色粘土が中量混じる 堅固な土質 (江戸時代前期盛土) : 第2面</p> <p>16 2.5Y5/3黄褐色砂泥 φ5～10cmの礫を少量含む 堅固な土質 (江戸時代前期盛土) : 第2面</p> <p>17 10YR5/6黄褐色砂泥 φ3～5cmの礫を多量含む 黄褐色粘質土を少量含む</p> |
|---|---|

図 48 Q 区断面図 (1 : 50)

調査は3面に分けて実施し、第1面で江戸時代前期から中期、第2面で江戸時代前期の遺構を検出し、第3面で江戸時代前期の盛土を確認した。

層序 北端・南端は既存管により攪乱されている。約5cmの厚さの表土の下層は、約10cmの厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む褐色砂泥である。この下層は約5cmの厚さの江戸時代前期の整地層であるオリーブ褐色砂泥である。拡がりは部分的で、この下層の江戸時代前期の盛土が広い範囲で褐色砂泥の直下に接する。江戸時代前期の盛土は礫を多く含む暗褐色砂泥・黄褐色砂泥で、70cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で褐色砂泥上部までを除去し、褐色砂泥下面を第1面、暗褐色砂泥下面を第2面、黄褐色砂泥などを工事予定深度まで掘り下げた部分を第3面として遺構検出を行った。

第1面 石90・石89は南部で、焼土を含む褐色砂泥に覆われる状態で検出した。南北方向に

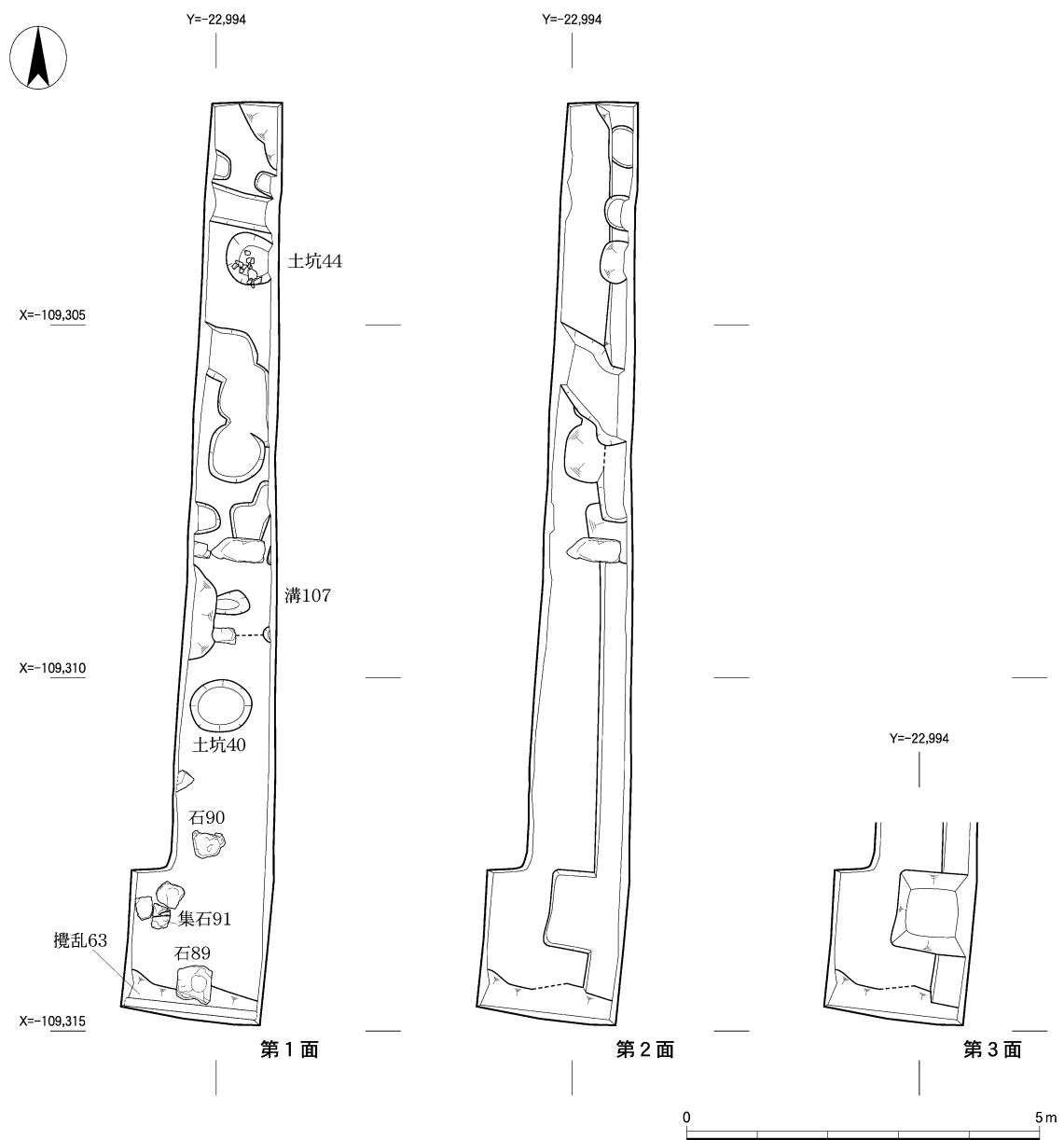


図 49 Q区平面図 (1 : 100)

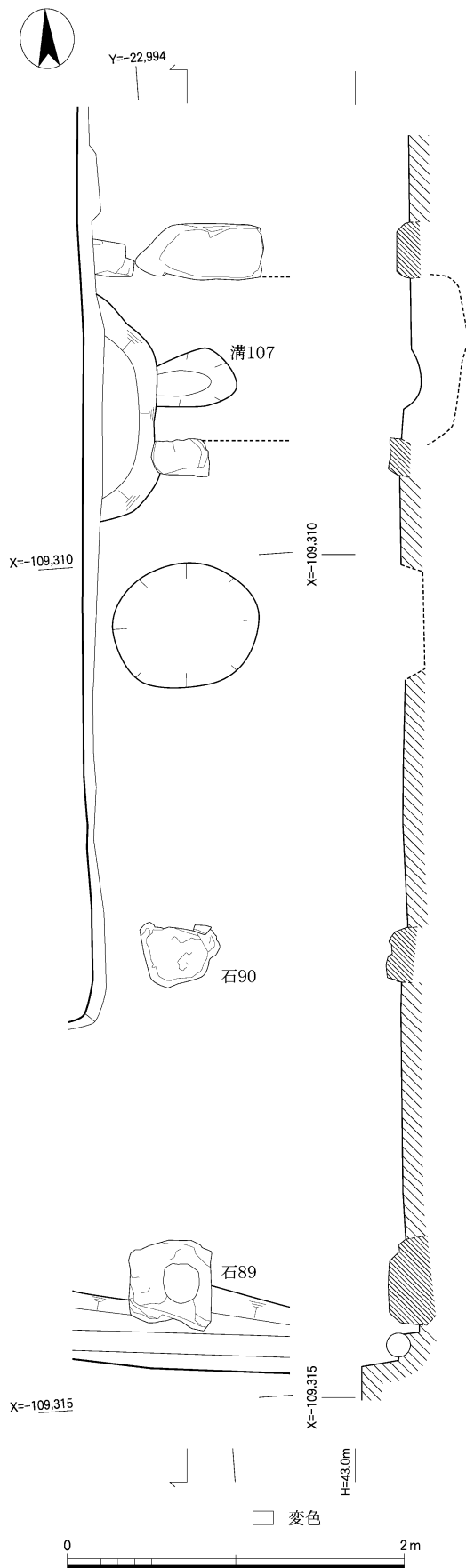


図 50 Q区礎石列・溝 107 実測図 (1 : 40)

並ぶ。北側で東に 3～4 度振る方位を取る。大きさは約 40～60 cm で、石材の種類はともにチャートである。間隔は約 2.5 m である。平坦な面を上にしており、掘形を確認できないことから整地と同時に据え付けている可能性がある。石 89 の表面は熱を受けて赤く変色・剥離している。変色が著しい範囲は直径約 20 cm で、柱あたりに相当すると推定する。

土坑 40 は中央部南寄りで見出した。平面形は直径約 0.8 m の円形で、深さ 0.2 m 以上である。埋土は暗褐色砂泥で、焼瓦を含む江戸時代前期から中期の遺物が出た。南側の石 90 との間隔は約 2.5 m なので、礎石据付穴の可能性はある。

溝 107 は中央部で見出した東西方向の溝である。東側・西側が調査区外へ延びる。断面形は逆台形で、長さ 1.2 m 以上、幅約 1.2 m で、深さは約 0.3 m である。底面は素掘りで南北両側に細長い石材を並べる。北側の石材の大きさは長軸方向約 70 cm・短軸方向約 30 cm で、種類はチャートである。南側の石材と土坑 40 との間隔は約 1.0 m である。埋土はにぶい赤褐色砂泥などで、出土遺物はない。

集石 91 は南部で見出した。石材の大きさは約 30～50 cm で、種類はチャートなどである。熱を受けて赤く変色した石材が 1 点ある。掘形を確認できないことから、原位置から移動されたものである可能性がある。

第 2 面 放水銃部分北東側および配管部分東側を掘り下げた。北部で浅い土坑を見出したのみである。

第 3 面 第 2 面で掘り下げた放水銃部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は見出していない。

(17) R区の調査 (図版 24・25、図 51～53)

概要 R区は本丸北部に設定した放水銃設置予定箇所の調査区で、現本丸御殿の雁の間西側を北部、中庭部分を南部とする。

北部は配管部分となる南北に細長い形で、現存する集水枡により、さらに北半部と南半部に分割される。北半部は長さ約 4.5 m・幅約 0.8 m、南半部は長さ約 6.0 m・幅約 0.5 m で設定した。

調査は北半部は 2 面、南半部は 1 面で実施し、南半部第 1 面で江戸時代前期の遺構を検出し、北半部第 2 面で江戸時代前期の整地層・盛土を確認した。

南部は南端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる南北に細長い形で、放水銃部分は南北約 2.0 m・東西約 2.0 m、配管部分の長さは約 13.2 m、幅は約 1.0 m で設定した。

調査は 2 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代前期から後期の遺構を検出し、第 2 面で江戸時代前期の整地層・盛土を確認した。

層序 北部は北半部の大部分が既存管などにより攪乱されている。約 10 cm の厚さの表土・盛土の下層は、約 10 cm の厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含むにぶい黄褐色砂泥である。この下層は約 5 cm の厚さの江戸時代前期の整地層である褐色砂泥である。この下層は江戸時代前期の盛土である礫を多く含む褐色砂泥で、30 cm 以上の厚さがある。

調査では北半部を機械掘削で盛土・攪乱埋土、南半部を人力掘削でにぶい黄褐色砂泥まで除去し、それぞれの下面を第 1 面、北半部では江戸時代前期の盛土である褐色砂泥を工事予定深度まで掘り下げた部分を第 2 面として遺構検出を行った。

南部は北半部が既存管などにより攪乱されている。約 10～15 cm の厚さの表土・盛土の下層は、

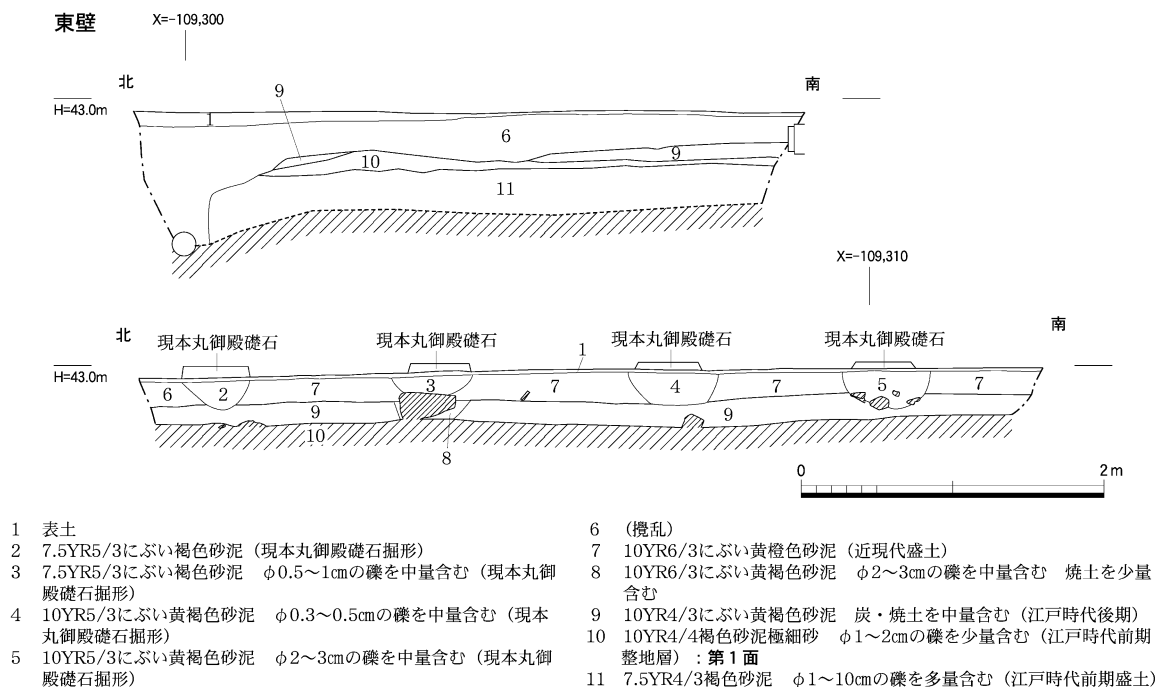


図 51 R区北部断面図 (1 : 50)

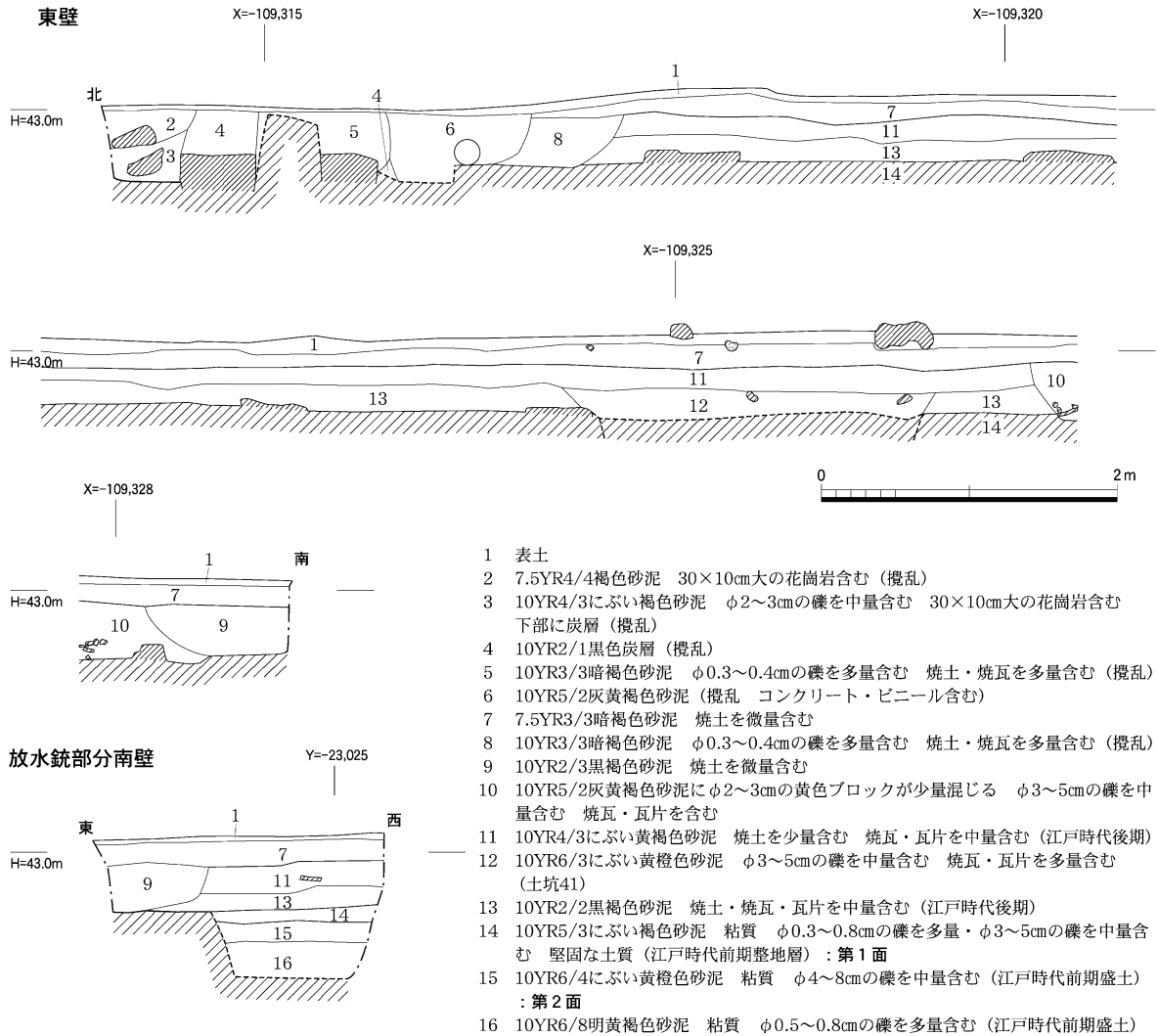


図 52 R区南部断面図 (1:50)

約 20 ~ 30 cm の厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含むにぶい黄褐色砂泥・黒褐色砂泥である。この下層は約 5 ~ 10 cm の厚さの江戸時代前期の整地層であるにぶい褐色砂泥で、やや堅く締まっている。この下層は江戸時代前期の盛土である礫を多く含むにぶい黄橙色砂泥・明黄褐色砂泥で、40 cm 以上の厚さがある。

調査では人力掘削で黒褐色砂泥までを除去し、黒褐色砂泥下面を第 1 面、にぶい黄橙色砂泥などを工事予定深度まで掘り下げた部分を第 2 面として遺構検出を行った。

北部第 1 面 北半部では遺構は検出していない。

石 75 は南半部北側で、焼土を含むにぶい黄褐色砂泥に覆われる状態で検出した。細長い石材を東西方向に据え付けており、両端は調査区外となる。大きさは長軸方向 40 cm 以上・短軸方向約 20 cm で、石材の種類は砂岩である。石組溝の一部の可能性はある

北部第 2 面 北半部の掘り下げは江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。南半部は掘り下げを行っていない。

南部第 1 面 土坑 41 は南部東壁沿いで検出した。東側が調査区外となる大型の土坑で、完掘し

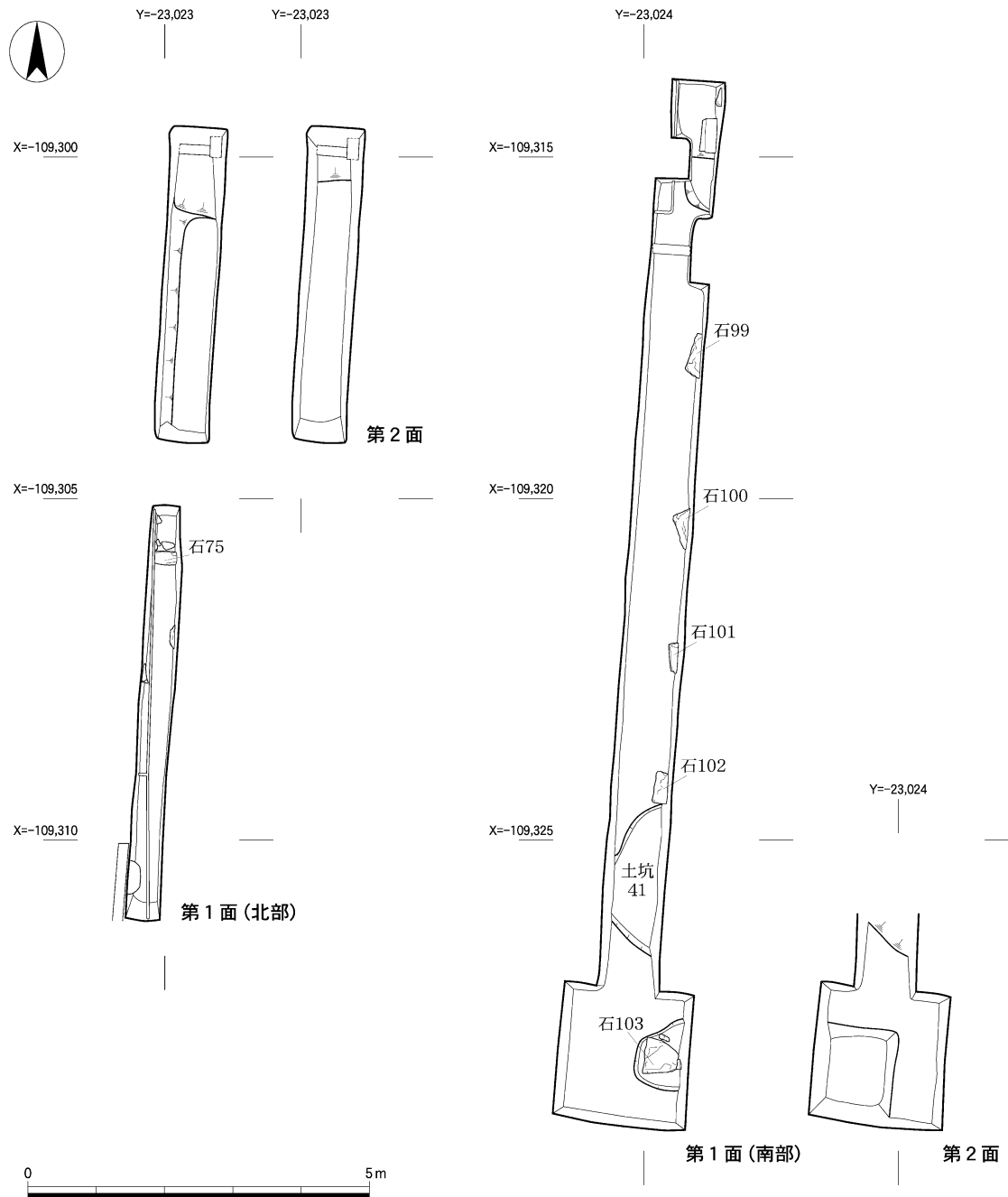


図 53 R区平面図 (1 : 100)

ていないため深さは不明である。埋土は褐色砂泥で、焼瓦などがわずかに出土した。

石 99・石 100・石 101・石 102・石 103 は東壁際沿いで、焼土を含む黒褐色砂泥に覆われる状態で検出した礎石列である。南北方向に並び、検出長は約 10.3 m である。北側で東に 3～4 度振る方位を取る。石材の大きさは 40～60 cm 以上で、種類は花崗岩・チャートである。間隔は北側から約 2.6 m・約 1.9 m・約 1.9 m・約 3.9 m とやや不揃いであるが、石 102 と石 103 の間の土坑 41 の部分にもう 1 基石があった可能性が高い。いずれも平坦な面を上にしており、掘形を確認できないことから整地と同時に据え付けている可能性がある。石 103 の表面は熱を受けて赤く変色・剥離している。変色が著しい範囲は直径約 15～20 cm で、柱あたりに相当すると推定する。

南部第2面 放水銃部分南西側を掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。

(18) S区の調査 (図版 25、図 54～56)

概要 S区は本丸北側、現本丸御殿の玄関北東側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。南北約2.0m・東西約2.0mの方形で設定した。

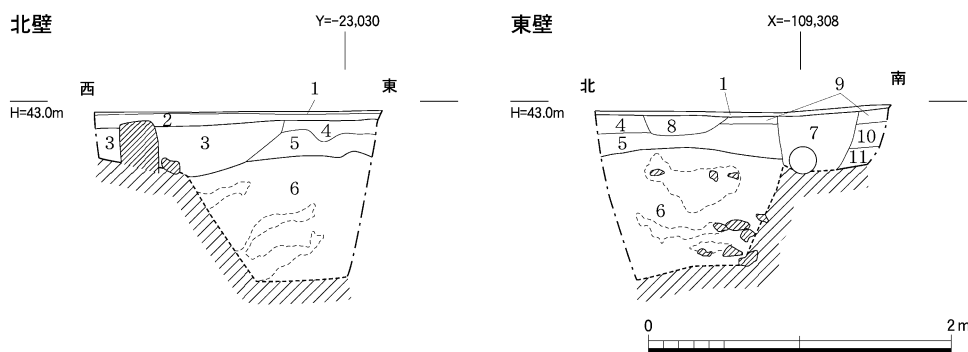
調査は2面に分けて実施し、第1面で江戸時代前期から後期の遺構を検出し、第2面で江戸時代前期の盛土を確認した。

層序 中央部は既存管により攪乱されている。約5～10cmの厚さの表土の下層は、約20cmの厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む褐色砂泥である。この下層は江戸時代前期の盛土である縞状に礫を含むにぶい黄褐色粘質土で、80cm以上の厚さがある。なお、江戸時代前期の整地層は確認していない。

調査では機械掘削で褐色砂泥上部までを除去し、褐色砂泥下面を第1面、にぶい黄褐色粘質土を工事予定深度まで掘り下げた部分を第2面として遺構検出を行った。

第1面 溝27は中央部で検出した南北方向の溝である。北側・南側が調査区外へ延びる。断面形は浅いU字形で、長さ2.0m以上、幅約1.1mで、深さは0.3m以上である。底面は素掘りで西側に細長い石材を並べる。東側に南北に並ぶ土坑は石材の据付穴か抜き取り穴と考えられ、東側にも石材が並ぶ石組溝であった可能性が高い。石材の大きさは長軸方向50～70cm以上・短軸方向約30～50cmで、種類はチャートである。埋土は暗褐色砂泥で、江戸時代の遺物がわずかに出土した。

第2面 北東側を掘り下げた。掘り下げは江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。



- | | |
|--|---|
| 1 表土 | 7 (攪乱) |
| 2 10YR6/2灰黄褐色砂泥 | 8 10YR4/6褐色砂泥 焼土を微量含む |
| 3 10YR3/3暗褐色砂泥 焼土を少量含む 焼瓦を含む (土坑30) | 9 10YR3/3暗褐色砂泥 φ0.5cm位の礫を多量含む (江戸時代後期) |
| 4 7.5YR4/4褐色砂泥 焼土を微量含む (江戸時代後期) | 10 7.5YR4/6褐色砂泥 φ5～10cmの礫・瓦片が詰まる 焼土を微量含む (江戸時代後期) |
| 5 7.5YR4/6褐色砂泥 焼土を中量含む (江戸時代後期) | 11 10YR4/4褐色砂泥 焼土を微量含む (江戸時代後期) |
| 6 2.5Y5/4にぶい黄褐色粘質土 帯状にφ1～2cmの礫を中量含む (江戸時代前期盛土) : 第1面 | |

図 54 S区断面図 (1 : 50)

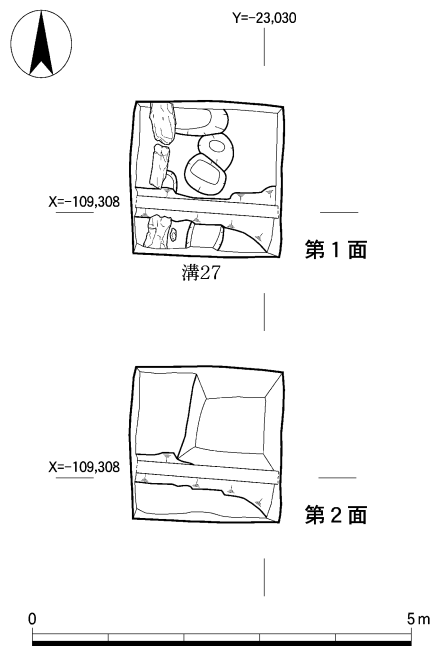


図 55 S区平面図 (1 : 100)

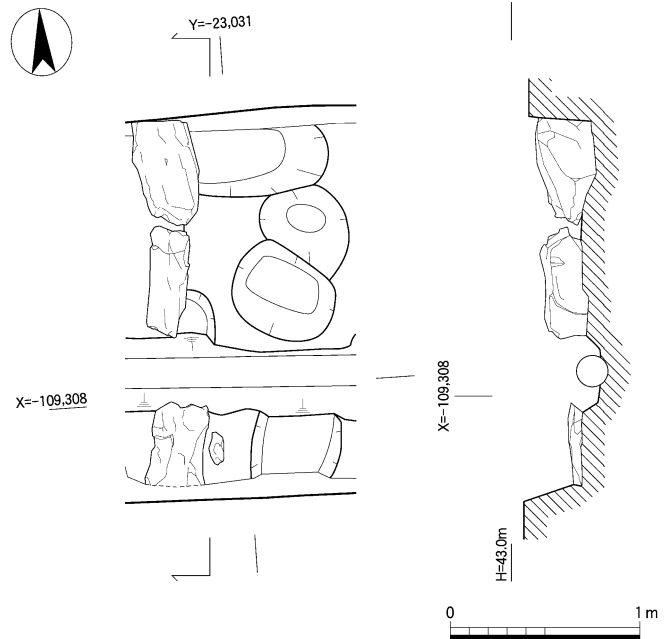


図 56 S区溝 27 実測図 (1 : 40)

(19) T区の調査 (図版 26、図 57・58)

概要 T区は本丸西部、現本丸御殿の玄関南西部に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。南東端が放水銃部分、それ以外が配管部分となる東西に細長く東部が屈曲するL字形で、放水銃部分は南北約 2.0 m・東西約 2.0 m、配管部分の長さは南北部分約 2.0 m、東西部分約 12.5 m、幅は約 1.0 mで設定した。

調査は2面に分けて実施し、第1面で江戸時代後期の遺構を検出し、第2面で江戸時代前期の整地層・盛土を確認した。

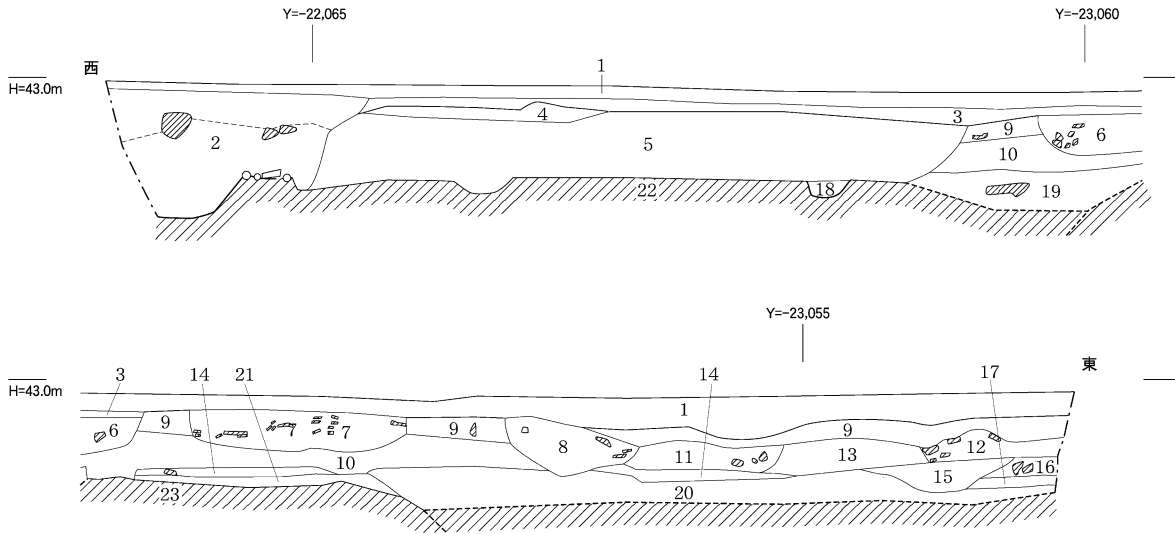
層序 西端は既存管により攪乱されている。約 10～15 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約 10 cmの厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む褐色砂泥で、やや堅く締まっている。この下層は江戸時代前期の整地層であるにぶい黄褐色砂泥である。西部でのみ確認できたが、10 cm以上の厚さがあり、堅く締まっている。この下層は江戸時代前期の盛土である礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥で、30 cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で褐色砂泥上部までを除去し、褐色砂泥下面を第1面、第1面で検出した土坑埋土やにぶい黄褐色砂泥を工事予定深度まで掘り下げた部分を第2面として遺構検出を行った。

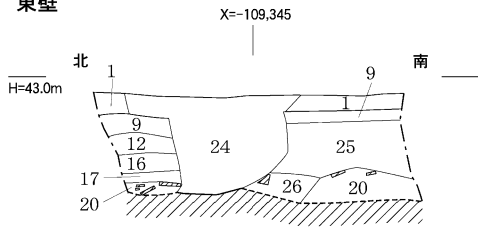
第1面 焼土・焼壁・焼瓦を多量に含む土坑が重複する。土坑 58 は東部で検出した。少なくとも 3 基の土坑が重複しており、調査区外へ広がる。埋土は焼土を含む赤褐色砂泥・にぶい赤褐色砂泥などで、多量の焼瓦を含む江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

第2面 放水銃部分を含む東部・西部の土坑、中央部北側を掘り下げた。掘り下げは土坑埋土や江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。

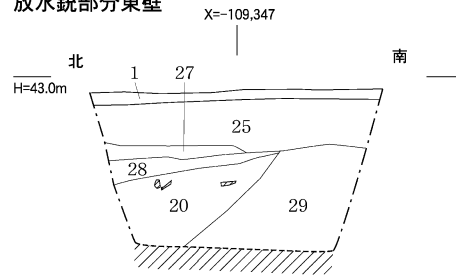
北壁



東壁



放水銃部分東壁



- | | |
|--|---|
| <p>1 表土
2 (攪乱)
3 5YR5/3にぶい橙色砂泥 φ0.2~0.4cmの礫を多量含む(近現代盛土)
4 7.5YR6/3にぶい褐色砂泥 φ0.5~1cmの礫を中量含む(江戸時代後期)
5 7.5YR5/6明褐色砂泥 φ0.3~5cmの礫を多量・φ10~20cmの礫を中量含む(土坑48)
6 7.5YR5/6明褐色砂泥 φ5cm位の礫を多量含む
7 7.5YR5/6明褐色砂泥 焼瓦を多量含む
8 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥 焼瓦・瓦片を多量含む(土坑50)
9 7.5YR4/4褐色砂泥 焼土・焼瓦を中量含む 堅く締まる
10 7.5YR4/6褐色砂泥 焼土・焼瓦を中量含む：第1面
11 10YR4/4褐色砂泥 焼瓦・瓦片を中量含む：第1面
12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 焼瓦・瓦片を中量含む：第1面
13 10YR3/3暗褐色砂泥 焼土・瓦片を少量含む：第1面
14 5Y6/2灰オリーブ粘質土 焼土を微量含む
15 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥 焼土・瓦片を少量含む
16 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 φ5~10cmの礫を少量含む 焼土を少量含む 堅く締まる(江戸時代後期)</p> | <p>17 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 φ1~2cmの礫を中量含む 焼土を少量含む 堅く締まる
18 10YR5/2灰黄褐色砂泥 焼瓦を含む(土坑60)
19 10YR2/3黒褐色砂泥 φ0.2cm~0.5cmの礫・φ3~5cmの礫を多量含む 炭化物を多量含む 花崗岩石材を1個含む(土坑56)
20 5YR4/3にぶい赤褐色砂泥 焼土・焼瓦を中量含む 締まりが悪い
21 5Y6/3オリーブ黄色砂泥
22 10YR6/3黄褐色砂泥 φ3~4cmの礫を中量含む 堅く締まる(江戸時代前期整地層か盛土)：第2面
23 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ0.2~0.5cmの礫を多量・φ5~10cmの礫を中量含む(江戸時代前期盛土)
24 (攪乱)
25 10YR3/4暗褐色砂泥 焼土・焼瓦・瓦片を少量含む：第1面
26 10YR4/4褐色砂泥 焼土・瓦片を少量含む
27 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 φ0.3~0.5cmの礫を中量含む
28 5Y4/6赤褐色砂泥 焼土・焼瓦・瓦片を中量含む
29 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 焼土・焼瓦・瓦片を多量含む</p> |
|--|---|

図 57 T区断面図 (1 : 50)

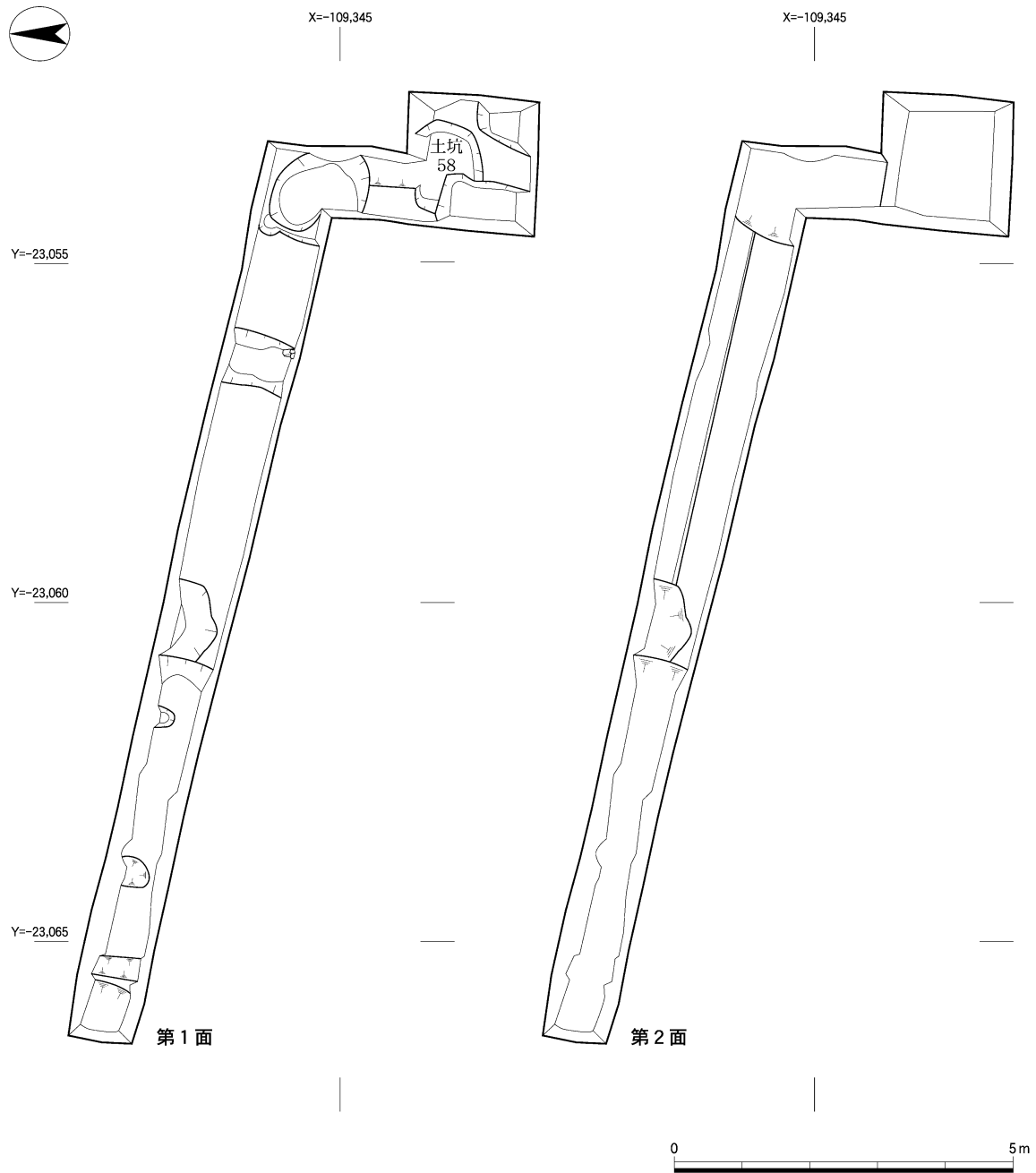


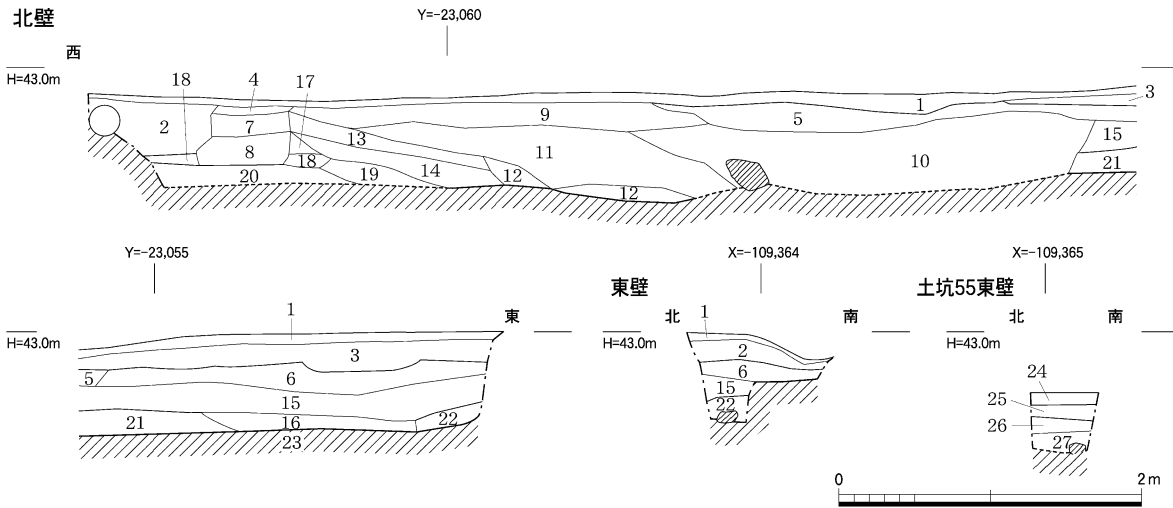
図 58 T区平面図 (1 : 100)

(20) U区の調査 (図版 27、図 59・60)

概要 U区は本丸西部に設定した配管予定箇所の調査区である。東西方向からわずかに北東に向けて折れ曲がる「へ」字形で、長さは東半部で約 3.5 m、西半部で約 6.5 m、幅は約 1.0 mで設定した。

調査は3面に分けて実施し、第1面で江戸時代中期から後期の遺構を検出し、第2面で江戸時代前期の整地層、第3面で江戸時代前期の盛土を確認した。

層序 西端は既存管により攪乱されている。約 5 ~ 15 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約 10



- | | |
|--|---|
| <p>1 表土</p> <p>2 (現代盛土)</p> <p>3 (攪乱)</p> <p>4 7.5YR4/3褐色砂泥 堅く締まる (現代盛土か)</p> <p>5 7.5YR4/4褐色砂泥 焼土・焼瓦・瓦片を中量含む (江戸時代後期)</p> <p>6 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥 φ2~3cmの礫を中量含む 炭・焼土を少量含む (江戸時代後期)</p> <p>7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 φ1~2cmの礫を多量含む 堅く締まる</p> <p>8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 焼瓦・瓦片を含む やや砂質</p> <p>9 7.5YR5/3にぶい褐色砂泥 焼瓦・瓦片を多量含む (土坑55)</p> <p>10 10YR4/4褐色砂泥 φ8~20cmの礫を極多量含む (土坑55)</p> <p>11 10YR3/3暗褐色砂泥 φ4~10cmの礫を多量含む 焼瓦を少量含む (土坑55)</p> <p>12 7.5YR5/4にぶい褐色砂泥 焼土を中量含む (土坑55)</p> <p>13 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~2cmの礫を多量含む 焼土・焼瓦を少量含む (土坑55)</p> <p>14 10YR5/2灰黄褐色砂泥 φ0.5~1cmの礫を多量含む 焼土を少量含む (土坑55)</p> <p>15 7.5YR4/4褐色砂泥 φ2~3cmの礫を少量含む 焼土を少量含む : 第1面</p> | <p>16 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥に黄色粘質土が少量混じる 焼土を少量含む</p> <p>17 2.5Y6/6明黄褐色砂泥</p> <p>18 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥に明褐色粘土ブロックが少量混じる φ2~3cmの礫を中量含む (江戸時代前期整地層) : 第2面</p> <p>19 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (江戸時代前期盛土)</p> <p>20 2.5Y5/3黄褐色砂泥 φ0.3~0.5cmの礫を中量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>21 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥に明褐色粘土ブロックが混じる やや砂質 (江戸時代前期盛土)</p> <p>22 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 φ20cm位の礫を多量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>23 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥に明黄褐色ブロックが混じる (江戸時代前期盛土)</p> <p>24 7.5YR4/3褐色砂泥 焼土・焼瓦を中量含む</p> <p>25 2.5Y6/4にぶい黄色粘質土 φ2~3cmの礫を少量含む (江戸時代前期整地層) : 第2面</p> <p>26 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 φ2~3cmの礫を中量含む (江戸時代前期盛土)</p> <p>27 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ10~15cmの礫・黄色ブロックを多量含む (江戸時代前期盛土)</p> |
|--|---|

図 59 U区断面図 (1 : 50)

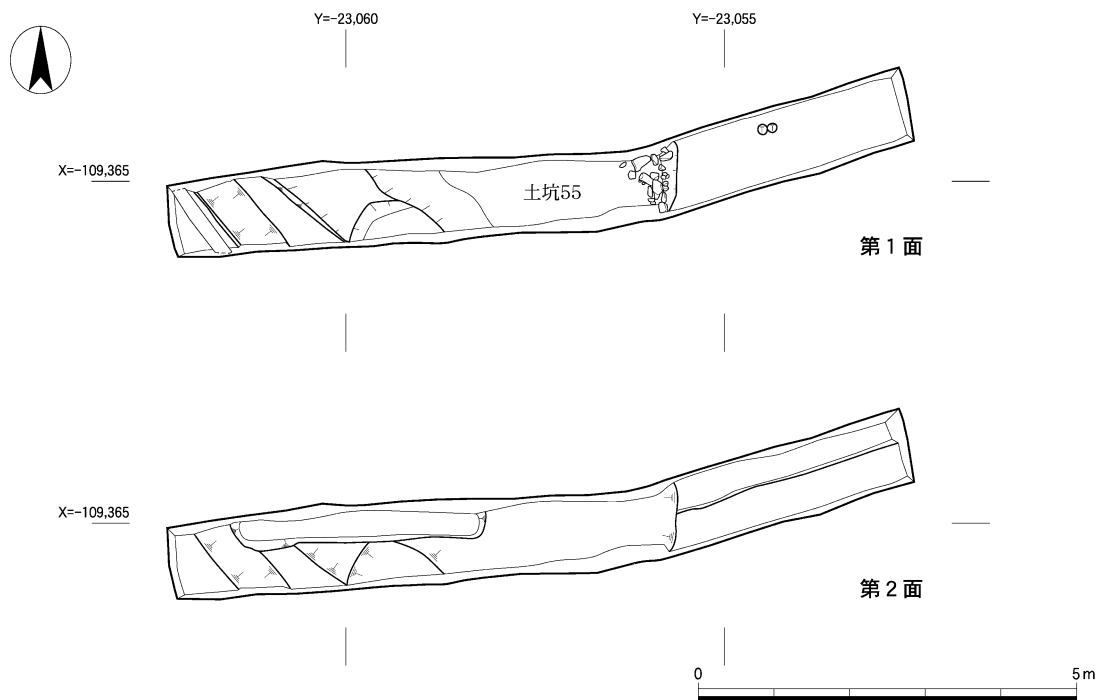


図 60 U区平面図 (1 : 100)

～15 cmの厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥である。この下層は約10 cmの厚さの江戸時代前期の整地層であるにぶい黄色砂泥・にぶい黄褐色粘質土である。拡がりは部分的で、土坑55東壁でのみ確認できた。この下層は江戸時代前期の盛土である礫を含むオリーブ褐色砂泥などで、20 cm以上の厚さがある。

調査では機械掘削で褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥上部までを除去し、褐色砂泥・にぶい黄褐色砂泥下面を第1面、江戸時代前期の整地層下面に相当する部分を第2面、土坑埋土やオリーブ褐色砂泥などを工事予定深度まで掘り下げた部分を第3面として遺構検出を行った。

第1面 土坑55は中央部で検出した。北側・南側が調査区外となる大型の土坑で、深さは0.7 m以上である。埋土は褐色砂泥・暗褐色砂泥などで、下部は直径3～15 cmの大きさの礫が詰まる。焼瓦を含む江戸時代の前期から中期の遺物が出土した。

第2面 北側および土坑埋土を掘り下げた。掘り下げは土坑埋土・包含層中にとどまり、遺構は検出していない。

第3面 第2面で掘り下げた部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは土坑埋土や江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。

(21) V区の調査 (図版 28・29、図 61・62)

概要 V区は本丸中央部、現本丸御殿の御書院南西側に設定した放水銃設置予定箇所の調査区

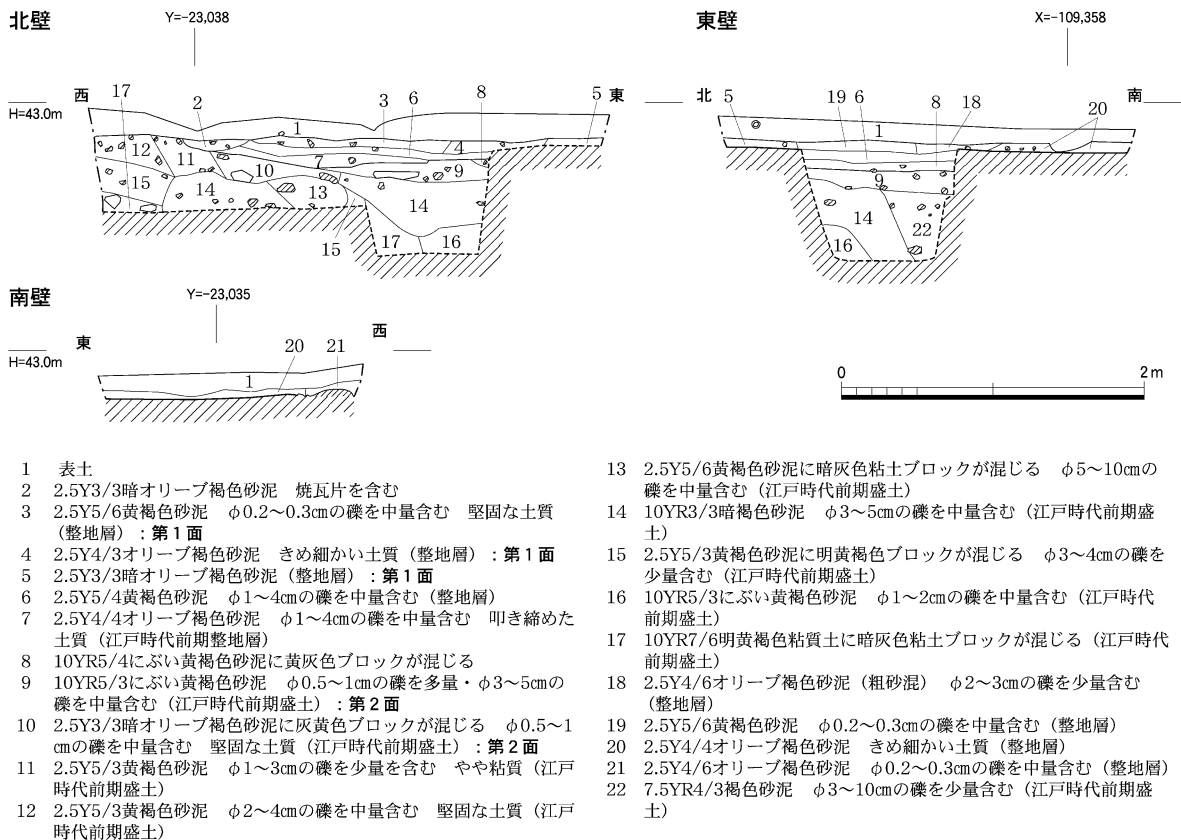


図 61 V区断面図 (1:50)

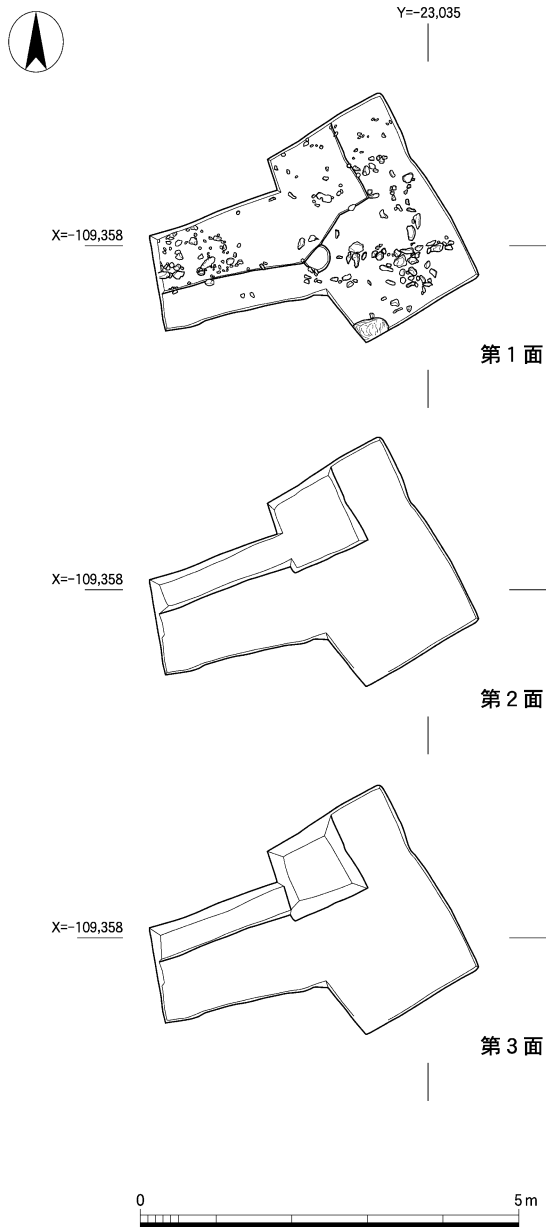


図 62 V区平面図 (1 : 100)

である。東側が放水銃部分、西側が配管部分となるやや歪な「凸」字形で、東西約 5.0 m、南北は放水銃部分で約 1.8 m・配管部分で約 1.0 mで設定したが、第 1 面調査中に後述する石敷きを検出したため、放水銃部分を約 1.0 m、配管部分を約 0.4 m北西側へ拡張した。

調査は 3 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代前期から中期の遺構を検出し、第 2 面で江戸時代前期の整地層、第 3 面で江戸時代前期の盛土を確認した。なお、第 1 面は複数の整地面を認めたため第 1-1 面・第 1-2 面に分けている。

層序 約 10 ~ 15 cmの厚さの表土の下層は、約 15 cmの厚さの黄褐色砂泥・オリーブ褐色砂泥などである。それぞれ約 5 cmの厚さで少なくとも 3 層に分かれ、いずれも礫を含む堅く締まる整地層である。上から 1 層目・2 層目の時期は確定できていないが、3 層目のオリーブ褐色砂泥は江戸時代前期の整地層と考えている。この下層は江戸時代前期の盛土である礫を含む暗褐色砂泥・褐色砂泥などで、50 cm以上の厚さがある。なお、江戸時代後期の焼土を含む包含層は確認していない。

い。

調査では機械掘削で表土までを除去し、整地層検出面を第 1 面、オリーブ褐色砂泥下面を第 2 面、暗褐色砂泥などを工事予定深度まで掘り下げた部分を第 3 面として遺構検出を行った。

第 1-1 面 整地層は 3 層とも堅く締まっており、上面に数 cm から 20 cm の大きさの礫をまばらに敷く。石敷きは比較的南部に密である。南北・東西方向に長軸方向をそろえるようにみえる部分もある。本丸御殿の補修に伴う整地面と考えている。

第 1-2 面 放水銃部分北西側、配管部分北側の整地層を掘り下げた。まばらな石敷きを検出した。石列などは認めていない。

第 2 面 第 1-2 面で掘り下げた部分を北壁沿いにさらに掘り下げた。遺構は検出していない。

第 3 面 第 2 面で掘り下げた放水銃部分を工事予定深度まで掘り下げた。掘り下げは江戸時代

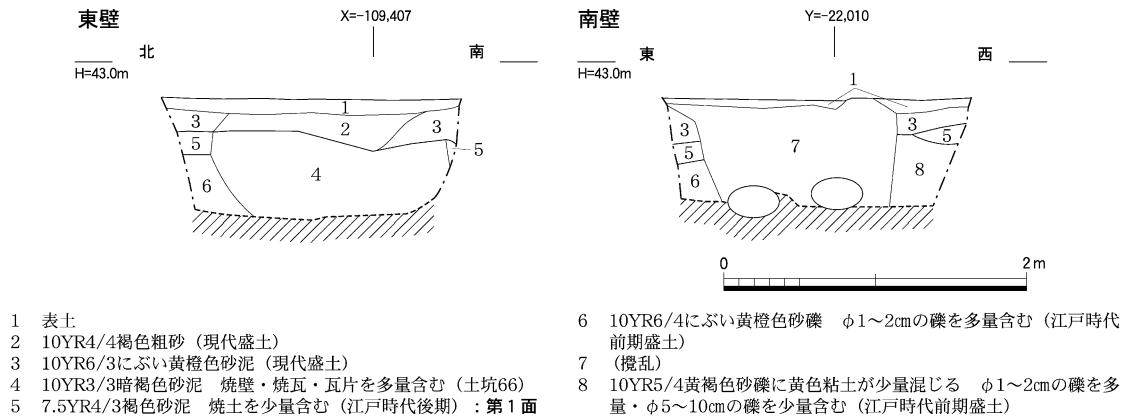


図 63 W区断面図 (1 : 50)

前期の盛土中にとどまり、遺構は検出していない。

(22) W区の調査 (図版 29、図 63・64)

概要 W区は本丸南部に設定した放水銃設置予定箇所の調査区である。南北約 2.0 m・東西約 2.0 mの方形で設定した。

調査は 1 面のみで、江戸時代後期の遺構を検出した。

層序 南西側は既存管により攪乱されている。約 20 ~ 30 cmの厚さの表土・盛土の下層は、約 10 cmの厚さの江戸時代後期の包含層である焼土を含む褐色砂泥である。この下層は江戸時代前期の盛土であるにぶい黄橙色砂礫・黄褐色砂礫で、50 cm以上の厚さがある。なお、江戸時代前期の整地層は確認していない。

調査では人力掘削で褐色砂泥までを除去し、褐色砂泥下面を第 1 層として遺構検出を行った。

第 1 面 土坑 66 は北東側で検出した。北側・東側が調査区外となる大型の土坑で、深さは 0.6 m以上である。埋土は暗褐色砂泥で、多量の焼瓦を含む江戸時代前期から中期の遺物が出土した。

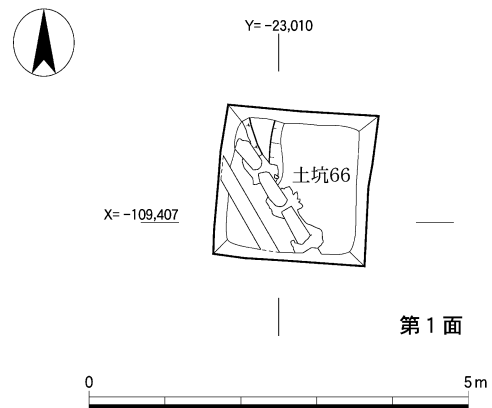


図 64 W区平面図 (1 : 100)

なお、工事予定深度は攪乱・土坑埋土にとどまるため、下層への掘り下げは実施していない。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

調査では合わせて整理用コンテナに 192 箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品などの種類がある。出土遺物のほとんどは瓦類が占め、その他の種類は少ない。

ほとんどの調査区では調査を江戸時代の遺構面・包含層でとどめているため、D区池 107 出土遺物を除く桃山時代以前の遺物は、江戸時代以降の遺構・攪乱および包含層からの出土である。そのため時代別の出土量では、江戸時代前期から後期の遺物が大部分を占め、桃山時代以前の遺物は少ない。さらに細かくみると平安時代では後期の遺物、鎌倉時代から桃山時代では鎌倉時代前半と室町時代中期の遺物の割合が高い。

(2) 土器類 (図 65)

土器類には弥生土器・土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・灰釉系陶器¹³⁾・緑釉陶器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器がある。江戸時代のものが多くを占めるが、桃山時代以前の各時代のものも少なくない。

平安京造営前 (図 65 1・2) 弥生土器甕 (1)・須恵器片 (2) がある。

1 は底部の破片で、やや厚手の平底から体部が外反気味に開く。調整は外面はナデ、内面はオサエののちナデである。D区池 107 から出土した。弥生時代中期に属する。

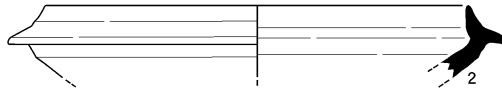
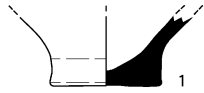
2 は立ち上がりをもつ杯身に類似する形態であるが、受部端部が垂下する。また、口径 20 cm を

表 2 遺物概要表

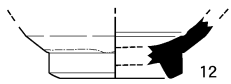
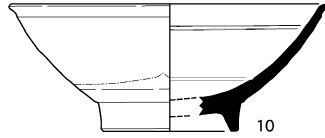
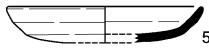
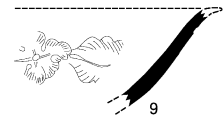
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器・須恵器		弥生土器 1 点、須恵器 1 点	0 箱	0 箱
平安時代	土師器・白色土器・黒色土器 ・瓦器・須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器・輸入陶磁器、瓦		土師器 5 点、瓦器 1 点、緑釉 陶器 1 点、輸入陶磁器 3 点、 瓦 3 点	少量	0 箱
鎌倉時代 ～桃山時代	土師器・瓦器・須恵器・焼締 陶器・灰釉系陶器・施釉陶器 ・輸入陶磁器、瓦、土製品、 石製品		土師器 10 点、焼締陶器 1 点	少量	0 箱
江戸時代	土師器・瓦器・焼締陶器・施 釉陶器・磁器・輸入陶磁器、 瓦、土製品、石製品、金属製 品、木製品		土師器 2 点、焼締陶器 2 点、 施釉陶器 5 点、磁器 3 点、瓦 74 点、埴 1 点、金属製品 24 点	192 箱	0 箱
合計		204 箱	137 点 (12 箱)	192 箱	0 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より 12 箱多くなっている。

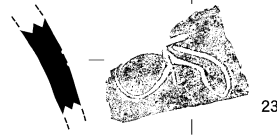
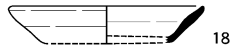
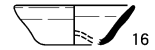
平安京造宮前



平安時代



鎌倉時代から桃山時代



江戸時代

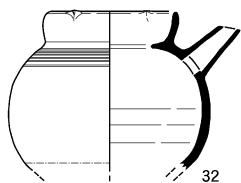
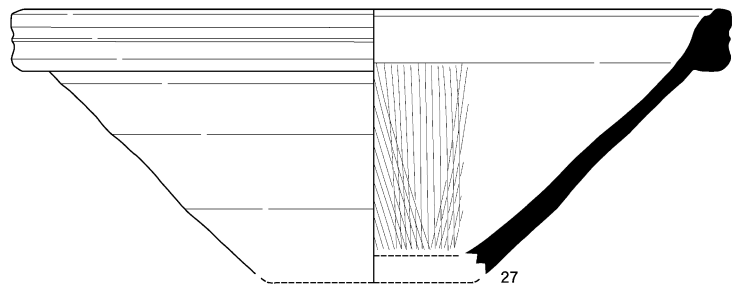
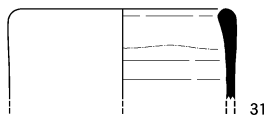
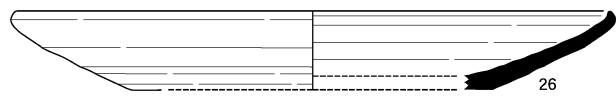
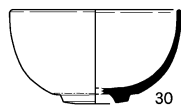
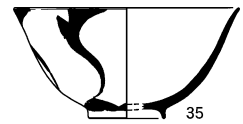
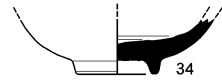
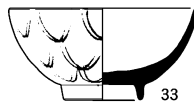


図 65 土器類実測図 (1 : 4)

超える大型品であることから器台の可能性を考えている。調整は内外面ともヨコナデで、自然釉の状況から蓋を伴うことがわかる。D区池107から出土した。古墳時代後期に属するものであろう。

平安時代(図65 3～12) 土師器皿(3～7)・高杯・甕、白色土器盤・椀・高杯、黒色土器椀、瓦器椀(8)、須恵器杯身・杯蓋・椀・鉢・壺・甕、灰釉陶器椀・壺、緑釉陶器椀(9)・火舎、中国製白磁椀(10～12)・合子、青磁椀などがある。

3～5は小型皿で、3は口縁部が屈曲して開き、4・5は内弯気味に開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。6・7は大型皿で、6は口縁端部を短く内側に折り曲げ、7は口縁部が内弯気味に開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。6はD区土坑64、3～5・7はD区土坑90から出土した。平安時代後期に属する。

8は内弯気味の体部から口縁部が外反して開く。調整は体部外面はオサエ、内面はナデののち粗いミガキ、口縁部内外面はヨコナデである。D区土坑90から出土した。平安時代後期に属する。

9は大型椀で口縁部が外反して開く。調整は内外面ともミガキで、内面に花文を陰刻する。猿投産である。D区遺構検出中に出土した。平安時代前期に属する。

10は内弯気味の体部から口縁端部が外反、11は端部が肥厚して玉縁状になる。また、10・12はともに削り出し高台で、内面には沈線がめぐる。10はK区土坑180、11はD区包含層、12はD区土坑90から出土した。平安時代後期に属する。

鎌倉時代から桃山時代(図65 13～23) 土師器皿(13～22)、瓦器椀・鍋・釜・火鉢・壺、須恵器鉢・甕、焼締陶器播鉢・壺(23)・甕、灰釉系陶器椀・鉢、施釉陶器壺、中国製白磁椀・鉢・壺、青磁椀・皿・鉢・壺、青白磁椀・合子・壺、染付椀・皿、鉄絵盤などがある。

土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。¹⁴⁾赤色系土師器には小型皿(13～15)・大型皿(17～20)がある。小型皿には口縁部が外反気味に開くもの(13)と内弯気味に開くもの(14・15)がある。大型皿は口縁部が屈曲気味に浅く開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。白色系土師器には小型皿(16)・大型皿(21・22)がある。16は底部中央を強く押し上げる形態である可能性が高い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。大型皿には口縁部が直線的に開くもの(21)と内弯気味に開くもの(22)がある。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。13はD区包含層、14はD区遺構検出中、15～22はB区土坑22からまとめて出土した。なお、18は土師器皿を取瓶に転用したものである。室町時代前期から中期に属する。

23は肩部の破片である。調整は内外面ともヨコナデで、外面に花文または窯印を線刻する。I区包含層から出土した。小破片のため時期の詳細は不明である。

江戸時代(図65 24～35) 江戸時代の土器も小破片が多く、図示できるものが少ない。

江戸時代初期から前期の土器には、土師器皿(25)・焙烙・釜・火鉢・壺、瓦器火鉢・灯火具・十能・壺、焼締陶器盤(26)・播鉢(27)・壺・甕、施釉陶器椀・皿・鉢(28・29)・壺・甕、磁器染付椀・皿・鉢、白磁椀・水滴、中国製染付椀・鉢などがある。江戸時代中期以降の遺構・攪乱および包

含層から出土したものも多い。

土師器皿には小型皿・中型皿・大型皿がある。25は特に大型の皿で、内面口縁部寄りに圈線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。B区土坑22から出土した。

26は体部が浅く開き、口縁端部は上方につまみ出す。調整は底部・体部外面はケズリ、内面および口縁部内外面はヨコナデである。体部外面には重ね焼き痕がある。備前または丹波産である。K区土坑180から出土した。

27は体部が直線的に開き、口縁端部は大きく肥厚して外面に浅い沈線がめぐる。調整は内外面ともヨコナデで、内面に12条一組の鋭い播目を密に施す。H区土坑128から出土した。

28・29は体部が浅く開き、口縁部は内弯気味に屈曲する。調整は底部外面はケズリで、内面全面および体部・口縁部外面にうすく灰釉を施す。ともに唐津産である。28はH区壁面、29はH区攪乱133から出土した。なお、施釉陶器は全体としては瀬戸・美濃産が多く、唐津産は少ない。いわゆる黒織部の抹茶碗も1個体出土している。

江戸時代中期から後期の土器には、土師器皿(24)・焙烙・火鉢・壺、瓦器火鉢、焼締陶器鉢・壺、施釉陶器碗(30)・皿・灯明皿・鉢(31)・播鉢・鍋・土瓶(32)・蓋・壺・甕、磁器染付碗(33・34)・皿・鉢・蓋・合子・壺、青磁染付碗、色絵碗・皿、青磁碗・鉢・壺、白磁碗(35)・鉢などがある。

24は器壁が薄く、内面の底部と口縁部の境目に鋭い圈線がめぐる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。B区土坑28から出土した。

30は器壁が薄く、口縁部は内弯して立ち上がる。調整は底部外面はケズリで、内面全面および体部・口縁部外面に黒色の鉄釉を施す。瀬戸・美濃産である。G区土坑22から出土した。

31は体部が直立し、口縁端部は内側に肥厚する。調整は内外面ともヨコナデで、体部外面・口縁部内外面に白色釉を施すが、端部の釉葉は剥落する。体部内面に施釉がないことから火入れまたは香炉であろう。O区遺構検出中に出土した。なお、施釉陶器全体としては京焼系の淡黄色の胎土に透明釉や絵付けを施すものも多い。

32は球形の体部から蓋受部が内弯気味に立ち上がり、5弁の花弁を作る。注口は先細りの円筒形で、漉し穴はない。体部外面上部には浅い沈線がめぐる。調整は内外面ともヨコナデで、底部外面以外にうすく灰釉を施す。ただし、内面の一部には釉葉が掛からないところがある。B区土坑26から出土した。

33は口縁部は内弯して立ち上がり、34は外反して開く。33の底部内面には重ね焼き痕がある。33は外面に粗い網目文、34は底部内外面に花文・体部・口縁部内外面に濃淡で雲気状の文様を描く。35は調整・施釉ともやや粗雑である。33・35は伊万里産で、34は中国製の可能性がある。33はI区土坑53、34はH区包含層、35はB区包含層から出土した。

(3) 瓦類 (図版 30・31、図 66～75)

瓦類には軒平瓦・軒丸瓦・軒棧瓦・平瓦・丸瓦・棧瓦・菊丸瓦・輪違瓦・熨斗瓦・鬼瓦・その他の道具瓦・塼がある。ほとんどを江戸時代のもものが占める。

平安時代の瓦には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦のほか1点のみであるが緑釉を施した熨斗瓦片がある。江戸時代初期から前期の瓦には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦をはじめ建物の棟を飾った菊丸瓦・輪違瓦・熨斗瓦・鬼瓦やその他の道具瓦が多数出土している。江戸時代中期から後期にはそれらに軒棧瓦・棧瓦が加わるが出土量は少ない。江戸時代の瓦は焼成段階で燻すため表面は黒灰色を呈する。なお、鎌倉時代から桃山時代の瓦は、形態や調整技法から江戸時代の瓦と明瞭に区別できないため、混在している可能性がある。また、江戸時代の瓦は、新しい時期の遺構・包含層により古い時期のもものが混入しており、形態や調整技法からも厳密に区別することはできなかった。

軒平瓦 (図 66 36～48) 軒平瓦の瓦当文様はすべて唐草文である。

36は巻き込みの強い唐草文で、周囲には圏線がめぐり、外区に珠文を配する。ほとんどの珠文の外縁部側に範傷がある。調整は瓦当上面・裏面・外周とも横方向のナデである。C区土坑90から出土した。平安時代前期に属する。

37は巻き込みの強い唐草文で、周囲には圏線がめぐり、外区に小粒の珠文を配する。文様は明瞭で範傷はない。調整は瓦当上面は横方向のケズリである。A区土坑51から出土した。平安時代前期に属する。

江戸時代の軒平瓦 (38～48) には、比較的小型のもの (38～40・43・44・46～48) ・やや大型のもの (41) ・大型のもの (42・45) がある。38～47は二の丸、48は本丸からの出土である。

38は簡略化した唐草文と細い弧線を組み合わせる。瓦当部分は貼り付けで、調整は凹面は縦方向のナデ、裏面・外周は横方向のナデである。C区土坑30から出土した。江戸時代中期以前に属する。

39・40は同範である。簡略化した唐草文で、中心に三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当上面・裏面・外周とも横方向のナデである。39はC区土坑30、40はC区土坑44から出土した。江戸時代中期以前に属する。

41は文様の詳細は不明である。接合技法は不明で、調整は瓦当上面・裏面・外周とも横方向のナデで、外縁部の角は面取り状のケズリを施す。C区土坑30から出土した。江戸時代中期以前に属する。

42は巻き込みの強い唐草文で、中心に五つ葉を飾る。接合技法は不明で、調整は凹面は縦方向のナデ、裏面・外周は横方向のナデである。瓦当面には剥離剤の雲母が多く付着する。C区土坑103から出土した。江戸時代中期以前に属する。

43は簡略化した唐草文である。接合技法は不明で、調整は瓦当上面・裏面・外周とも横方向の

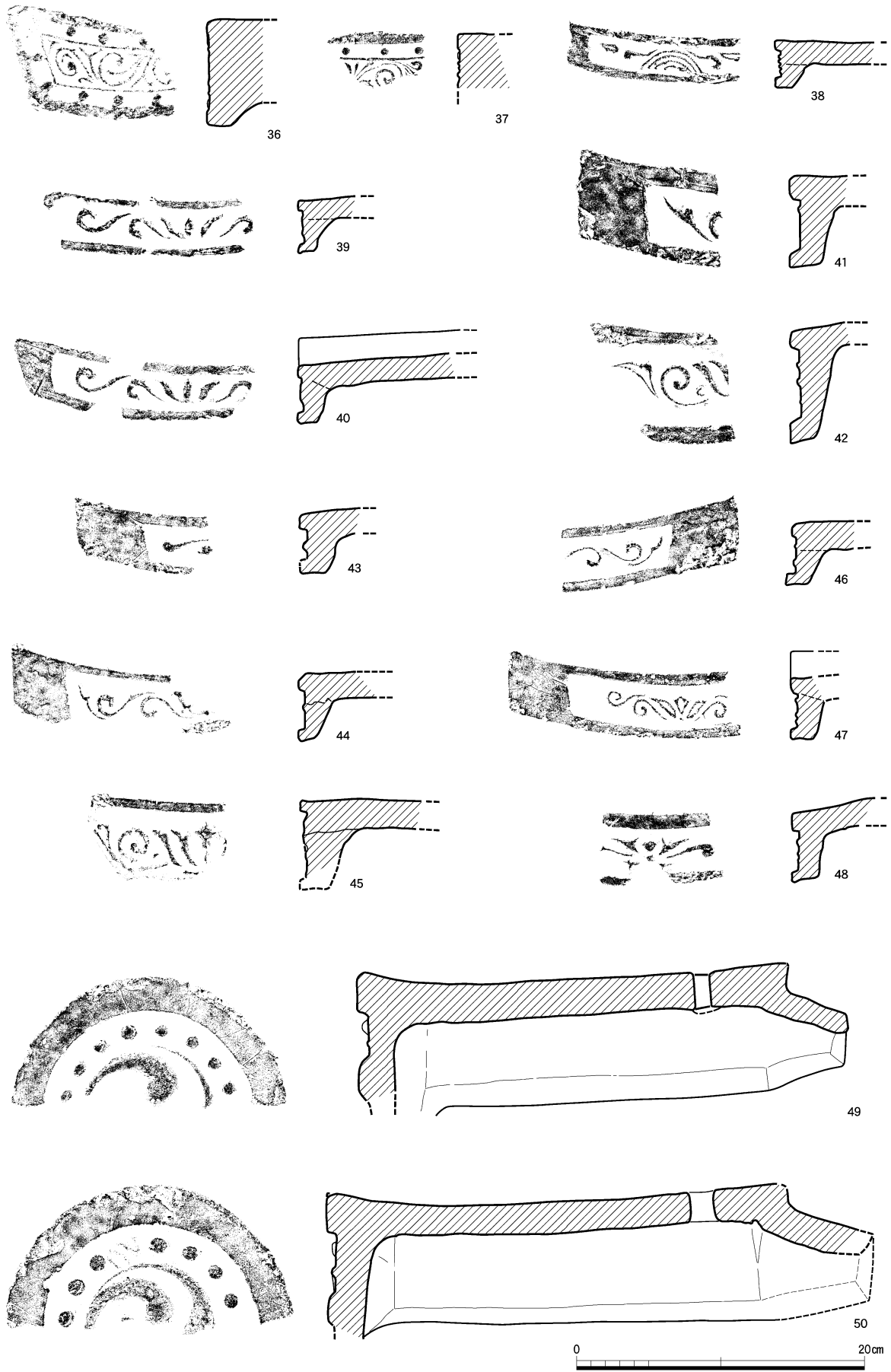


图 66 軒平瓦·軒丸瓦拓影·实测图 1 (1 : 4)

ナデである。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

44 は唐草の子葉の一部に節を作る。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当上面はケズリ、裏面・外周は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデである。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

45 は 42 と同範もしくは同文である。瓦当部分は貼り付けで、調整は凹面は縦方向のナデののち瓦当上面を面取り状のケズリ、裏面・外周は横方向のナデである。G区土坑 36 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

46 は 44 と同範もしくは同文であろう。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当上面はケズリ、裏面・外周は横方向のナデである。D区包含層より出土した。江戸時代中期以前に属する。

47 は巻き込みの強い小振りな唐草文で、中心に縁取り状の三つ葉を飾る。瓦当部分は貼り付けで、調整は瓦当上面・裏面・外周とも横方向のナデである。I区包含層より出土した。江戸時代に属する。

48 は簡略化した唐草文で、中心に五方に延びる星形を飾る。接合技法は不明で、調整は瓦当上面・裏面・外周とも横方向のナデである。R区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

軒丸瓦（図 66・67 49～60）軒丸瓦の瓦当文様はすべて巴文である。

51 は左巻きの三巴文で、周囲には圈線がめぐり、外区に密に珠文を配する。珠文の周辺に範傷が多く、上面には糸切り痕が残る。調整は瓦当裏面はナデ、外周は横方向のナデである。D区土坑 62 から出土した。平安時代後期に属する。

江戸時代の軒丸瓦（49・50・52～60）には、比較的小型のもの（52・53・57）・やや大型のもの（54・55・58）・大型のもの（49・50・56・59）・特に大型のもの（60）がある。49・50・52～60 はすべて二の丸からの出土である。

49・50 は玉縁まで残るもので、釘孔を 1 箇所穿孔する。右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。50 は珠文の一つを潰す。49 の調整は瓦当裏面はナデ・横方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。50 の調整は瓦当裏面はナデ・横方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデののち、縦方向の粗いミガキ、凹面は布目の上を縦方向のナデである。49 は G区土坑 36、50 は C区土坑 30 から出土した。49 は江戸時代、50 は江戸時代中期以前に属する。

52 は右巻きの三巴文で、周囲には大粒の珠文を配する。接合面にはヘラで斜格子状の沈線を施す。調整は瓦当裏面は斜め方向のナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。M区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

53 は右巻きの三巴文で、周囲には小粒の珠文を配する。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、凹面は布目が残る。C区攪乱 29 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

54～56 は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。55 には小さな範傷が 1 箇所ある。54・55 の調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。56 の調整は瓦当裏面は斜め方向・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。53・54 は C区土坑 30、56 は C区

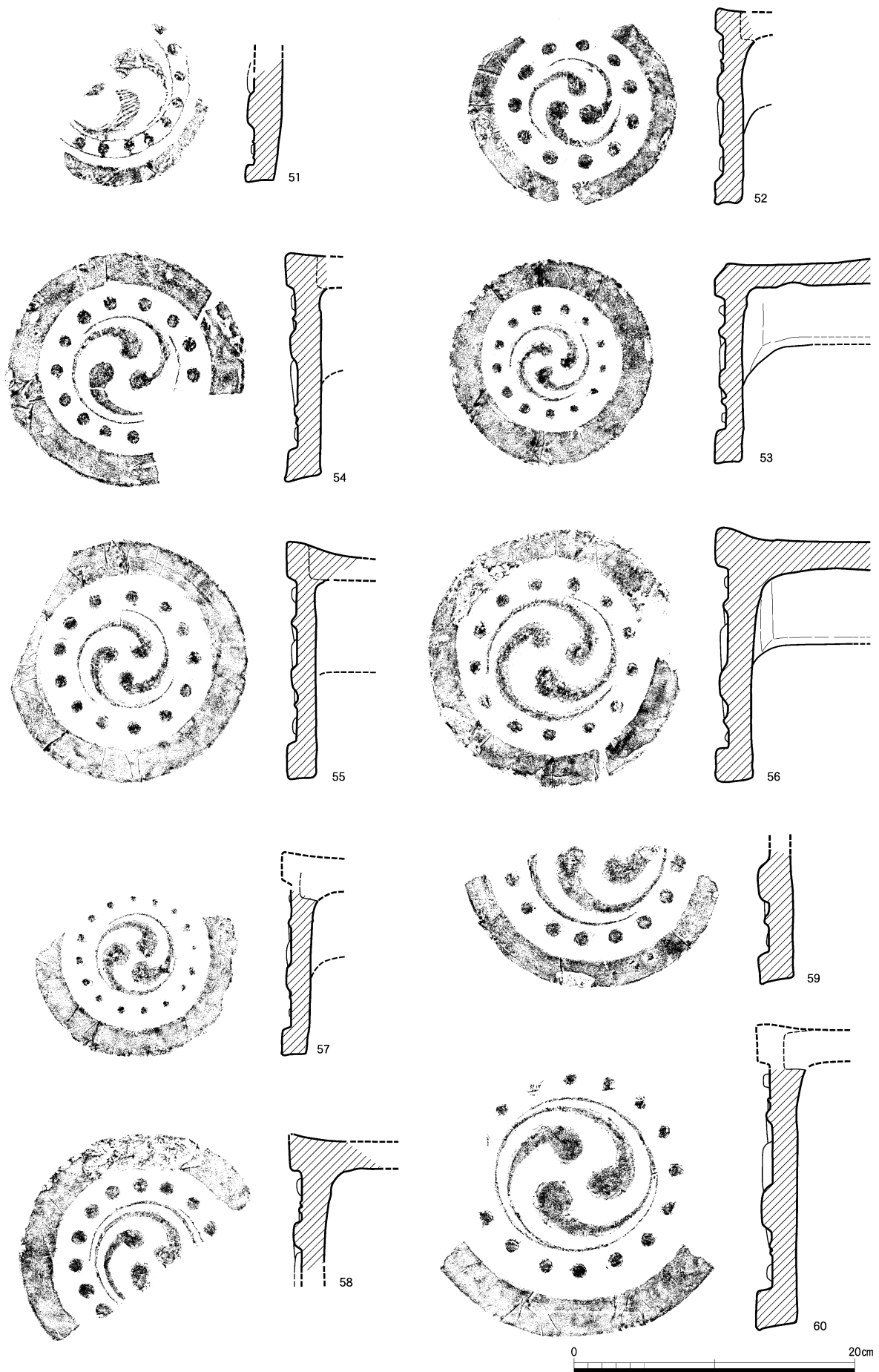


图 67 軒丸瓦拓影·实测图 2 (1 : 4)

溝 45 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

57 は右巻きの太めの三巴文で、周囲には小粒の珠文を配する。接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面は横方向のナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。瓦当裏面下端にはケズリを施す。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

58・59 は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

60 は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。外縁部外周の角は面取り状のケズリを施す。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

平瓦 (図 68・69 61～66) 平安時代の平瓦はすべて細片なので図示していない。

江戸時代の平瓦にはわずかな差ではあるが、比較的小型のもの (63・65) ・やや大型のもの (64) ・大型のもの (61・62) がある。61～66 はすべて二の丸からの出土である。

61・62 の調整は凸面は縦方向のナデ、凹面は縦方向のナデののち縁取り状のナデで、端面・側面はナデである。広端面凹面側の角は面取り状のケズリを施す。61 は凹面の一部に斜め方向のナデを加える。61 はC区攪乱 28、62 はC区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

64 の調整は凸面は上を縦方向のナデ、凹面は横方向のナデののち縦方向のナデで、端面・側面はナデである。狭端面凹面側の角は面取り状のケズリを施す。凸面には鉄釘が数箇所が付着する。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

63・65 の調整は凹面は横方向のナデで、端面・側面はナデである。狭端面・広端面凹面側の角は面取り状のケズリを施す。凸面は 63 が縦方向のナデ、65 が横方向の丁寧なナデである。63 の凹面狭端面寄りには浅い沈線が残る。ともに I 区土坑 8 から出土した。江戸時代に属する。

なお、66 は一端を斜め方向に切断した平瓦で、下棟に接する部分に使用されたものである。調整は凸面は縦方向のナデののち切断部分を縁取り状のナデ、凹面は横方向から斜め方向のナデで、端面・側面はナデである。C区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

丸瓦 (図 70・71 67～73) 平安時代の丸瓦はすべて細片なので図示していない。

江戸時代の丸瓦には比較的小型のもの (69) ・やや大型のもの (68) ・大型のもの (67・71・72) ・特に大型のもの (70) がある。67～70・73 は二の丸、71・72 は本丸からの出土である。

67 の調整は凸面は縦方向のナデ、玉縁は横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。凹面周縁部は縁取り状のケズリである。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

68 の調整は凸面は縦方向のナデ、玉縁は横方向のナデで、凹面は布目の上から部分的に縦方向の幅の狭い沈線状のケズリを施す。凹面周縁部は縁取り状のケズリである。C区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

69 の調整は凸面は縦方向のナデ、玉縁は横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。凹面周縁部は縁取り状のケズリである。I区土坑 3 から出土した。江戸時代に属する。

70 の調整は凸面は縦方向のナデ、玉縁は横方向のナデで、凹面は布目が残る。凹面側縁部はケ

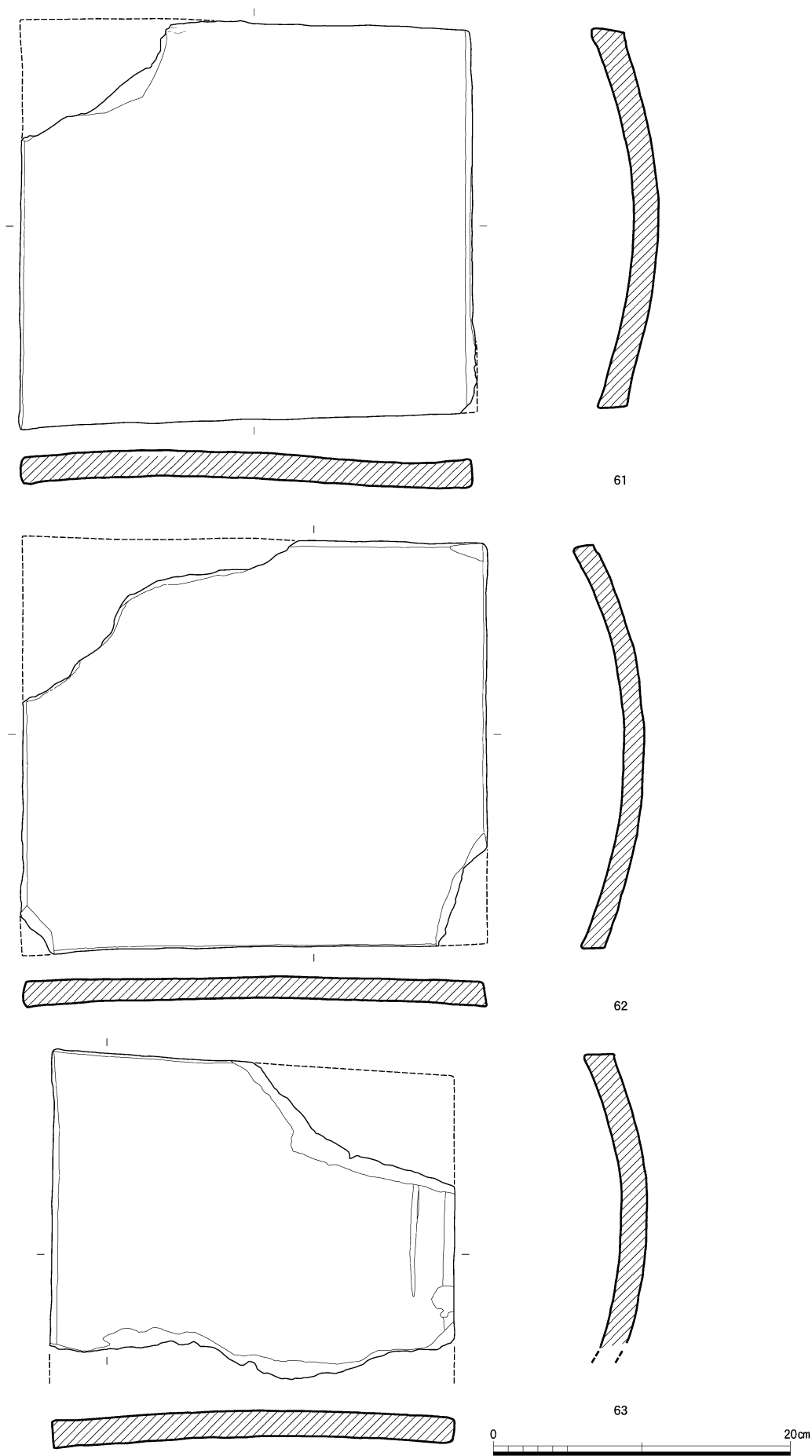


图 68 平瓦实测图 1 (1 : 4)

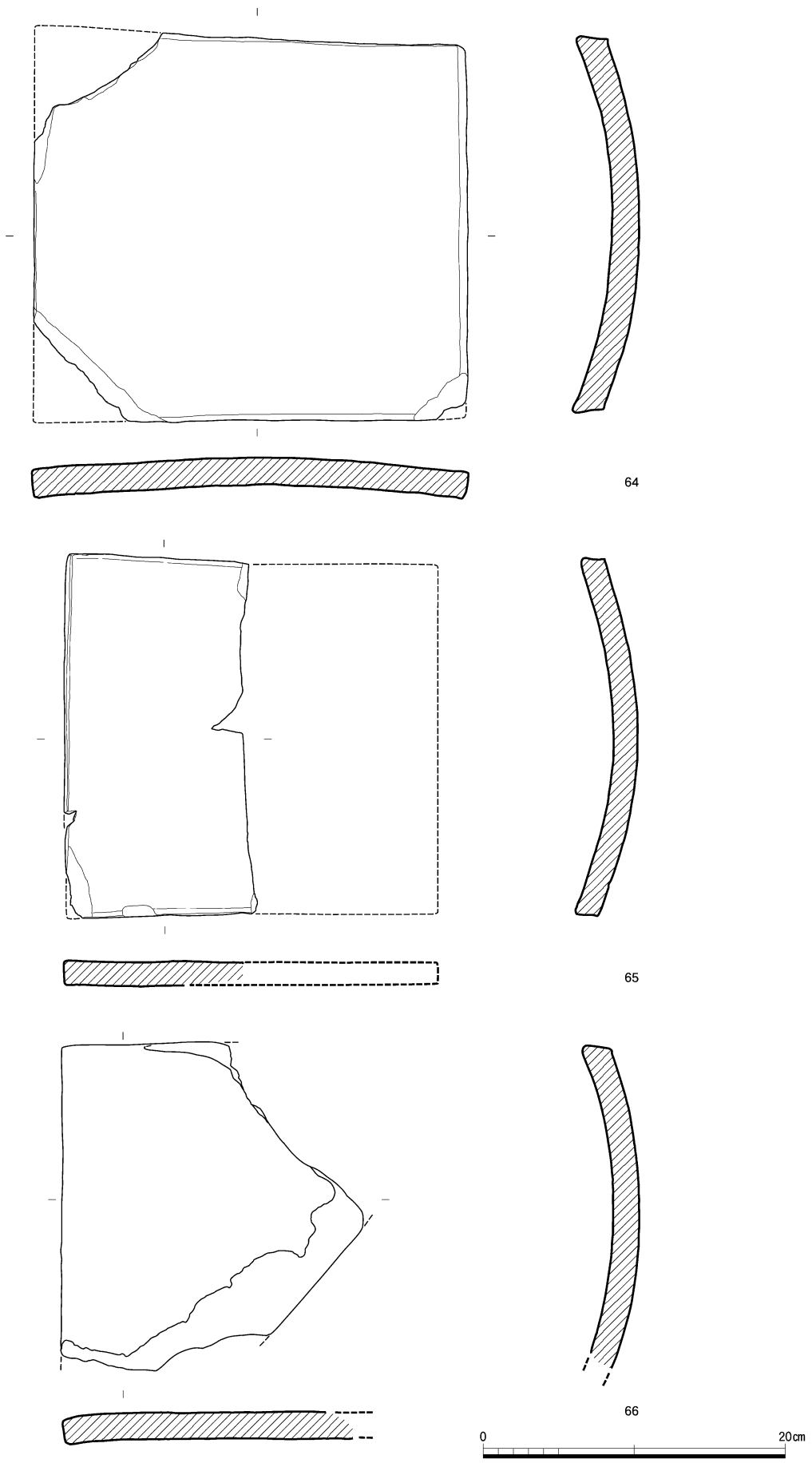


图 69 平瓦实测图 2 (1 : 4)

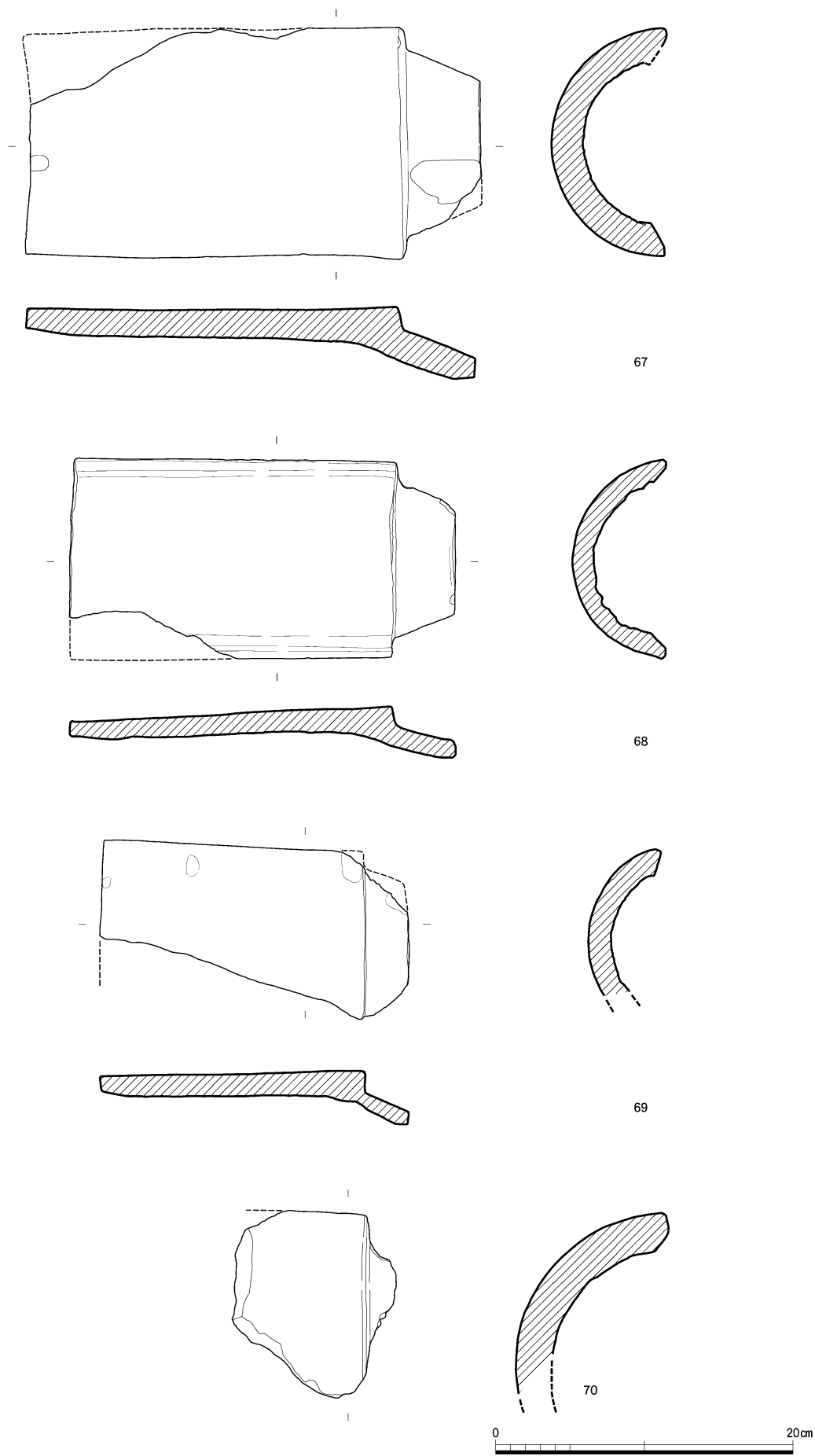
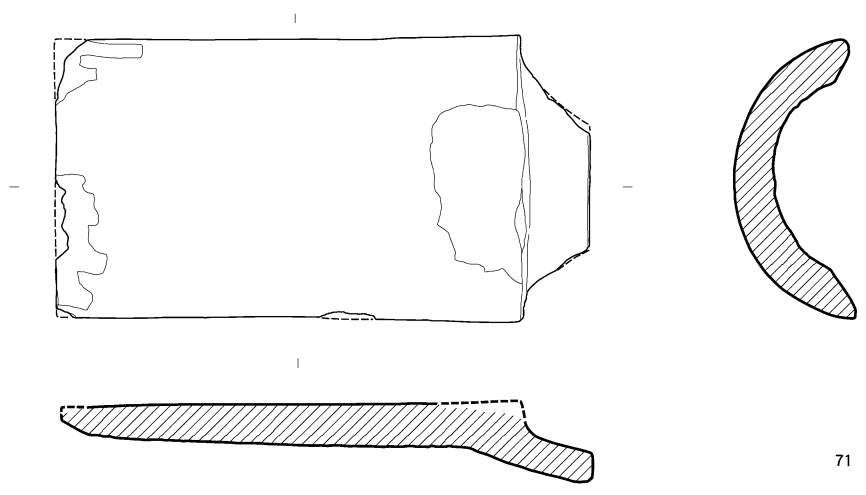
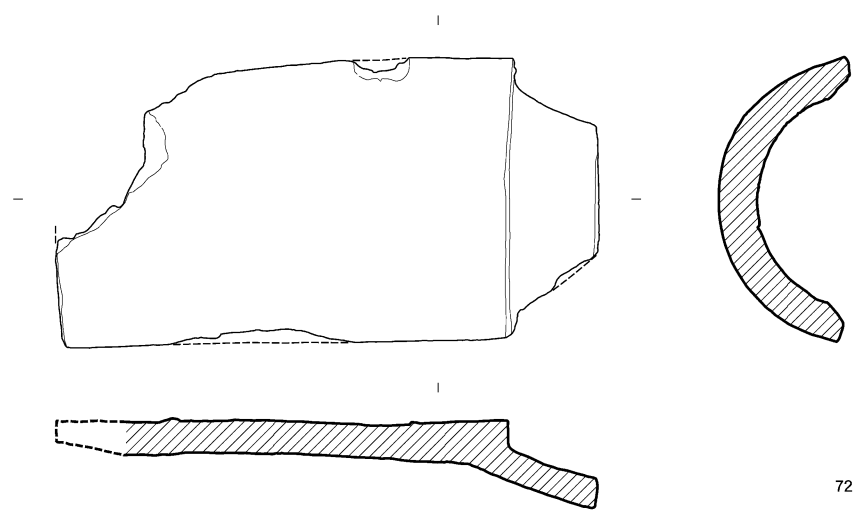


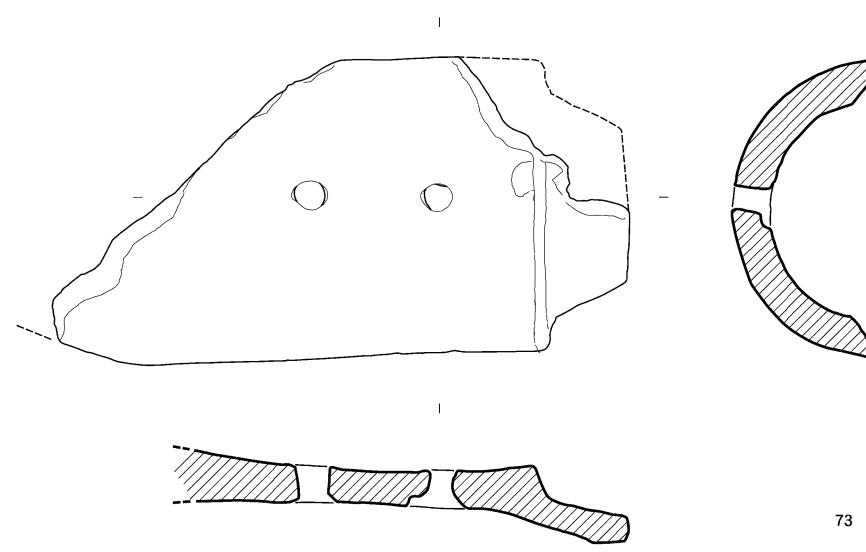
图 70 丸瓦实测图 1 (1 : 4)



71



72



73



图 71 丸瓦実測図 2 (1 : 4)

ズリである。C区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

71 の調整は凸面は縦方向のナデ、玉縁は横方向のナデで、凹面は布目の上から縦方向の粗いケズリを施す。凹面周縁部は縁取り状のケズリである。W区土坑 66 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

72 の調整は凸面は縦方向のナデ、玉縁は横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。凹面周縁部は縁取り状のケズリである。熱を受けて赤褐色に変色し、やや歪む。O区溝 21 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

なお、73 は広端面側を斜め方向に切断した丸瓦である。広端面側はやや厚くなり、釘孔を 2 箇所穿孔する。調整は凸面は縦方向のナデ、玉縁は横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。凹面周縁部は縁取り状のケズリである。D区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

菊丸瓦（図版 30、図 72 74～97） 菊丸瓦は軒平瓦・軒丸瓦よりも多数出土した。小型円形の瓦当上部に細長い体部を接合する。小型のもの（74～82・89～91）・大型のもの（83～88・92～97）がある。74～88 は二の丸、89～97 は本丸からの出土である。

74 は単弁八弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ、外周は横方向のナデで、凸面・側面は縦方向のナデ、凹面はオサエである。H区土坑 128 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

75 は単弁八弁花文で、弁端は瓦当面端部まで延びる。接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ、外周は横方向のナデである。C区遺構検出中に出土した。江戸時代中期以前に属する。

76 は凹凸のある単弁十二弁花文で、花弁は接する。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。D区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

77 は間弁を配する八弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデ、内面はナデである。C区攪乱 29 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

78 は間弁を配する八弁花文で、花弁の間隔はやや広い。接合面に沈線はない。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。C区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

79 は間弁を配する八弁花文で、間弁は中実である。接合面にはヘラで沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。D区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

80 は単弁十六弁花文である。接合面にはヘラで横方向に粗い沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

81 は単弁十六弁花文で、弁端は尖り気味である。調整は瓦当裏面は円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。瓦当裏面中央にはヘラを当てた痕がある。G区土坑

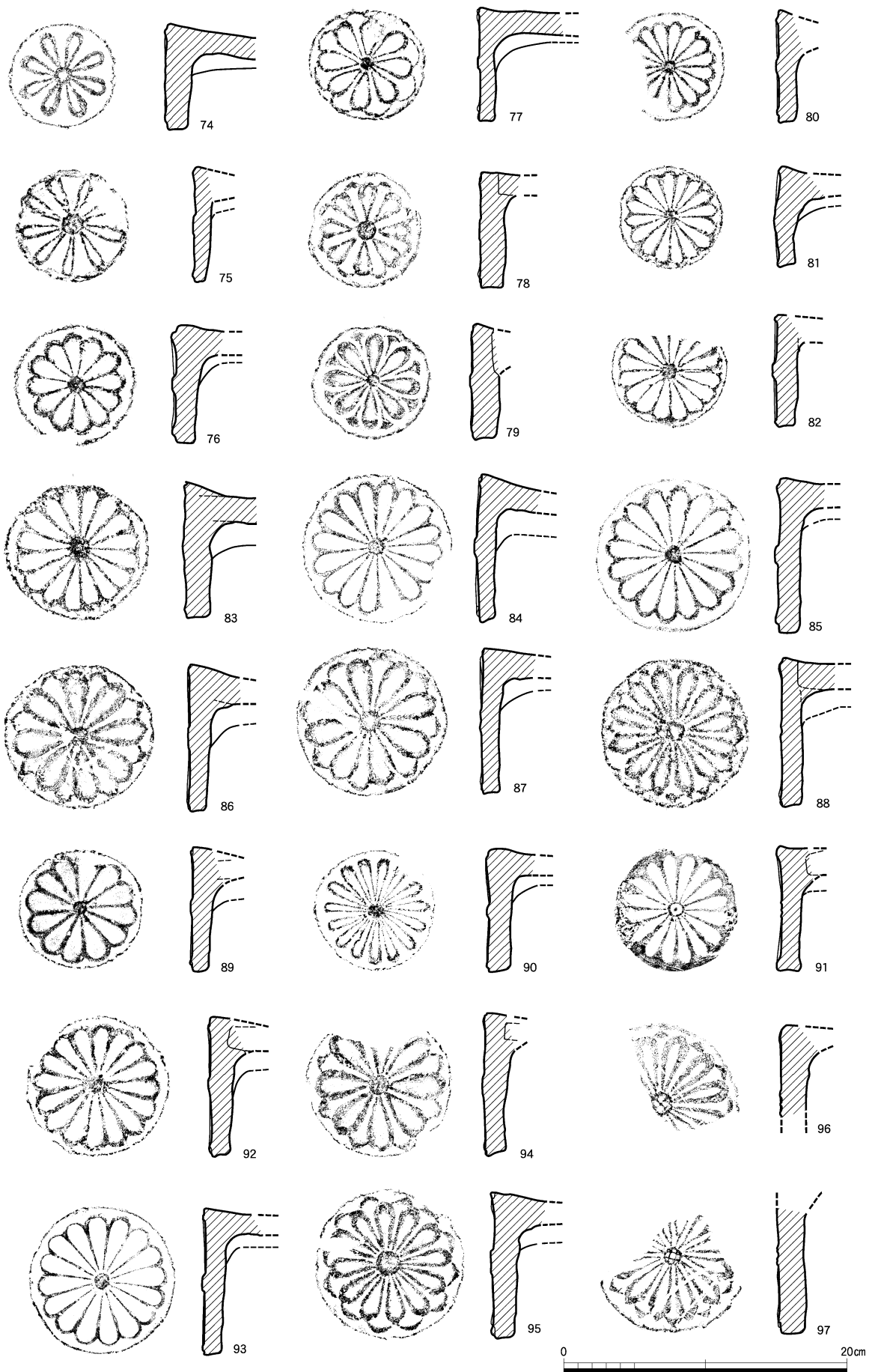


图 72 菊丸瓦拓影·实测图 (1 : 4)

36 から出土した。江戸時代に属する。

82 は単弁十六弁花文で、弁端は丸みをもつ。接合面にはヘラで沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。G区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。

83 は単弁十六弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面はナデである。やや歪む。C区土坑 103 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

84・85 は同範もしくは同文の単弁十六弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。84 はM区包含層、85 はG区遺構検出中に出土した。江戸時代中期以前に属する。

86・87 は同範もしくは同文の間弁を配する八弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。ともにD区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

88 は間弁を配する十二弁花文で、弁端は尖る。接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。C区遺構検出中に出土した。江戸時代中期以前に属する。

89 は単弁十二弁花文で、花弁は接する。接合面にはヘラで沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。P区機械掘削中に出土した。江戸時代に属する。

90 は単弁十五弁花文で、花弁は細い。範傷が2箇所にある。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。T区遺構検出中に出土した。江戸時代中期以前に属する。

91 は陰刻の十六弁花文である。接合面にはヘラで横方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面は横方向・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のケズリである。江戸時代中期以前に属する。Q区攪乱 63 から出土した。

92 は83 と同範もしくは同文の単弁十六弁花文である。接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面はオサエ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。熱を受けて橙色に変色する。W区土坑 66 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

93 は84・85 と同範もしくは同文の単弁十六弁花文である。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。熱を受けて橙色に変色する。Q区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

94 は86・87 と同範もしくは同文の間弁を配する八弁花文である。接合面にはヘラで縦方向に沈線を施す。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。T区土坑 58 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

95 は88 と同文の間弁を配する十二弁花文である。範傷が2箇所にある。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデで、凸面は縦方向のナデである。熱を受けて橙色に変色する。W区土坑 66 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

96・97 は間弁を配する十二弁花文で、97 の弁端は尖る。中心に96 は十字形、97 は格子状に

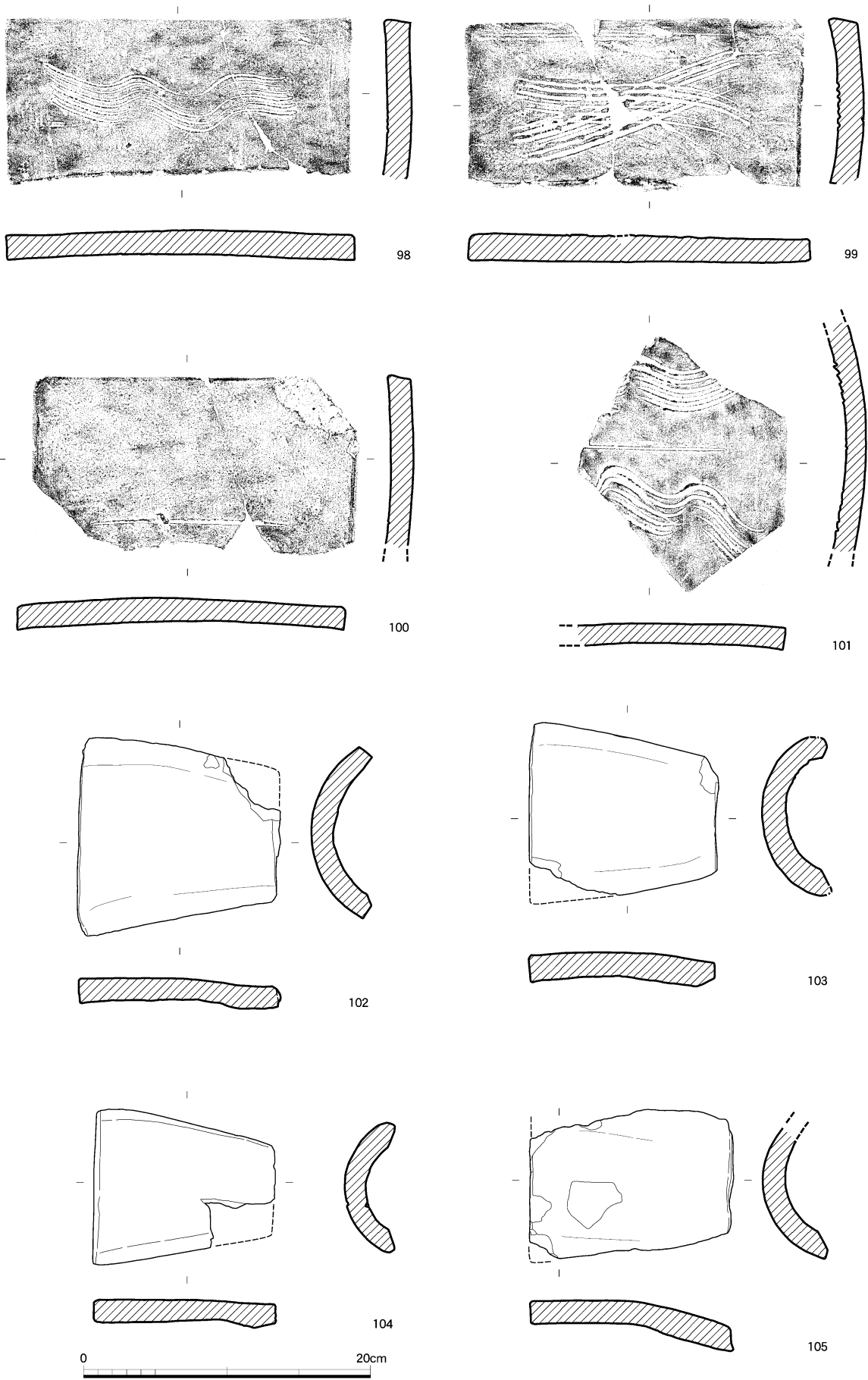


图 73 鬲斗瓦·輪違瓦拓影·实测图 (1 : 4)

刻線を飾る。また、96には1条、97には2条のヘラ先による傷が残る。調整は瓦当裏面はオサエナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。ともにW区土坑66から出土した。江戸時代中期以前に属する。

熨斗瓦(図版31、図73 98～101) 熨斗瓦は平瓦との区別が難しいため確認できた個体数は少ない。いずれも焼成前に施した沈線に沿って長方形に半裁する、いわゆる切熨斗である。100・101は半裁せずに使用したか、もしくは失敗品の可能性がある。98～100は二の丸、101は本丸からの出土である。

98の調整は凸面は縦方向のナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデ、凹面は横方向のナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデで、側面・端面はナデである。凹面には櫛状工具で波状に沈線を施す。I区土坑8から出土した。江戸時代に属する。

99の調整は凸面は粗いナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデ、凹面は縦方向のナデで、側面・端面はナデである。凹面には櫛状工具で交叉状に沈線を施す。I区土坑8から出土した。江戸時代に属する。

100の調整は凸面は縦方向のナデ、凹面は縦方向のナデののち側面・端面沿いに縁取り状のナデで、側面・端面はナデである。櫛状工具による沈線はない。I区土坑8から出土した。江戸時代に属する。

101の調整は凸面は粗いナデののち端面沿いに縁取り状のナデ、横方向のナデで、端面はナデである。凹面には櫛状工具で波状に沈線を施す。T区土坑58から出土した。江戸時代中期以前に属する。

輪違瓦(図版31、図73 102～105) 輪違瓦は完形に復元できる個体は少ない。丸瓦と比較して薄手のものが多く、平面形が台形をとることに大きな特徴がある。大きさに明確な区別はできないが、やや小型のもの(103)がある。102・103は二の丸、104・105は本丸からの出土である。

102の調整は凸面は縦方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。凹面側面側はケズリ、狭端面側は横方向のナデである。広端面凸面側の角は面取り状のケズリを施す。C区攪乱29から出土した。江戸時代中期以前に属する。

103の調整は凸面は縦方向のナデののち狭端面側を横方向のナデで、凹面は布目が残る。凹面周縁部は面取り状のケズリである。広端面凸面側の角は面取り状のナデを施す。G区土坑36から出土した。江戸時代に属する。

104の調整は凸面は縦方向の幅広い面取り状のナデののち狭端面側を横方向のナデで、凹面は布目が残る。凹面側面側・狭端面側はケズリである。広端面凸面側の角は面取り状のケズリを施す。P区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

105は縦方向に屈曲気味に丸みをもつ。調整は凸面は横方向のナデで、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が残る。熱を受けて淡黄色に変色し、やや歪む。T区遺構検出中に出土した。江戸時代中期以前に属する。

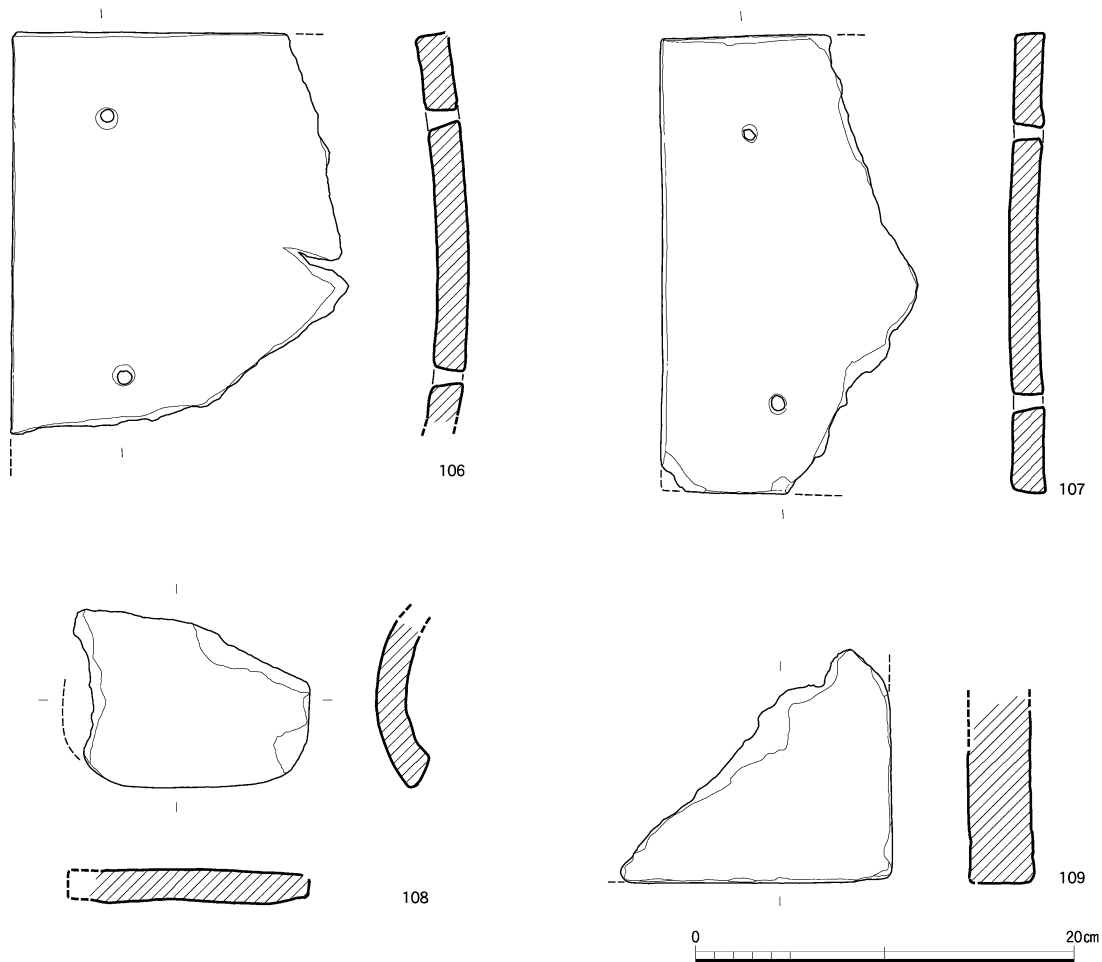


図 74 道具瓦・塙実測図（1：4）

鬼瓦 すべて破片で全容がわかるものはない。大型であったと推定できる。二の丸・本丸から出土している。

方形道具瓦（図 74 106・107） 完形に復元できる個体はない。ほとんど反りのない方形で、角部付近に穿孔する。106・107 とも二の丸からの出土である。

調整は 106・107 とも表面・裏面・側面はナデで、表面の角は面取り状のケズリを施す。穿孔は 1 方向からである。106 は C 区土坑 103、107 は C 区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

面戸瓦（図 74 108） 1 点のみ確認した。本丸からの出土である。

108 は下端部が隅丸長方形となる。調整は凸面は長辺方向の丁寧なナデで、凹面は布目が残る。凹面周縁部は縁取り状の幅広いケズリである。O 区土坑 14 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

塙（図 74 109） 完形に復元できる個体はない。

109 は方形で反りが無い。調整は表面・裏面・側面はナデである。G 区土坑 36 から出土した。江戸時代に属する。このほか図示していないが、M 区溝 205 から江戸時代中期以前に属するものが出土している。

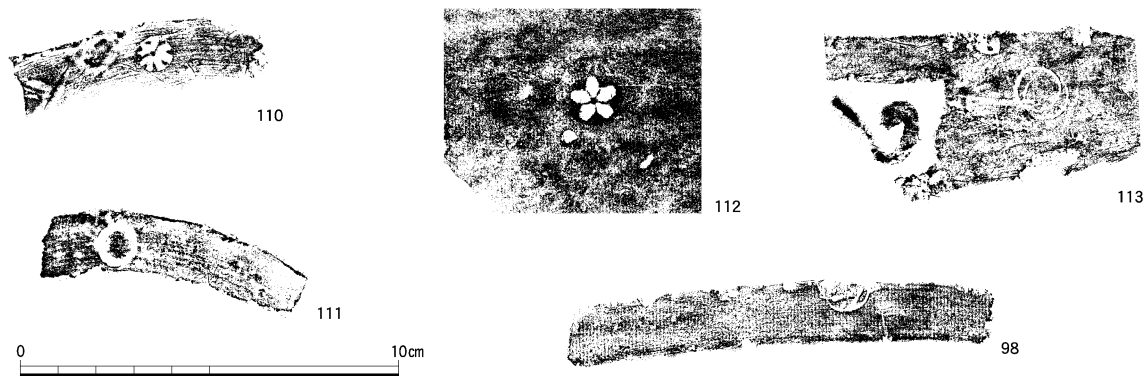


図 75 瓦刻印拓影（1：2）

刻印（図 75 98・110～113）5 点の瓦に刻印を認めた。

110 は 8 弁の花文で、部位は丸瓦玉縁側面である。Q 区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

111 は円形の圏線で、部位は丸瓦玉縁側面である。C 区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

112 は 5 弁の花文で、部位は丸瓦凸面である。C 区土坑 30 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

113 は細い円形の圏線が重複する。部位は軒平瓦瓦当面である。P 区土坑 29 から出土した。江戸時代に属する。

98 は細い円形の圏線で、一部が欠損して円弧状となる。部位は熨斗瓦端面である。I 区土坑 8 から出土した。江戸時代に属する。

（4）土製品

土製品には焼塩壺・土人形・土製容器・埴塙・取瓶などがある。

取瓶は B 区土坑 22 から数個体が出土した（図 65 - 18）。江戸時代の遺構であるが、室町時代前期から中期の土師器皿を転用したものであることから、土器の年代に近い時期に使用された可能性が高い。これ以外の土製品は、いずれも江戸時代に属する。

（5）石製品（図版 19・22、図 76）

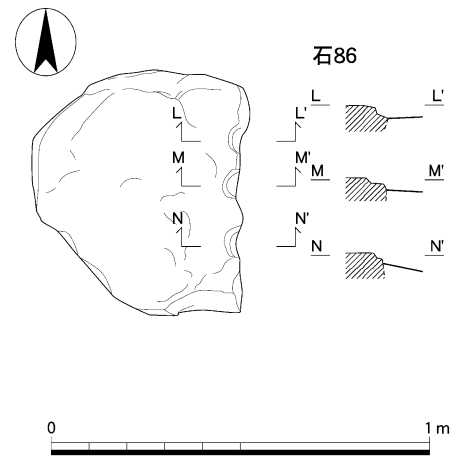
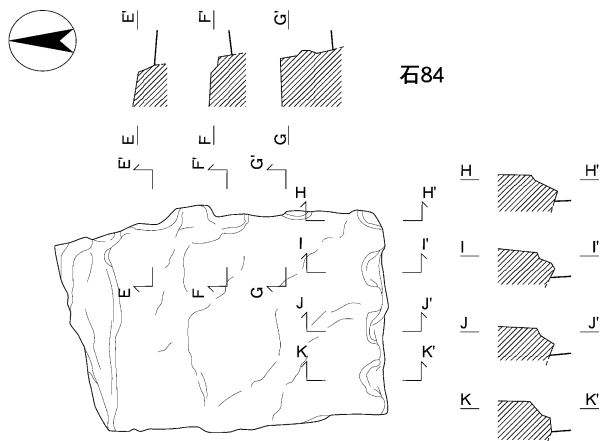
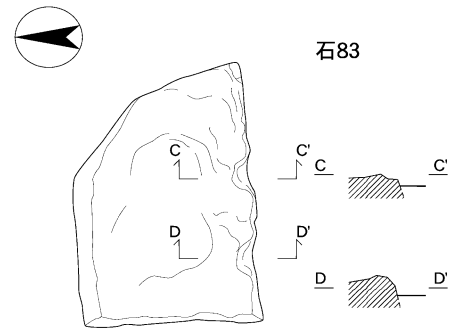
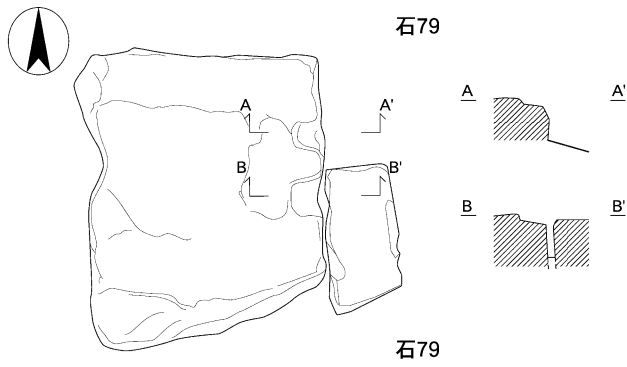
石製品には石鍋・砥石・凝灰岩片などがある。

石鍋は小破片のため図示していない。滑石製で、江戸時代の遺構から出土したが、形態の特徴から室町時代に属するものであることがわかる。

砥石は江戸時代の遺構から少量出土した。小破片に破損しているものが多く、図示していない。石材は灰色や淡黄色の粘板岩である。

ここで本丸御殿の礎石の矢穴痕について紹介する。¹⁶⁾

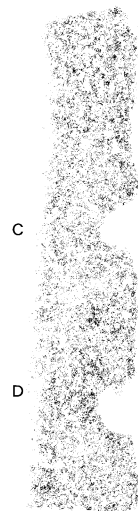
O 区石 79 および P 区石 83・石 84・石 86 には、石材を分割するために彫られた矢を挿入する



石79東面



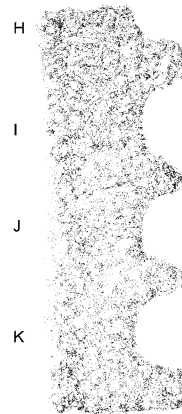
石83南面



石84東面



石84南面



石86東面



图 76 礎石矢穴痕拓影・実測図 (実測図 1 : 20 拓影 1 : 10)

ための矢穴痕が残る。石 79 の矢穴痕は東面に 2 個が残る。矢穴口長辺約 8 cm・深さ約 7 cm で、矢穴底は平坦である。矢穴口の間隔は約 7 cm である。

石 83 の矢穴痕は南面に 2 個が残る。矢穴口長辺約 9 cm・深さ約 5 cm で、矢穴底は船底状である。矢穴口の間隔は約 15 cm である。

石 84 の矢穴痕は東面に 3 個、南面に 4 個が残る。東面の矢穴痕は矢穴口長辺約 10 cm・深さ約 6 cm で、矢穴底は隅丸状である。矢穴口の間隔は約 10 cm・約 7 cm である。

南面の矢穴痕は矢穴口長辺約 11～13 cm・深さ約 6～7 cm で、矢穴底は船底状である。矢穴口の間隔は約 5 cm・約 3 cm・約 3 cm である。

石 86 の矢穴痕は東面に 3 個が残る。矢穴口長辺約 5～6 cm・深さ約 5 cm で、矢穴底は平坦である。矢穴口の間隔は約 8 cm・約 8 cm である。

森岡秀人氏・藤川祐作氏の分類に基づくと、これらの特徴は石 83・石 84 南面の矢穴痕が古 A タイプ、石 79・石 84 東面の矢穴痕が A タイプ、石 86 の矢穴痕が C タイプに該当する¹⁷⁾。古 A タイプは 13 世紀から 16 世紀にかけての時期、A タイプは元和～寛永期に定着し、寛文期までの時期、C タイプは 17 世紀後半以降現代までの時期に属する技法である。なお、礎石は現位置に保存し、埋め戻した。

(6) 金属製品 (図版 32、図 77)

金属製品には鉄釘・鉄鏝・鉄火箸・板状鉄製品・棒状鉄製品・筒状鉄製品・鉄滓、銅製水滴・煙管・銅耳搔・銅針金・銅釘・銅銭(元豊通寶・寛永通寶)・板状銅製品・棒状銅製品・筒状銅製品、鉛金具などがある。鎌倉時代から桃山時代の金属製品は銅銭(元豊通寶)のみで、ほかはすべて江戸時代に属する。

鉛金具(図 77 114) 薄い板状の破片である。灰白色から灰色を呈する。比重から鉛製の可能性が高い。用途は不明である。T 区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

銅製水滴(図版 32、図 77 115) 完形である。長方形の体部中央に低い水口が立ち上がり、角部に注口を作る。銅板を折り曲げて、接合して成形する。B 区包含層から出土した。江戸時代に属する。

不明銅製品(図版 32、図 77 116) 完形である。一端に扁平な円形の笠形を作り、もう一端には分厚い円筒形の部品をリベット止めする。P 区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

銅製耳搔(図 77 117) 完形である。平たい棒状の体部の先端に耳搔部を作る。E 区土坑 40 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

銅鉾(図版 32、図 77 118) 完形である。鋭く尖る体部に薄い隅丸長方形の笠形を作る。V 区包含層から出土した。江戸時代中期以前に属する。

鉄鏝(図版 32、図 77 119～121) いずれも完形である。長さ(渡り)には長短があるが、幅(爪)はほぼ同じである。断面はいずれも方形である。119 は P 区包含層、120・121 は G 区遺構検出

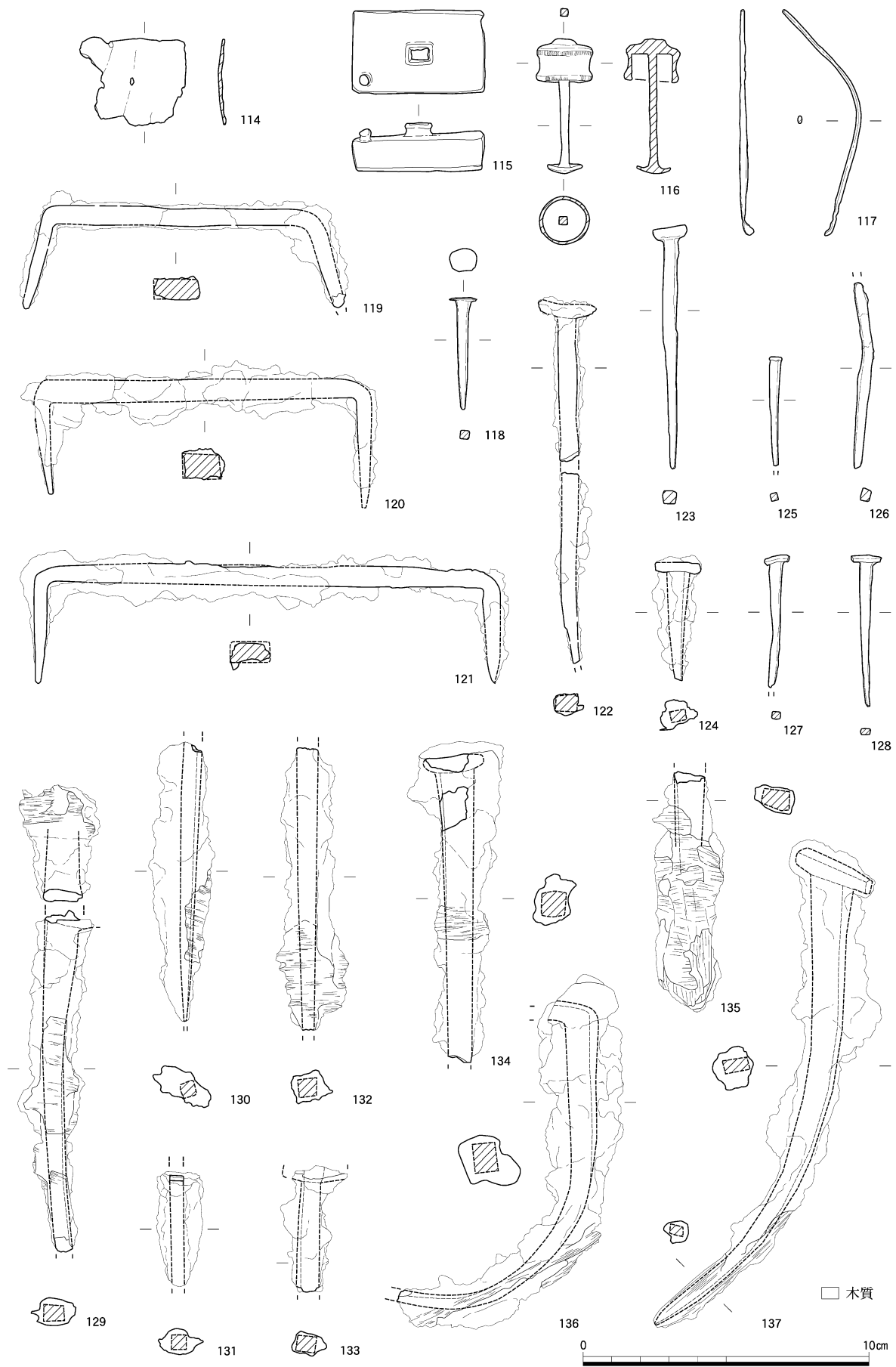


图 77 金属製品実測图 (1 : 2)

中に出土した。江戸時代に属する。

鉄釘（図版 32、図 77 122～137） 小型品から大型品まで形態は多様である。126 は両端が尖るので合釘の可能性もある。124・127・128 はD区遺構検出中、125・126 はQ区包含層、122・123 はU区土坑 55 から出土した。江戸時代中期以前に属する。

129～137 はD区木樋 88 を組み合わせていた鉄釘である。折損しているものが多く、また、錆により木質が付着しているため細部の詳細は不明である。大型で、体部断面は長方形または方形である。江戸時代前期に属する。

（7）木製品

木製品はほとんど出土していない。漆器椀片を認めたのみである。

（8）その他の遺物

貝殻・漆喰片・焼土粒・焼土塊・炭片などがある。いずれも江戸時代に属する。

特に本丸の各調査区では天明の大火の後片付けの土坑・整地層から焼土粒・焼土塊・炭片が大量に出土した。焼土塊は数cmから 10 cm程度の大きさがあり、焼けて橙色から赤褐色に変色している。スサの痕跡を残すものが多く、屋根の葺土や壁土が火災で変質したものである。中には塗り重ねの痕跡や表面の漆喰（白土）が残るものがあり、確実に壁土と判断できる。

5. ま と め

（1）二条城造営前の遺構と遺物

今回の調査で出土した最も古い遺物は、D区北部から出土した弥生土器の甕の破片である。2000年から2001年にかけての調査では、弥生時代中期の竪穴住居と考えられる遺構を検出しており、二条城北遺跡や堀川御池遺跡との関連が注目できる。¹⁸⁾

ほとんどの調査区では調査を江戸時代の遺構面・包含層でとどめているため、検出した桃山時代以前の遺構はD区池 107のみである。堆積状況から南西に向けて落ち込んでいると考えており、出土遺物は平安時代後期に属するが、池底までは掘り下げていないことでもあり、さらに時期が遡る可能性は高い。D区池 107に重複する、D区土坑 90に平安時代前期から後期の遺物が多く混入していることもこの推測の根拠である。調査区は左京二条二坊四町にあっており、おそらくは2000年から2002年にかけての調査で検出した池とは別に、冷然院中央部南西寄りにも池があったことを示している。¹⁹⁾冷然院の庭園の複雑な構造をうかがうことができる。

また、緑の園・二の丸の調査区を中心に、江戸時代以降の遺構・攪乱および包含層より平安時代前期から桃山時代の遺物が出土しており、桃山時代以前の遺構は後述する二条城造営に伴う分厚い盛土・整地層の下層に拮がっていることが推定できる。これらの遺物は堀の掘削や建物の建

設に伴い混入したものであろう。B区土坑 22 からは室町時代中期の土師器皿を転用した取瓶がまとまって出土しており、調査地周辺において何らかの金属生産が行われていたことがわかる。この時期の遺跡の実態の一端を示す遺物として評価できる。

(2) 二条城の遺構の変遷 (図 78)

今回の調査では二条城城内各所に調査区を設定したことにより、二条城造営の経過やそれ以降の変遷について多くの知見を得ることができた。²⁰⁾

徳川家康による慶長 7 年 (1602) からの造営に関連する遺構・整地層は、A区・B区・D区北部・F区・G区・H区・I区で認められた。

慶長期の整地層は暗褐色から黒褐色の色調の砂泥を基調としており、I区では 40 cm以上の厚さがあることが判明した。この下層に桃山時代以前の遺構が埋没していることになる。寛永期の整地層との境界が不明瞭なD区北部以外では、慶長期の整地層検出面の標高は、A区で約 39.6 m、B区で約 39.3 m、F区で約 38.1 m、G区で約 38.3 m、H区で約 38.1 m、I区で約 38.3 mで、北大手門付近が高く、中心部はほぼ平坦であったことがわかる。北に高く、南に低い旧地形が、二条城の造営にあたって一定の影響を与えたことが推測できる。

慶長期の遺構に関しては、B区で路面を検出したことから北大手門からの城内通路は現在と同じ位置にあったことが明らかとなり、北大手門が慶長期から一貫して同じ位置にあることが証明できた。また、慶長期の二条城を描いた『洛中洛外図』を詳細にみると、城内の東側築地塀沿い内側に台所が配置されていたことがわかる。I区土坑 211 が大型の竈であったとすると位置関係から台所に付属する施設であったことも十分に考えられる。

徳川秀忠・家光による寛永元年 (1624) からの増改築に関連する遺構・整地層はすべての調査区で認められた。二の丸・本丸では状況が異なっている。

二の丸での寛永期の整地層は黄褐色から褐色の砂泥を基調としており、褐色・黄褐色の粘質土のブロックや礫を含むことが多い。これらは調査地の基盤になっている土層に起源すると考えられ、堀の掘削により出た土砂を城内の盛土・整地に利用したことがわかる。寛永期の整地層はH区では約 40 ~ 50 cmの厚さがある。寛永期の整地層検出面の標高は、A区で約 39.8 m、B区で約 39.4 m、D区北部で約 38.4 m、C区で約 38.5 m、D区南部で約 38.5 m、E区で約 38.6 m、F区で約 38.4 m、G区で約 38.5 m、H区で約 38.4 m、I区で約 38.5 m、K区で約 38.6 m、M区で約 38.5 mである。慶長期と同様に北大手門付近が高く、二の丸の主要建物周辺はほぼ平坦であったことがわかる。北大手門付近と二の丸中心部の高低差は約 1.3 mである。

寛永期の遺構は各調査区で認めた。A区・B区で路面を検出したことから、寛永期の増改築にともない北大手門からの城内通路も改修されたことがわかる。礫を多く含む構築土の上に路面を整備する入念な作業が行われた。

D区木樋 88 は断面形が逆台形の掘形内に、板を箱形に組んで鉄釘で留めた木樋を据え、周囲や上部を粘土で覆って密封する構造である。東西方向に延びるが、西側で北に 3 ~ 4 度振る方位を

とる。これは二条城城内の他の建物の造営方位とも一致しており、寛永期の増改築で施工された施設であることは確実である。また、底部はわずかに西に向けて傾斜する。D区木樋88は二の丸庭園への導水施設と推測でき、北大手門から二の丸への勾配を利用して城外から水を引き、二の丸北側土塀に沿って西へ向きを変えて水を導いたものであろう。

D区石列92は東西方向の石組溝と考えられ、ひと抱え以上の大きさの石材を組み合わせる大規模な施設である。検出できた部分が狭いため全容は不明であるが、立地する位置からみて二の丸の主要建物周囲の区画・排水の機能を担った施設である可能性が高い。

本丸はいずれの調査区でも約10～20cmの厚さの表土・盛土の下層には、焼瓦・焼土や炭を含む褐色砂泥・暗褐色砂泥などが堆積している。これは後述する天明の大火の後の整地層と考えられ、下面は寛永期の遺構面となる。本丸御殿・多聞櫓の礎石・基礎の一部を良好な状態で検出しており、天明の大火で焼失した建物が遺跡として残されていることが判明した。

本丸での寛永期の整地層は、盛土とその上部の整地層に分けることができる。盛土は黄褐色から褐色の砂泥を基調とするが、多量の砂礫や粘質土・粘土ブロックを含んでおり、二の丸の整地層と同様に、堀の掘削により出た調査地の基盤となる土砂を積み上げたものであることがわかる。ただし、二の丸ではほぼ水平に積み上げているのに対して、本丸では大きなブロックで山積みしている。また、全体的に必ずしも締まりがよくない。盛土の状況はP区東部壁面で詳しく観察することができた。ここでは、140cm以上の厚さで黄褐色粘質土のブロックを含む灰黄褐色砂泥・礫を多く含む黒褐色砂泥・にぶい黄褐色砂礫などが本丸外側の堀に向けて傾斜して、言い換えれば本丸中心に向けて積み上げられていた。盛土は二の丸と本丸の現地表面の高低差からすると3m以上に及んだことになり、本丸の造成が極めて大規模な土木工事であったことが判明した。一方、上部の整地層は灰黄褐色やオリーブ褐色の砂泥を基調としており、比較的粘質できめが細かい。厚さは5～20cm程度で、削平されたためか一部の調査区では確認することができなかった。盛土は本丸全体の造成土、上部の整地層は建物などの施設の造営にともなうものであろう。

寛永期の整地層検出面の標高は、石垣土塁上のN区を別にして、O区で約42.7m、P区東部で約42.7m、P区西部で約42.6m、Q区で約42.7m、R区北部で約42.6m、R区南部で約42.6m、S区で約42.7m、T区で約42.3m、U区で約42.5m、V区で約42.6m、W区で約42.5mである。ほぼ平坦とみてよいが、わずかに西に向けて傾斜する状況にある。

現在の本丸御殿は、寛永期の増改築で徳川秀忠の宿所として造営された本丸御殿が天明の大火で焼失した跡に、明治26年(1893)になって京都御苑にあった桂宮邸を移築したものである。寛永期の本丸御殿は詳細な指図が残されている²¹⁾。検出したO区・P区西部・Q区・R区南部の礎石列の位置を指図と重ね合わせると、O区礎石列は遠侍身舎東側、P区西部礎石列は坊主部屋から東側への廊下、Q区柱列は御年寄衆部屋の一部、R区南部柱列は御台所の一部にあたる。

これらの内、R区南部礎石の間隔は約1.9mの等間となるようであるが、O区・P区西部では間隔が不揃いで、O区礎石列では大きい石材の間にやや小振りの石材もある。小振りの石材の中には熱を受けて変色した痕跡があるものがあり、天明の大火以前の構築物の一部であったこと

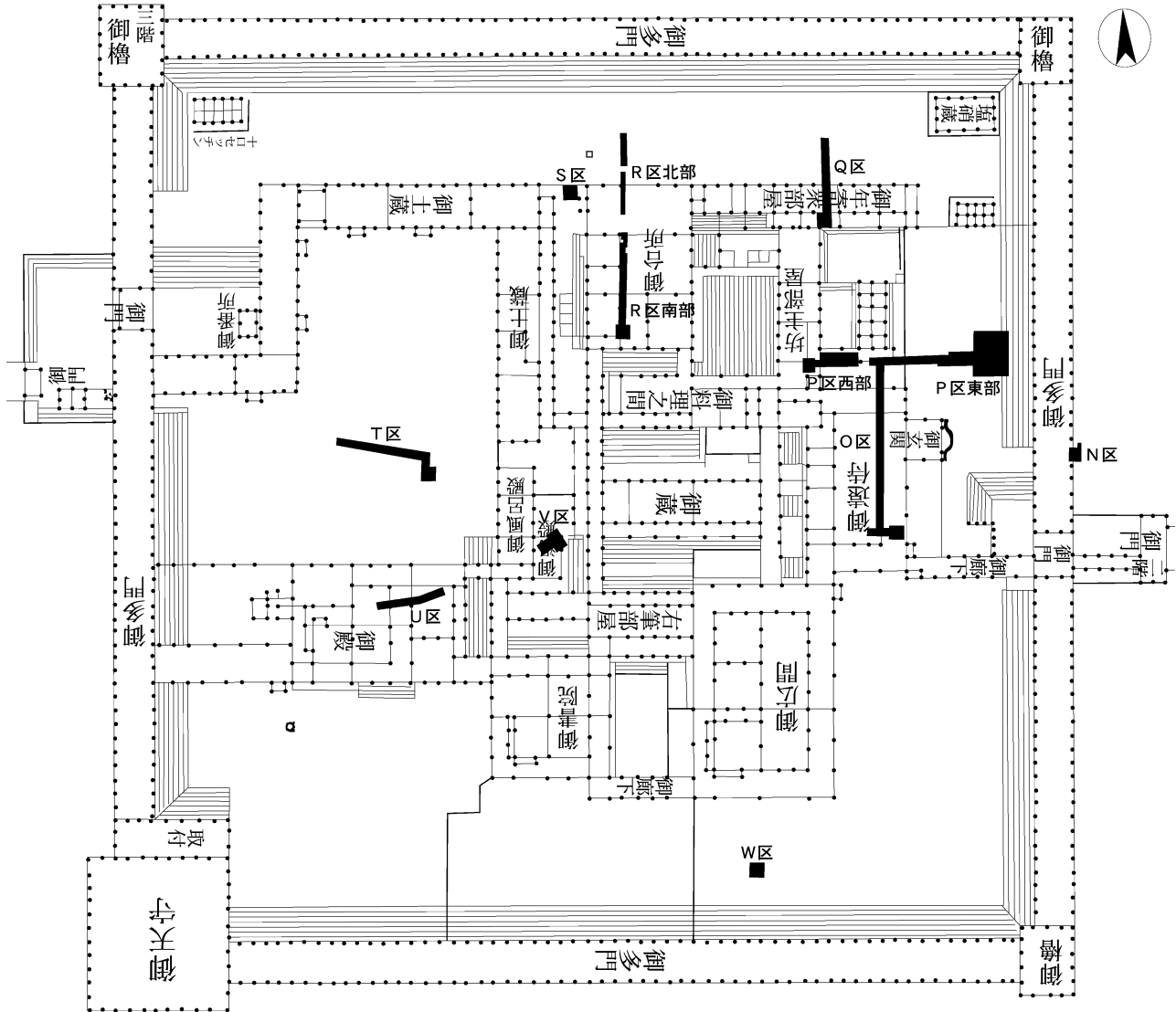


図 78 寛永期本丸御殿絵図と調査位置
『行幸御殿并古御建物御取解不相成以前 二条御城中絵図』中井正知家蔵より作図

は確実である。一方、P区礎石列では寛永期の増改築以降の新しい技法の矢穴痕がある石材があり、²²⁾本丸御殿の造営から修理には複雑な過程があったことが想像できる。

また、本丸御殿礎石列の周囲で検出した石組溝は、P区西部溝24が遠侍東側、Q区溝107が御年寄衆部屋北側、R区北部石75が御台所北側、S区溝27が御台所西側にそれぞれ位置している。これらは規模・構造が共通しており、主要建物の周囲を区画する溝と考えている。

寛永12年(1635)の徳川家光の上洛以降、幕末まで将軍の上洛は長く中絶する。寛永3年(1626)の二条城行幸の後、城内の建物・施設は、順次、移築・解体され、残った建物も荒廃が進んだようである。貞享3年(1686)から宝永2年(1705)にかけては、約20年間にわたって継続的に二の丸・本丸の殿舎の修理が行われた。二の丸北東部に設定したC区では、狭い調査区全体に何度も瓦がまとめて廃棄された状況を認めた。主要建物から少し離れた空閑地に不要になった瓦を処理したことが考えられる。

天明8年(1788)1月、京都の大部分を焼き尽くした天明の大火により、二条城でも本丸御殿、二の丸西門・長櫓・乾櫓などが類焼した。調査ではN区・O区・Q区・R区南部で熱を受けて変色・剥離した建物礎石を検出したことから本丸東側の多聞櫓・本丸御殿が焼失したことを裏付けることができた。焼瓦を中心とする被災した遺物は、T区・U区・W区の状況にみられるように本丸御殿西側・南側を中心に廃棄されていた。それぞれの調査区は本丸御殿の周辺部にあたっており、空閑地に廃棄物を処理したことがわかる。また、本丸の広い範囲に焼瓦・焼土を含む包含層が広がっていることから、本丸全体にわたって天明の大火の後に嵩上げ状の整地が行われたことが明らかとなった。本丸御殿の礎石などはこの層により覆われてしまい、今日まで保存されたわけである。一方、二の丸では被災した遺物の出土は少なく、記録どおり本丸を含む城内西部の被害が大きかったことがわかる。

本丸出土の天明の大火に関わる遺物として陶磁器類・瓦・金属製品・焼土塊・焼土粒・炭片などを採集している。陶磁器類には江戸時代前期に属する中国製の染付椀・染付鉢が熱を受けて表面が白濁しているものがある。瓦は黄色や橙色に変色するほか熱で変形したり、葺土が溶着したものが多くある。銅製品には溶融して原形をとどめていないものがある。焼土塊・焼土粒は壁土あるいは屋根の葺土であるが、橙色から赤褐色に変色している。これらはいずれも火災の激しさを示す貴重な資料である。

今回の調査で検出した最も新しい時期の遺構は、G区東部で検出した柱穴群である。数cmから15cmの大きさの石を含んでおり、建物の礎石据付穴の可能性を考えている。調査では近代の下水土管理土上面で成立する遺構であることが判明した。ほかにもD区土坑70・土坑73・土坑75など検出面や構造が近似する遺構がある。いずれも出土遺物などから時期を限定することはできないが、D区土坑70・土坑73・土坑75がD区南部北東部壁際の大型の基礎と相対していることなどから、近代になって二条城に大がかりな整備が行われた大正天皇の大典に伴う遺構と推測している。

(3) 瓦の種類と用途

江戸時代の陶磁器類の出土量は遺物全体からみれば必ずしも多くはない。黒織部の抹茶椀など江戸時代初期から前期の二条城で行われた儀礼・行事あるいは瀟洒な生活の片鱗をうかがわせるものもあるが、陶磁器類の多くはB区土坑26から出土した土瓶を代表とするような、江戸時代中期から後期の二条城在番の武士たちが使用した日常雑器類が目立つ。

ここでは出土遺物の大半を占める瓦について若干の検討を行うこととする。

調査で出土した瓦には軒平瓦・軒丸瓦・軒棧瓦・平瓦・丸瓦・棧瓦・鬼瓦・熨斗瓦・菊丸瓦・輪違瓦・面戸瓦・その他の道具瓦がある。

慶長期・寛永期の主要建物は台所以外は瓦葺きではなく板葺きであったことが指摘されている²³⁾。ただし、『洛中洛外図』などでは棟の部分にのみ瓦を使用する、いわゆる葺棟として描かれている。出土した軒平瓦・軒丸瓦の個体数は菊丸瓦に比べてかなり少なく、この反映と考えている。

その後、貞享3年（1686）の建物の破損検分の記録では、二の丸・本丸の主要建物が瓦葺きとなっていたことが示されている。出土した軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦の多くはこの頃から本格的に使用されたものとなる。出土した瓦は層位的には江戸時代初期・前期・中期・後期に分離することができるが、形態や技法の特徴に時期差を認めることはできなかつた。この要因としては、実際には修理や火災・地震などの災害を契機として、その段階で使用されていた各時代に製作された瓦が一括して廃棄されるため、それぞれの遺構に江戸時代各時期の瓦が含まれているためと考える。

出土した瓦は城郭の殿舎に使用されていたものであることから、おしなべて大振りである。その中でも軒平瓦に3種、軒丸瓦に4種、平瓦に3種、丸瓦に4種の大きさの違いを看取でき、軒平瓦・平瓦、軒丸瓦・丸瓦でそれぞれ対応している。大きさの違いは使用した建物や屋根の部位の違いを反映していることが考えられ、特に二の丸東部の土堀内側に設定したI区から出土した比較的小型の平瓦・丸瓦は、土堀に使用されていた可能性が高い。

鬼瓦・熨斗瓦・菊丸瓦・輪違瓦は建物の棟を飾る瓦である。現在の二の丸御殿の屋根にもこれらの瓦がふんだんに使用されており、建物を荘厳にしているようすを実感することができる。二の丸・本丸からそれぞれの種類の瓦が出土した。

出土した鬼瓦はすべて破片で、全容がわからないため図示していない。しかしながら、かなり大型の破片があり、このことは鬼瓦の大きさ、すなわち棟の構造の大きさを反映しているものといえよう。

図示した熨斗瓦は、いわゆる切熨斗で、凹面側の切目の沈線や櫛状工具による沈線により判別することができた。しかしながら、棟における熨斗瓦の使用状況からみればあまりにも少なく、これらはむしろ特殊な個体で、熨斗瓦の多くは破片では平瓦と区別が付かない状態で出土しているのであろう。あるいは平瓦を半裁して熨斗瓦として使用した割合が多かったと考えることができる。

菊丸瓦は小型のものと大型のものに分けることができる。大きさの違いは使用される棟の部位によって使い分けられたことの反映である。それにしても文様の種類が多く、瓦当部分の接合技法や体部の形態にも複数の種類がある。その一方で二の丸・本丸で同範もしくは同文の瓦がある。慶長期の造営・寛永期の増改築にあたって取り急ぎ文様の種類を問わずに数を集積して使用した結果なのか、あるいは補修が行われるたびに異なる菊丸瓦を調達して使用したものか、いろいろと推測することができるが、原因を特定することは難しい。こうした多様性が二条城の菊丸瓦の特徴なのかもしれない。

輪違瓦の中にはやや小型のものがあるが、菊丸瓦のように大きさに明確な区別はない。しかしながら、縦断面の形状や凹面側の調整技法には複数の種類があり、菊丸瓦と同様の多様性を特徴として認めることができる。

そのほか面戸瓦や方形で角部付近に穿孔する瓦があるが、さらに他にも図示していない用途不明の瓦があり、棟の構造・装飾が非常に多様であったことが想像できる。

なお、軒棧瓦・棧瓦の出土量は瓦全体の中ではきわめて少ない。平瓦・丸瓦をはじめとする他の種類の瓦と共伴して出土しているが、主要殿舎ではなく付属建物や番衆小屋などに使用されていたものと考えている。

以上のように、今回の調査は一つ一つの調査区の面積は必ずしも大きいものではなかったが、二条城城内各所において慶長期の造営、寛永期の大規模な増改築、天明の大火の被害の痕跡など、二条城の歴史的な変遷を実証する遺構・遺物を検出することができた。また、冷然院の庭園の池など、二条城造営前の遺跡も確認することができた。今後も堅実に調査例を積み重ねることにより、二条城を含む調査地の歴史の復元をさらにすすめることが必要である。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局、2007年。
- 2) 「22 宮南東部(6)」『平安宮Ⅰ 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
- 3) 「26 宮南東部(20)」『平安宮Ⅰ 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
- 4) 「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1983年。
- 5) 「左京二条二坊(3) 史跡二条城」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1984年。
- 6) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-15 史跡旧二条離宮(二条城)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2003年。
- 7) 註6)に同じ。
- 8) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-13 史跡旧二条離宮(二条城)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2002年。
- 9) 「史跡旧二条離宮」『平成19年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2010年。
- 10) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-12 史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮神祇官・平安京冷然院跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2002年。『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-13 史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮廡院跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2005年。『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-16 史跡旧二条離宮(二条城)・平安京冷然院跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2006年。
- 11) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-14 史跡旧二条離宮(二条城)』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2010年。

- 12) 註6)に同じ。南側が2000年から2001年にかけての調査の3区、北側が2001年から2002年にかけての調査の8区にあたる。
- 13) 平安時代後期以降、無釉化がすすんだ灰釉陶器を「灰釉系陶器」と呼称する。『平安京左京二条四坊十町 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第19冊』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2001年。
- 14) 平安時代からつながる橙色から褐色の胎土の系統の土師器を「赤色系土師器」、鎌倉時代後半以降に増加する白色の精良な胎土の系統の土師器を「白色系土師器」とする。
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
- 15) 鉄線による切り離し痕はすべていわゆる「コビキB」手法である。『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会、1984年。
- 16) 矢穴の観察・分類については、森岡秀人氏に調査現場にてご教示をいただいた。
- 17) 森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究』180、2008年。
- 18) 註6)に同じ。
- 19) 註6)に同じ。
- 20) 二条城の歴史の変遷については、川上貢「第三編 二条城と伏見城の殿舎」『日本建築史論考』中央公論美術出版、1998年に多くを学んだ。
- 21) 谷直樹編『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本』思文閣出版、2003年。
- 22) 註17)に同じ。
- 23) 註20)に同じ。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-15							
編著者名	山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう) へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入 にじょうじょうちやう 二条城町541番 地 二条城	26100	A453 1	35度 00分 55秒	135度 45分 01秒	2009年11月 4日～2010 年1月27日	749m ²	防災・防犯 設備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城)	史跡	弥生時代 ～古墳時代		弥生土器・須恵器				
平安京跡	都城跡	平安時代	池	土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器 ・灰釉陶器・緑釉陶器 ・輸入陶磁器、瓦				
		鎌倉時代 ～桃山時代	池	土師器・瓦器・須恵器 ・焼締陶器・灰釉系陶器 ・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦、土製品、石製品				
		江戸時代	路面、溝、土坑、 柱穴、石列、集石、 礎石、木樋、整地面	土師器・瓦器・焼締陶器 ・施釉陶器・磁器・ 輸入陶磁器、瓦、土製品、 石製品、金属製品、 木製品				
		近代	柱穴					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-15

史跡二条離宮（二条城）

発行日 2010年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961